

## はじめに

平成 11 年 4 月に施行された「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」は、明治 30 年以來 100 年ぶりに感染症対策の枠組みを抜本的に改正し新しい法体系に統合しました。現代の感染症の脅威と感染症を取り巻く状況の変化に対応するため、平成 15 年 11 月 5 日には「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律及び検疫法の一部を改正する法律」が施行され、感染症の類型の見直しと重症急性呼吸器症候群（SARS）、痘そうなどがあらたに追加されました。しかし、近年の公衆衛生を取り巻く社会環境の変化は目覚ましく、結核、マラリア、ウエストナイル熱、SARS、鳥インフルエンザ、エキノコックス症など時代の変化とともに常に感染症の脅威にさらされています。さらに平成 16 年 10 月 1 日には動物由来感染症対策の充実・強化を図るため、獣医師が届出を行う感染症と動物の追加が行われました。

神奈川県では健康危機管理の観点からマニュアルの徹底、適宜見直しを含めた体制の構築と、発生時の対応など感染症対策に努めております。

この冊子は、平成 15 年の本県における感染症発生動向調査、微生物検出情報、関連調査及び研究報告等を収録したものであります。

今後の感染症対策の参考に多少なりともお役にたてれば幸いに存じます。

なお、本冊子の作成にあたり、関係各方面の多数の方々から、貴重な研究資料をご提供いただきましたことを厚くお礼申し上げます。

平成 17 年 3 月

神奈川県衛生研究所長

今 井 光 信



# 目 次

はじめに

## I 感染症発生動向調査

## II 細菌性感染症 ..... 17

### 1 腸チフス・パラチフス

- (1) チフス菌等のフェージ型別結果（神奈川県） ..... 17
- (2) チフス菌等のフェージ型別結果（横浜市） ..... 17
- (3) チフス菌等のフェージ型別結果（川崎市） ..... 18

### 2 その他の感染症

- (1) 幼稚園で発生した腸管出血性大腸菌O26による集団食中毒事例（横浜市） ..... 18
- (2) 散発下痢症からの病原菌分離状況について（神奈川県） ..... 20
- (3) 海外渡航者下痢症からの病原菌分離状況（横浜市） ..... 20
- (4) 下痢症患者からの腸管病原菌検出状況（川崎市） ..... 21
- (5) 散発下痢症からの腸管系病原菌検出状況（横須賀市） ..... 23
- (6) 2類及び3類感染症発症者の家族等の病原菌検索について（相模原市） ..... 24

### 3 河川等の環境調査

- (1) 河川水腸管系病原菌調査（神奈川県） ..... 25
- (2) 腸管系病原菌検索（横浜市） ..... 26
- (3) 河川水腸管系病原菌検索（横須賀市） ..... 29

## III ウイルス性感染症 ..... 33

### 1 日本脳炎

- (1) 日本脳炎感染源調査（神奈川県） ..... 33

### 2 インフルエンザ

- (1) 神奈川県の発生状況 ..... 33
- (2) インフルエンザの動向（神奈川県） ..... 35
- (3) インフルエンザの動向（横浜市） ..... 36
- (4) インフルエンザの動向（川崎市） ..... 40
- (5) インフルエンザ感受性調査（神奈川県） ..... 41

### 3 その他の感染症

- (1) ウエストナイル熱媒介蚊のサーベイランス（神奈川県） ..... 43
- (2) ウエストナイルウイルスのサーベイランス（横浜市） ..... 43
- (3) ウエストナイルウイルス媒介蚊の調査について（横須賀市） ..... 45
- (4) 神奈川県（横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市を除く）における麻疹抗体保有状況 ..... 45
- (5) 神奈川県（横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市を除く）における風疹抗体保有状況 ..... 46
- (6) HIV患者・感染者の状況について ..... 48

IV その他の感染症 .....	61
1 神奈川県で発生したつつが虫病について .....	61

～資 料～

1 平成15年 全数把握対象の感染症 .....	63
2 細菌検出状況 .....	64
3 ウイルス検出状況 .....	67
4 予防接種実施状況 .....	73
5 神奈川県感染症機関分布図 .....	75
6 神奈川県感染症機関一覧表 .....	76

# I 感染症発生動向調査



# I 感染症発生動向調査

## 全数把握対象疾患

### 《一類感染症》

感染症法の改正により、新たに一類感染症に指定された「重症急性呼吸器症候群」および「痘そう」も含め、県内で一類感染症の報告はなかった。

### 《二類感染症》

細菌性赤痢は県内で 38 例の報告があり、その内訳は横浜市 12 例、川崎市 9 例、横浜・川崎市を除く神奈川県域（以下「県域」）が 17 例（うち横須賀市 2 例、相模原市 4 例）で、そのほとんどは海外渡航者による持ち込み例であった。

コレラの報告は川崎市から 2 例、県域（相模原市）から 1 例あった。

腸チフスの報告は横浜市 2 例、県域（横須賀市）から 1 例あった。

パラチフスは県内で 10 例の報告があった。内訳は横浜市 6 例、川崎市 1 例、県域 3 例（うち横須賀市、相模原市各 1 例）で、横須賀市の患者は渡航歴がなかった。

その他の二類感染症ジフテリア、急性灰白髄炎の報告はなかった。

### 《三類感染症》

県内で 388 例の報告があった。その内訳は横浜市 336 例、川崎市 20 例、県域 32 例（うち横須賀市 1 例、相模原市 2 例）であった。平成 15 年は横浜市の幼稚園における 026 による集団食中毒事例の発生（後述）に伴い、昨年に比べ 3 倍以上の報告数となった。菌型は当該事例の 026 を除くと例年と同様 0157 がほとんどを占めた。

### 《四類感染症》

全数把握対象 30 疾患のうち、県内で報告のあった疾患は 6 疾患で、オウム病が 5 例（内訳は横浜市 1 例、県域 4 例（うち横須賀市、相模原市各 1 例））、ツツガムシ病が 11 例（内訳は横浜市 1 例、県域 10 例）、 Dengue 熱が 2 例（内訳は横浜市 1 例、県域 1 例）、マラリアが 12 例（内訳は横浜市 10 例、県域 2 例（うち相模原市 1 例））、ライム病が 1 例（横浜市）、レジオネラ症が 6 例（内訳は横浜市 2 例、川崎市 1 例、県域 3 例（うち相模原市 2 例））であった。

### 《五類感染症》

全数把握対象 14 疾患のうち、県内で報告のあった疾患は 11 疾患であった。

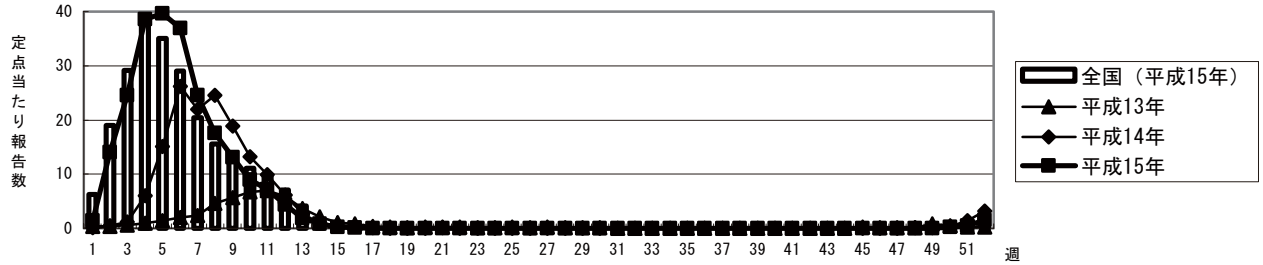
アメーバ赤痢の報告が 47 例（内訳は横浜市 29 例、川崎市 10 例、県域 8 例（うち横須賀市 3 例、相模原市 1 例））、急性ウイルス性肝炎が 34 例（内訳は横浜市 8 例、川崎市 1 例、県域 25 例（うち A 型肝炎は 7 例））、クロイツフェルトヤコブ病が 4 例（内訳は県域 4 例（うち相模原市 2 例））、劇症型溶血性レンサ球菌感染症が 1 例（川崎市）、後天性免疫不全症候群が 86 例（内訳は横浜市 48 例、川崎市 14 例、県域 24 例（うち横須賀市 2 例、相模原市 3 例））、ジアルジア症が 20 例（内訳は横浜市 15 例、県域 5 例（うち横須賀市 3 例））、髄膜炎菌性髄膜炎が 5 例（内訳は川崎市 1 例、県域 4 例（うち相模原市 1 例））、梅毒が 10 例（内訳は横浜市 1 例、川崎市 8 例、県域 1 例）、破傷風が 2 例（内訳は横浜市 1 例、県域 1 例）、バンコマイシン耐性腸球菌感染症が 8 例（内訳は横浜市 2 例、県域 6 例（うち相模原市 1 例））、急性脳炎が 1 例（県域）であった。

週報対象疾患（週別は横浜市・川崎市を除く）

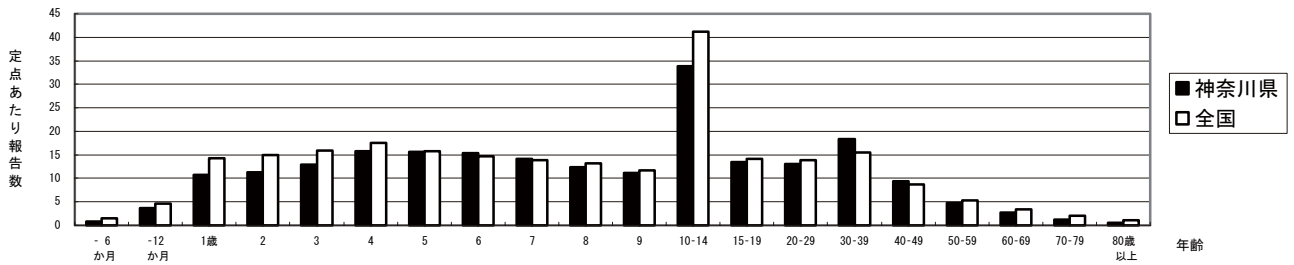
インフルエンザ（高病原性鳥インフルエンザを除く）

5週をピークに4週から8週まで全国報告数を上回り、10～14歳に報告が多くみられた。

週別



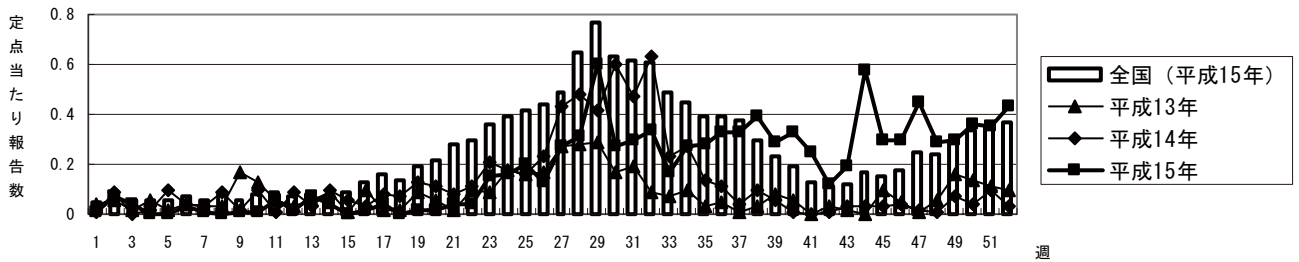
年齢別



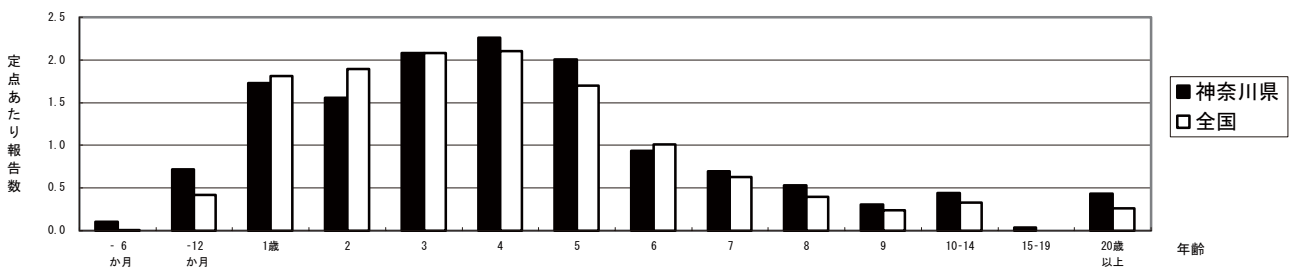
咽頭結膜熱

28週～32週、44週前後に流行がみられ、年齢では例年同様6歳以下に多く報告がみられた。

週別



年齢別

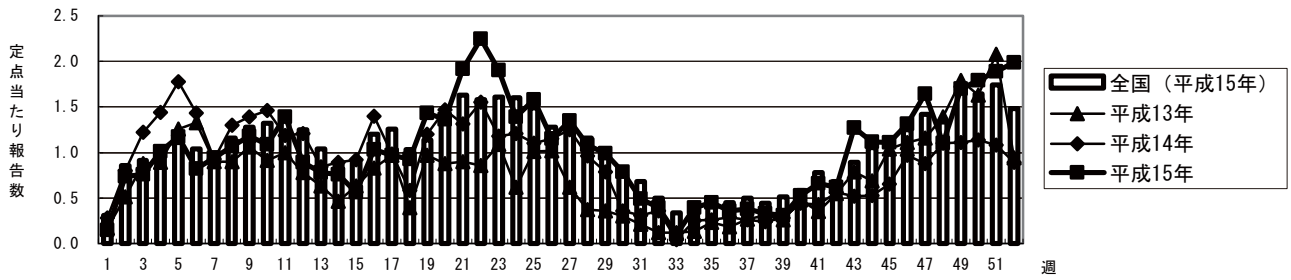




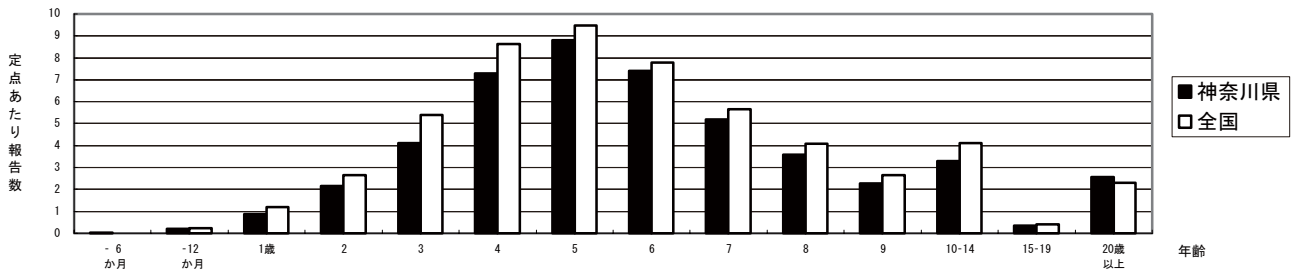
## A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎

22 週、52 週をピークに断続的な小流行がみられた。10 歳代以下でほとんどが占められていた。

週別



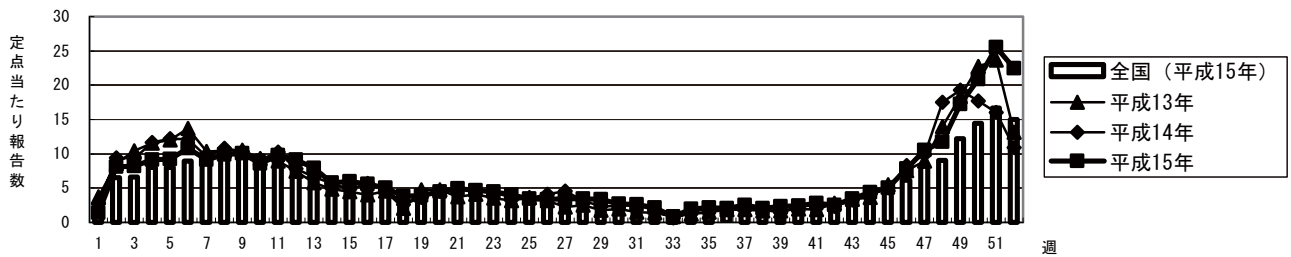
年齢別



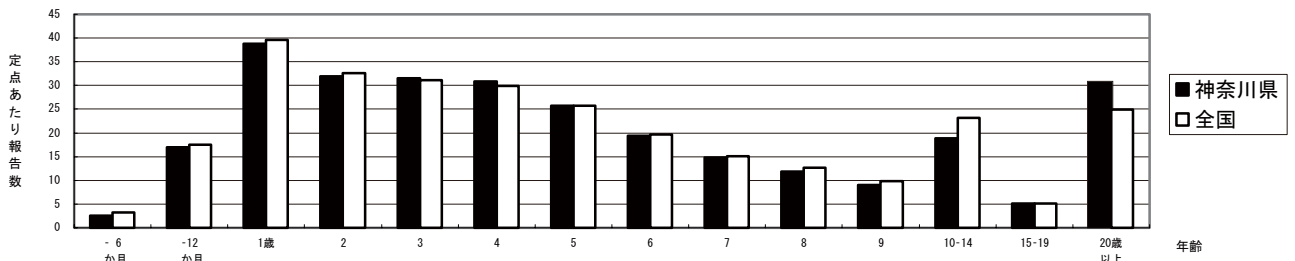
## 感染性胃腸炎

週別、年齢別とも例年同様の傾向がみられた。51 週にピークがあったが全国状況とほぼ同様であった。

週別



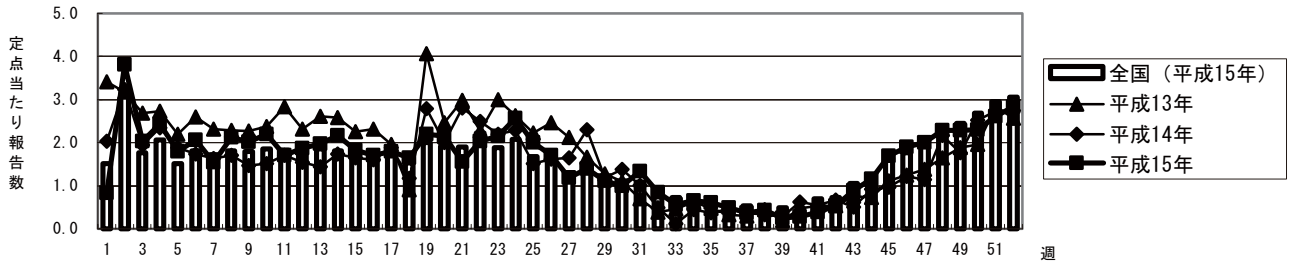
年齢別



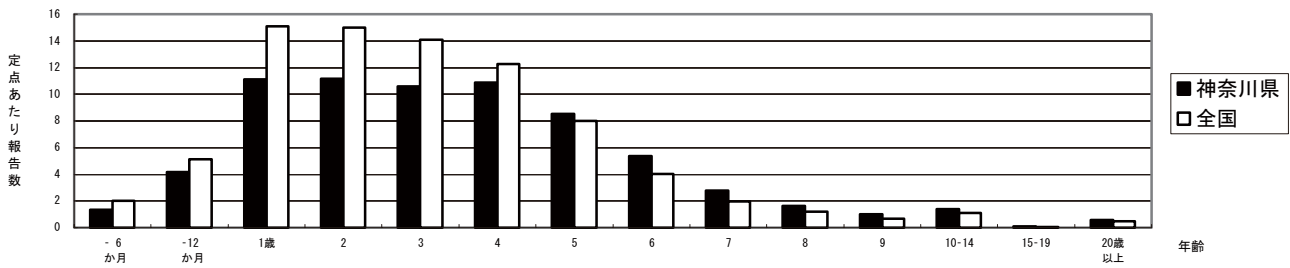
## 水痘

例年、年末から初夏にかけて流行がみられる疾患である。全国とほぼ同様の発生傾向で推移した。

週別



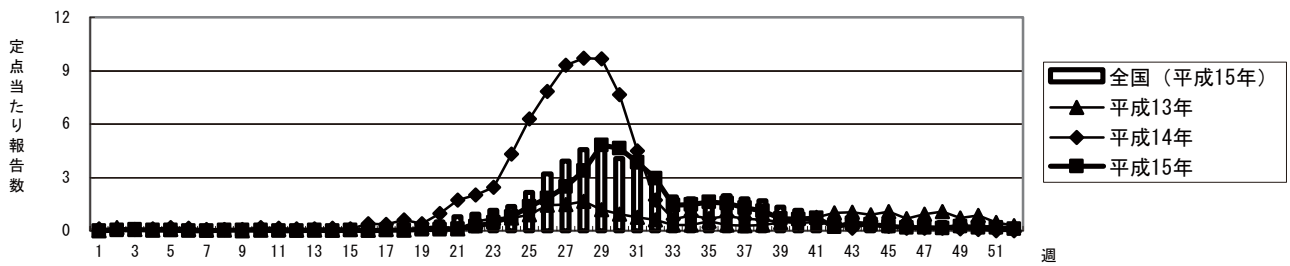
年齢別



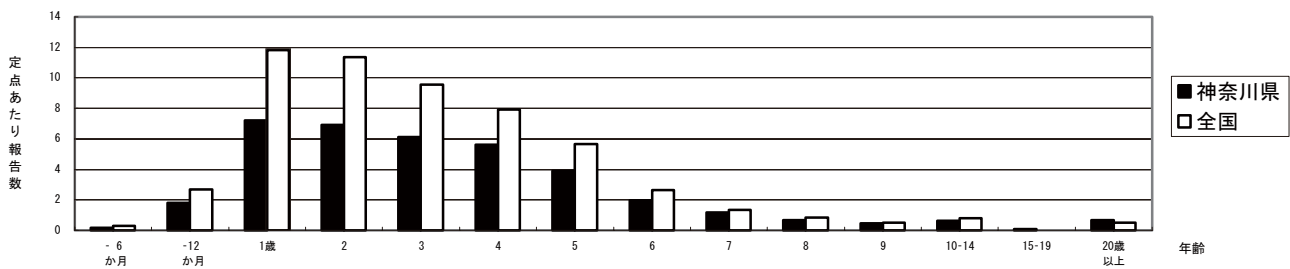
## 手足口病

全国と同様の傾向を示し、5歳以下がほとんどを占めていた。

週別



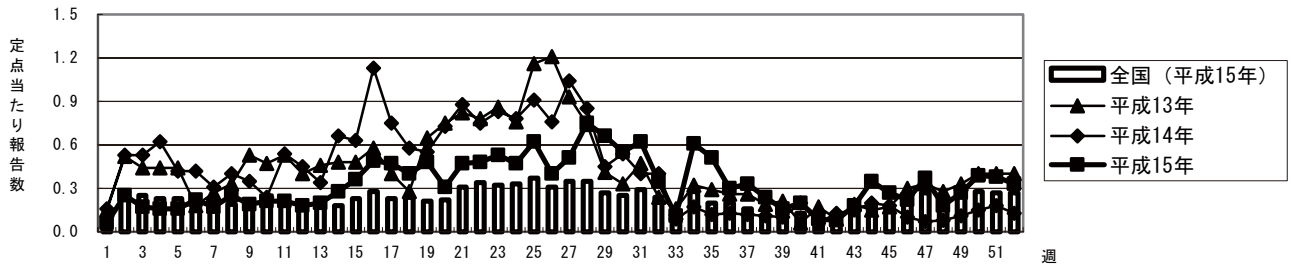
年齢別



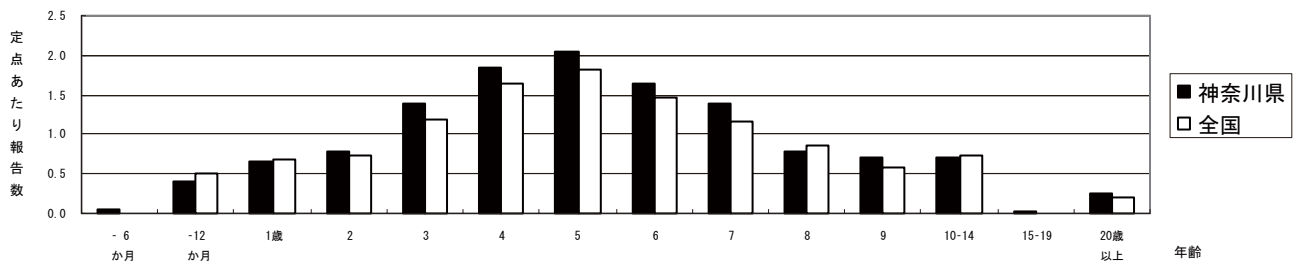
## 伝染性紅斑

例年、春から初夏にかけて流行がみられ、28週にピークがみられた。

週別



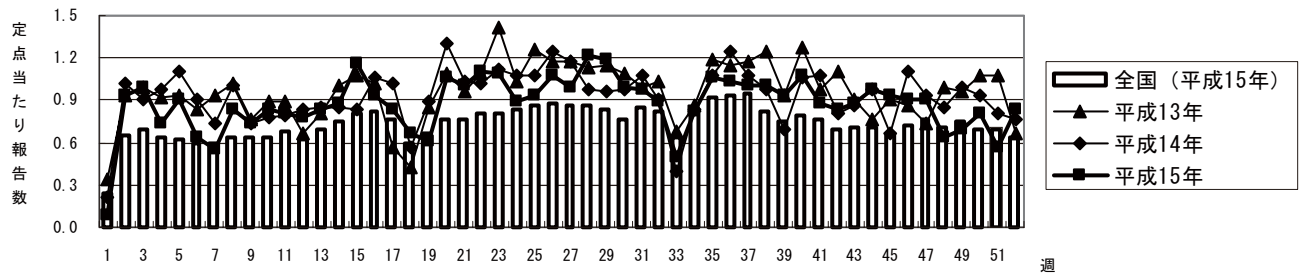
年齢別



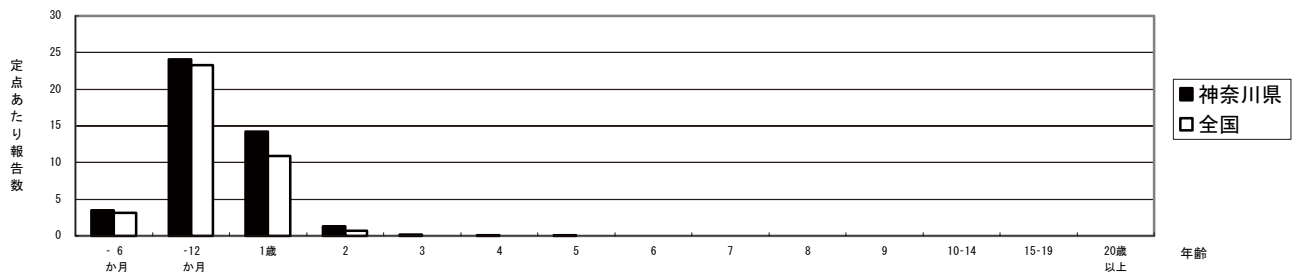
## 突発性発しん

ほとんど季節変動はなく、年間を通して流行がみられる。全国に比べやや高い傾向がみられた。

週別



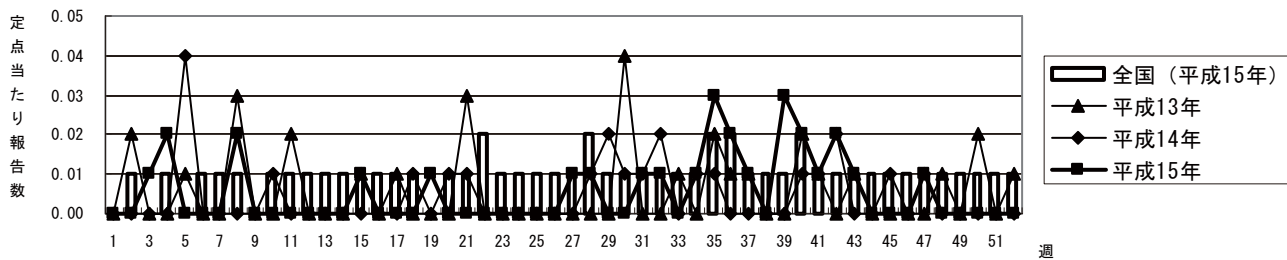
年齢別



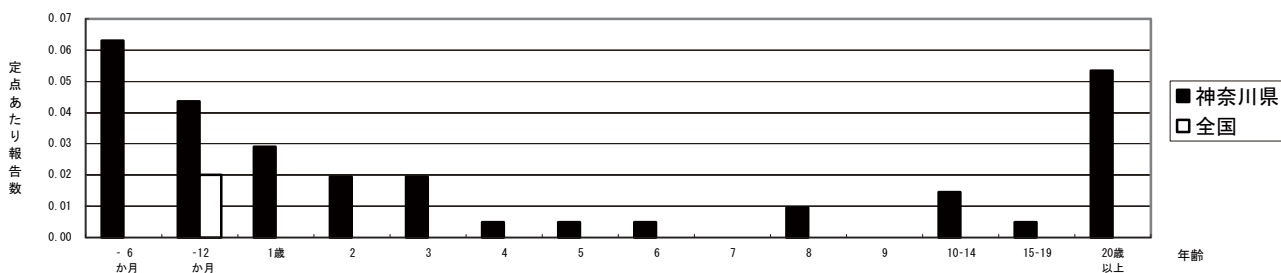
## 百日咳

年間を通じ散発的な発生に推移していた。

週別



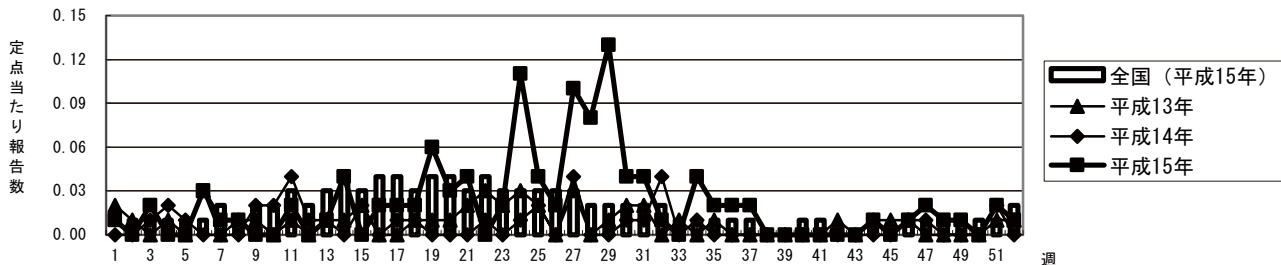
年齢別



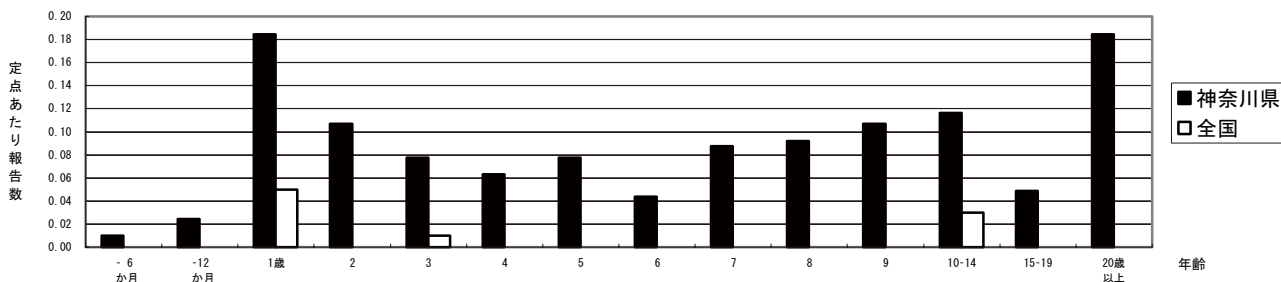
## 風しん

24～29週に報告が目立ち、1歳および20歳以上に多くみられた。

週別



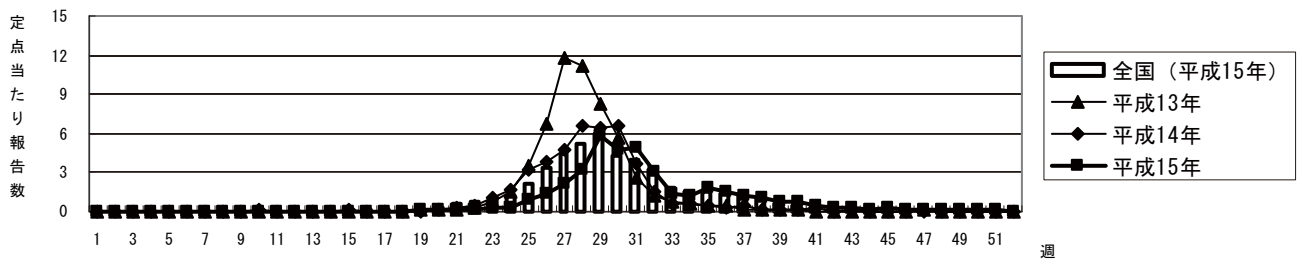
年齢別



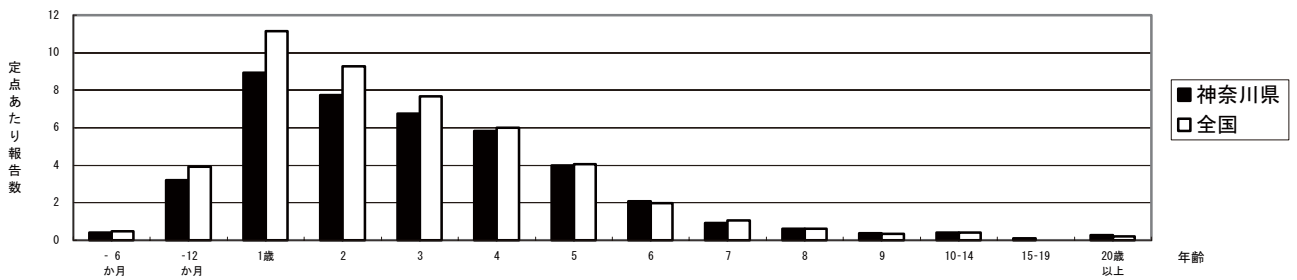
## ヘルパンギーナ

例年、夏季に流行がみられている。29週にピークがみられた。

週別



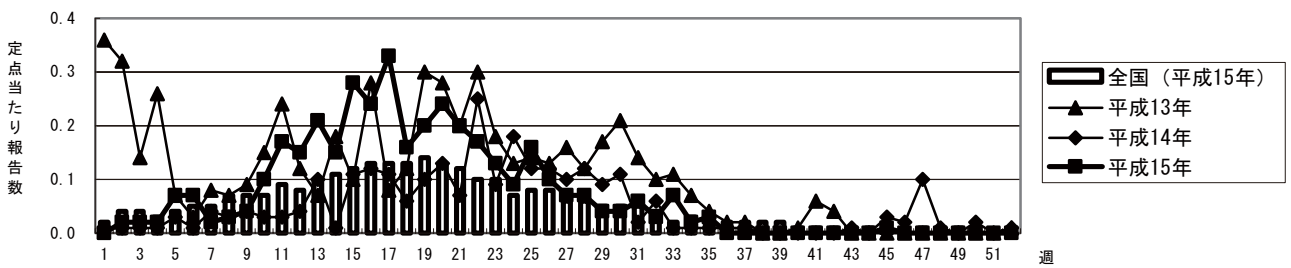
年齢別



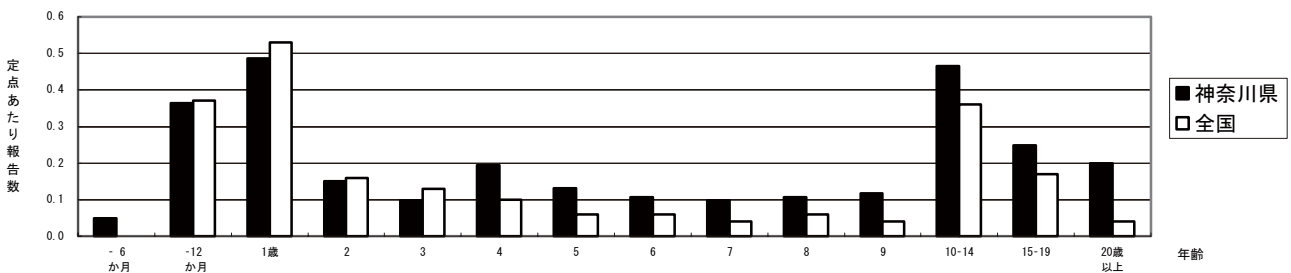
## 麻疹(成人麻疹を除く)

15～17週に流行がみられ、1歳以下、10～14歳の報告が目立った。

週別



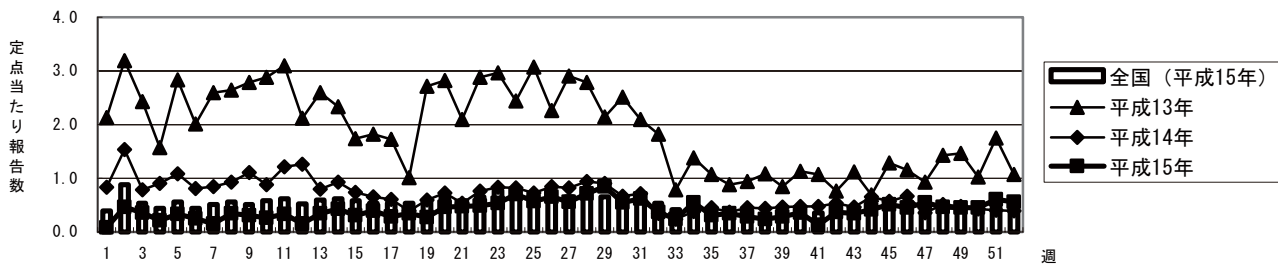
年齢別



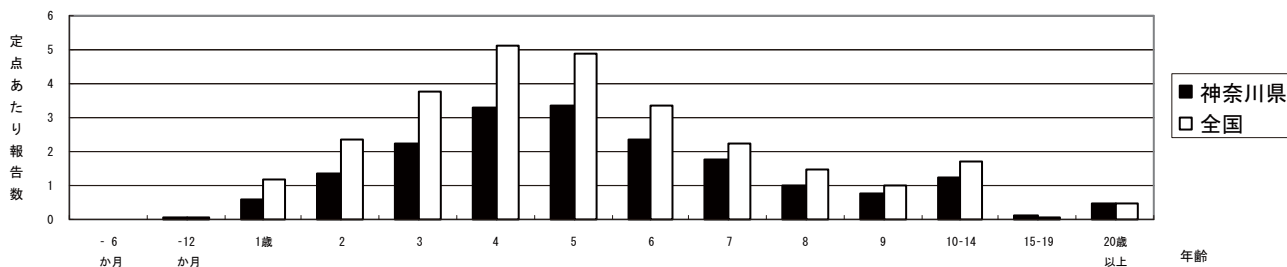
## 流行性耳下腺炎

目立った流行はなく、全国平均以下であった。

週別



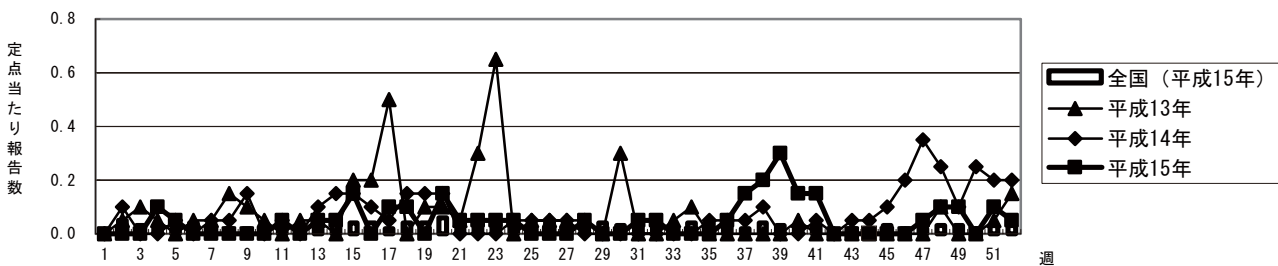
年齢別



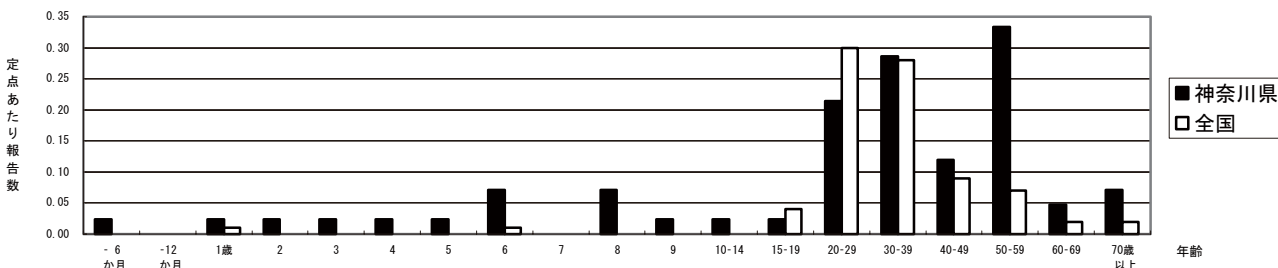
## 急性出血性結膜炎

散発的な報告がみられ、成人における報告が多いのが特徴である。

週別



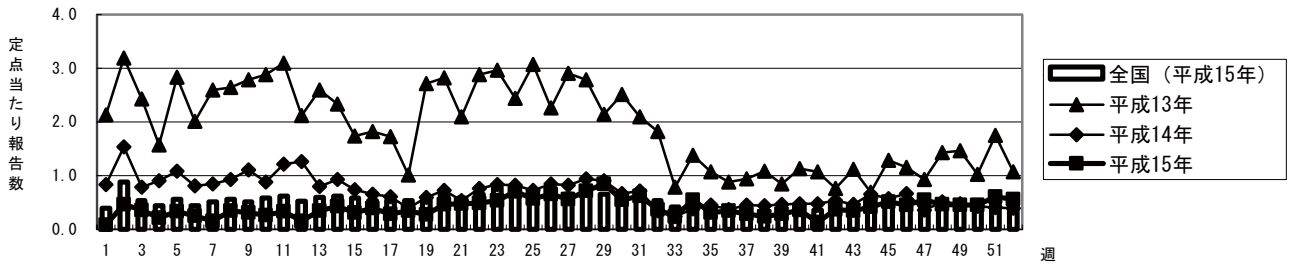
年齢別



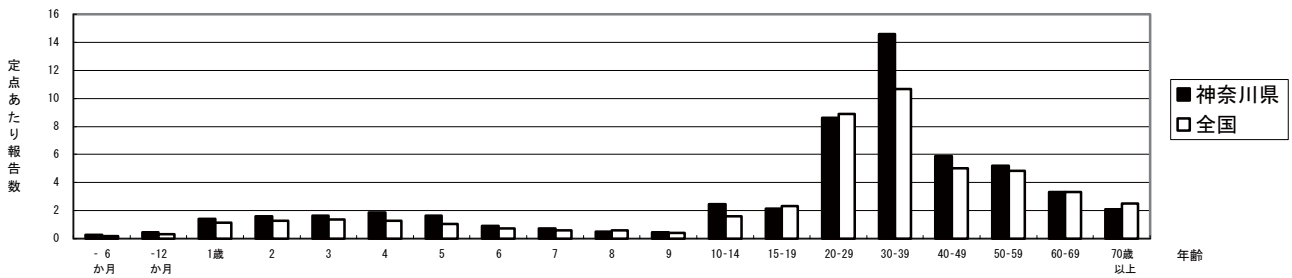
## 流行性角結膜炎

目立った流行はなかったが、20歳から30歳代に集中していた。

週別



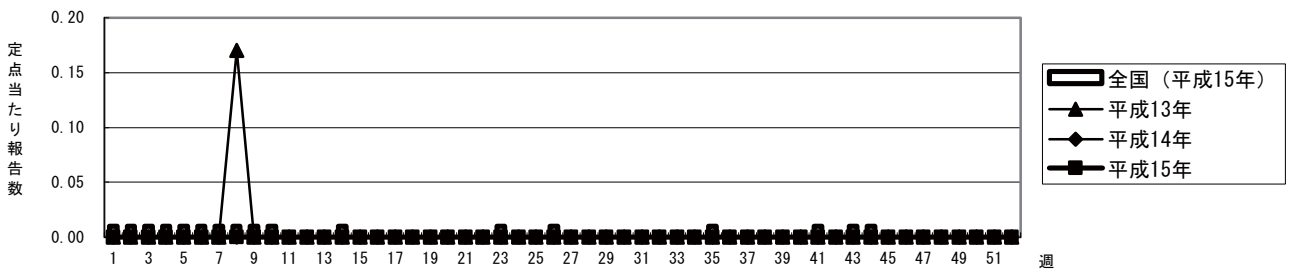
年齢別



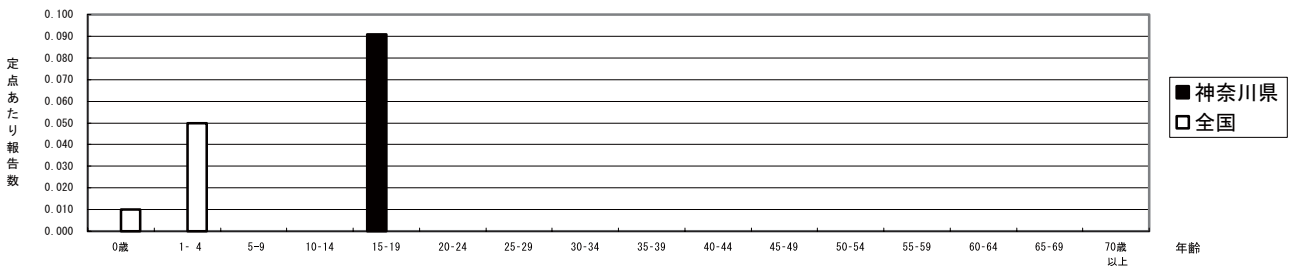
## 急性脳炎(日本脳炎を除く)

横浜市からの報告のみで、県域での発生報告はなかった。

週別



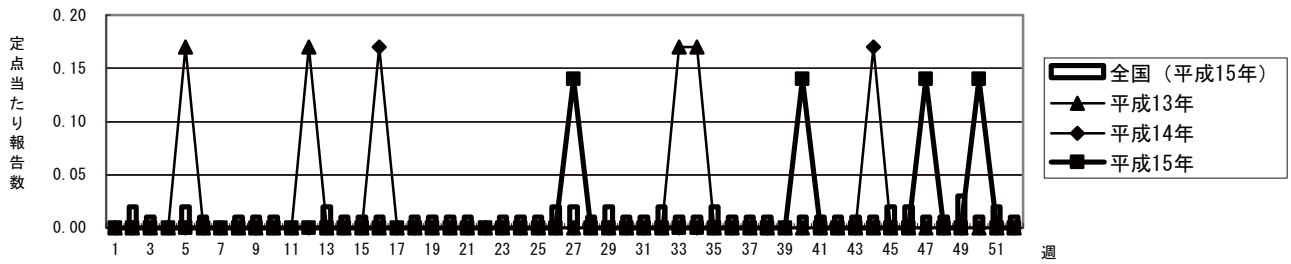
年齢別



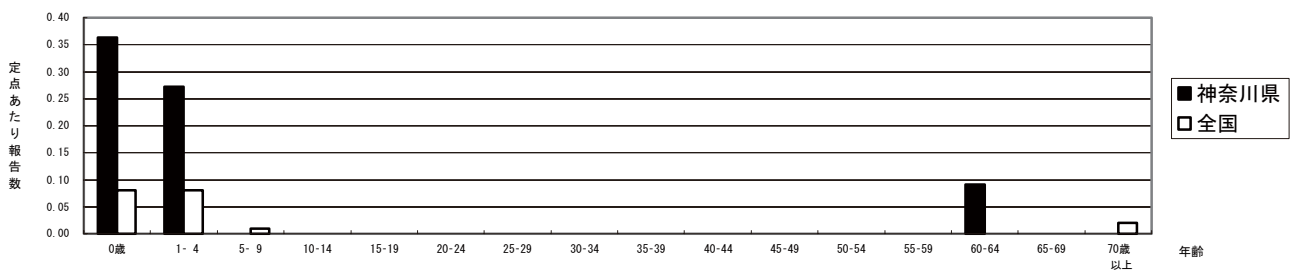
## 細菌性髄膜炎(真菌性を含む)

散発的な発生で、1~4歳以下に見られた。

週別



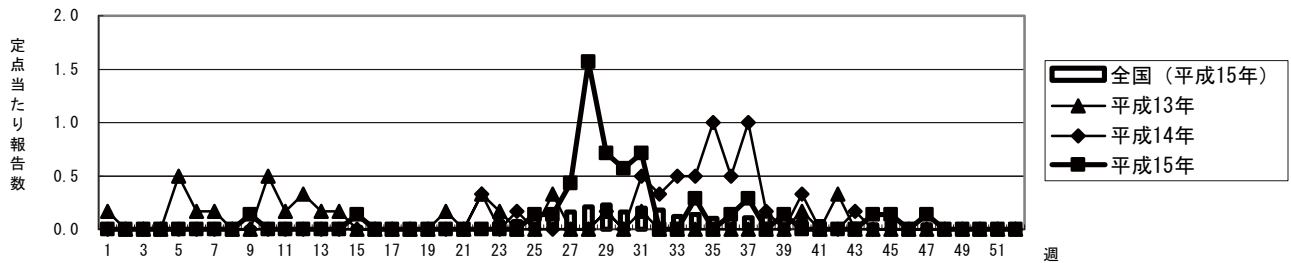
年齢別



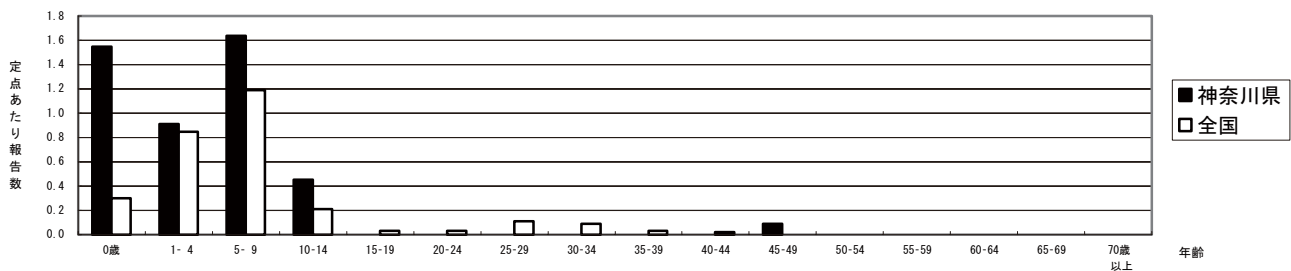
## 無菌性髄膜炎

28週にピークを示した散発的な発生で、ほとんどが10歳以下にみられた。

週別



年齢別

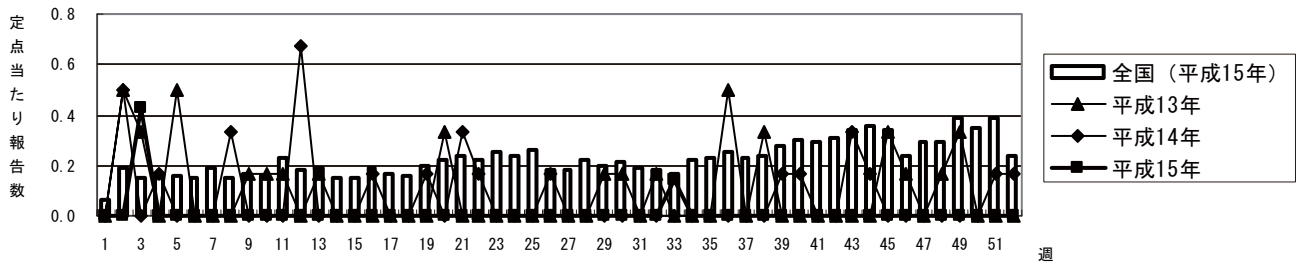




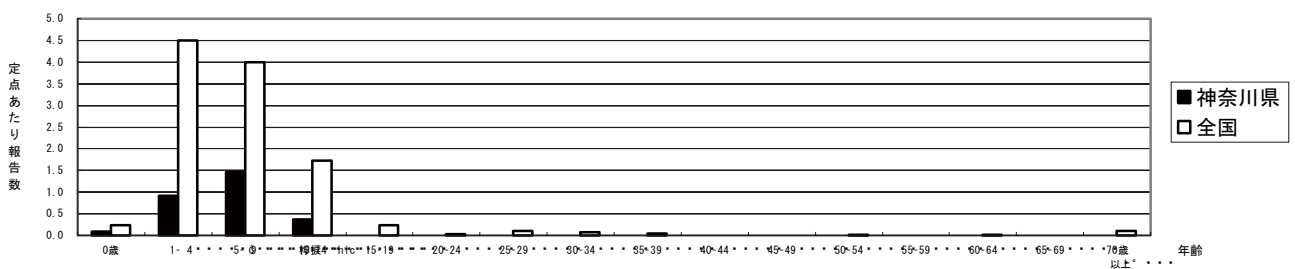
## マイコプラズマ肺炎

目立った報告なかったが、年齢では全国同様若年層に多くみられた。

週別



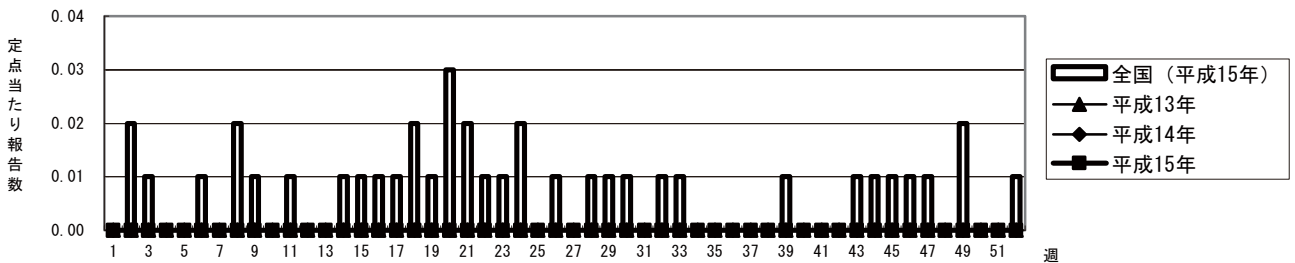
年齢別



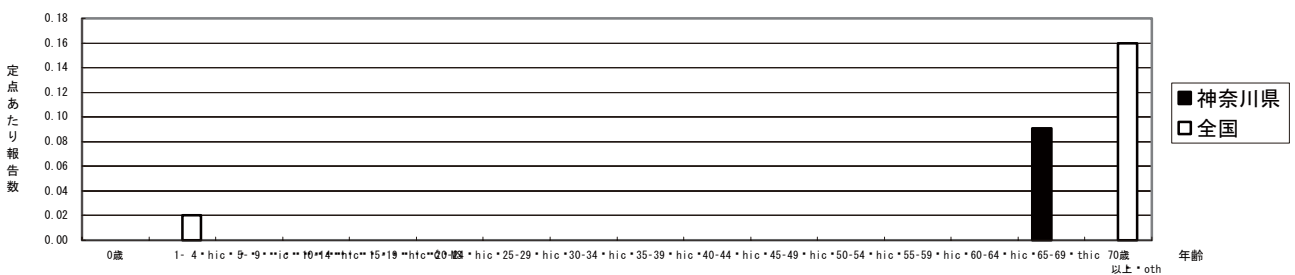
## クラミジア肺炎(オウム病を除く)

横浜市からの報告のみで、県域での発生報告はなかった。

週別



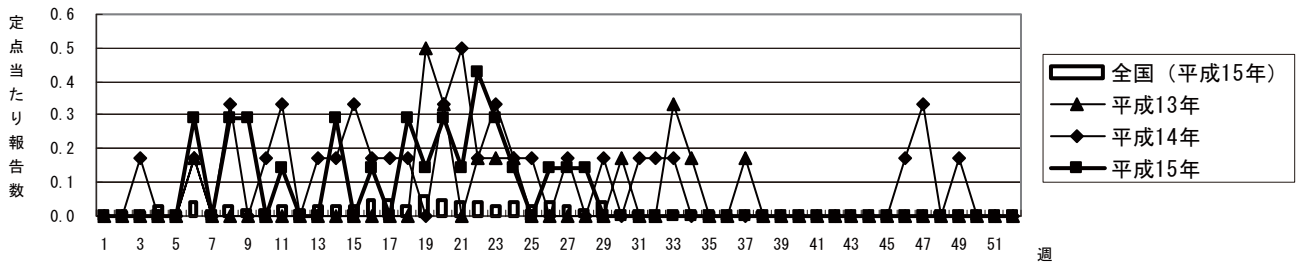
年齢別



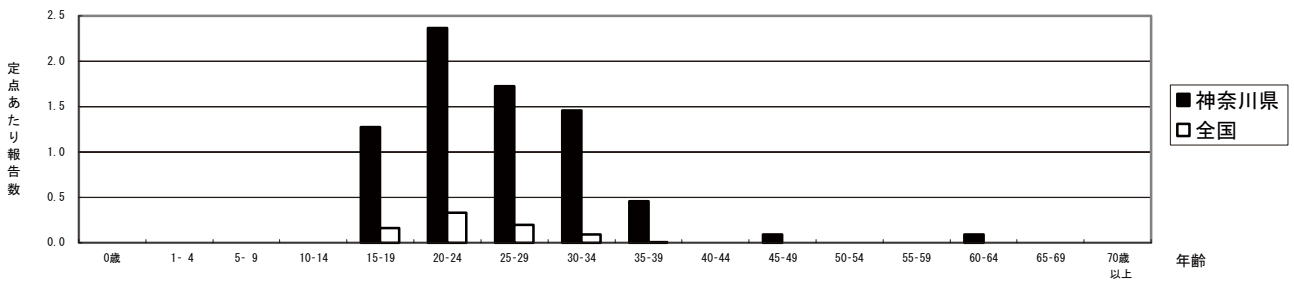
## 成人麻疹

年間を通じ散発的に報告がみられ、年齢は20歳前後に多くみられた。

週別



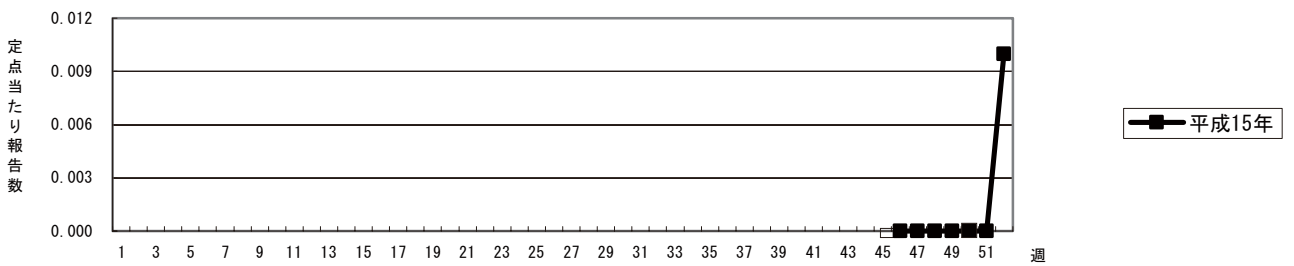
年齢別



## RSウイルス感染症

平成15年11月から定点報告の感染症となった。

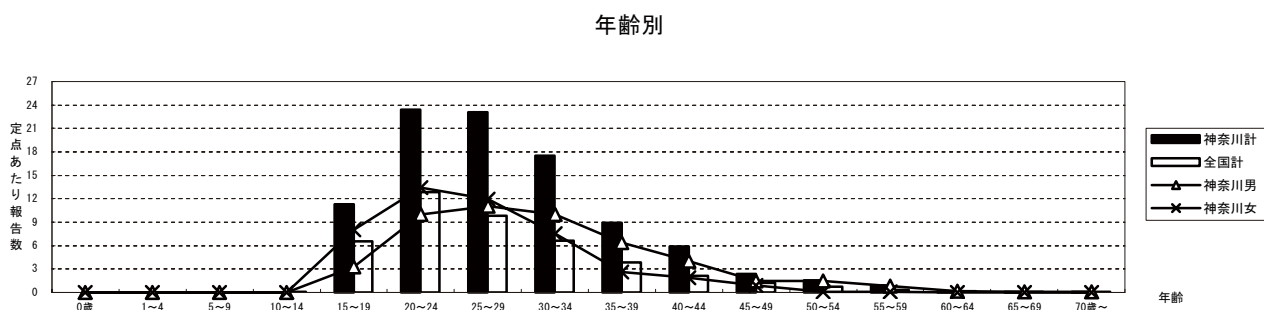
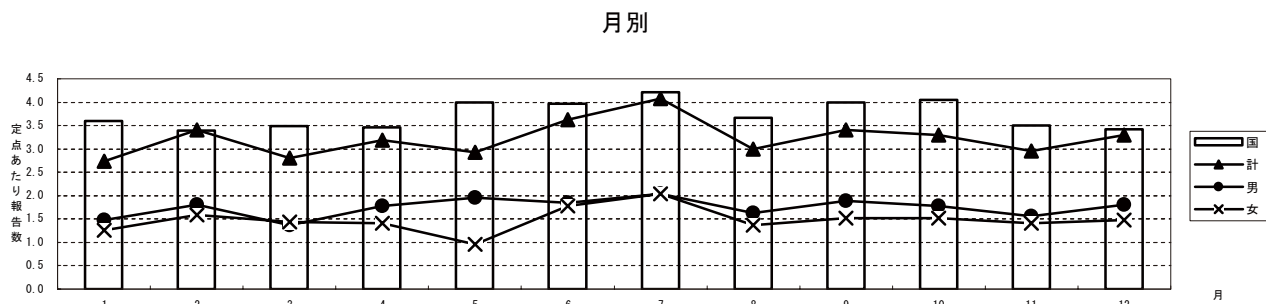
週別



## 月報対象疾患（月別は横浜市・川崎市を除く）

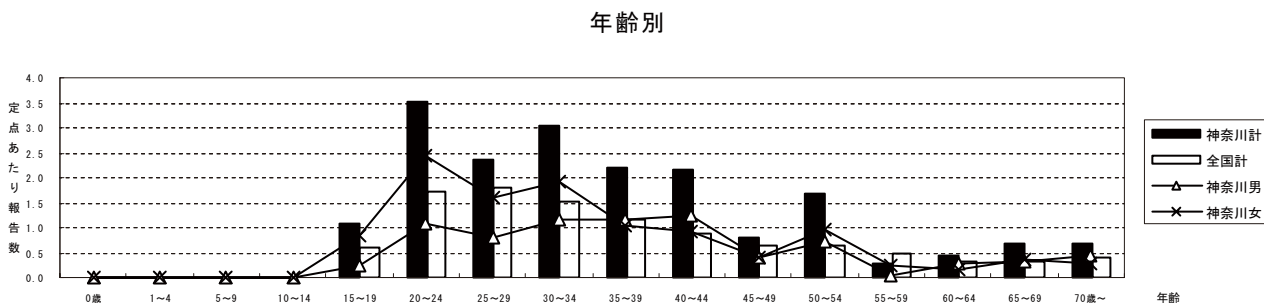
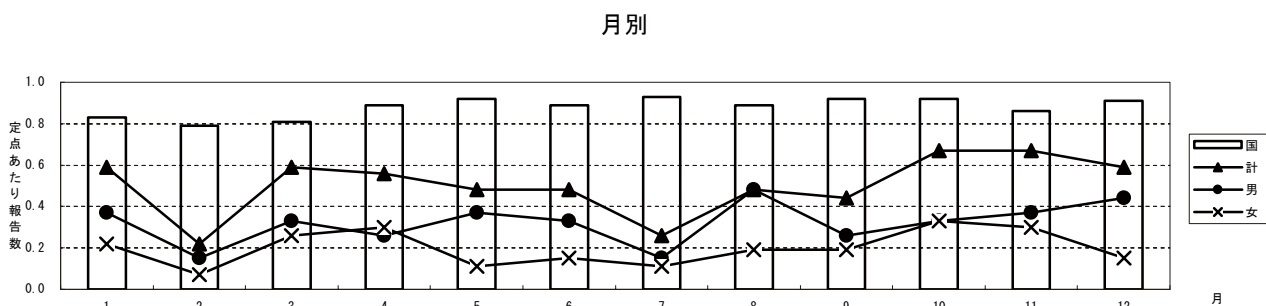
### 性器クラミジア感染症

6月から7月に報告数のピークが見られた。年齢別では青年層に多く女性の若年化傾向がうかがわれた。



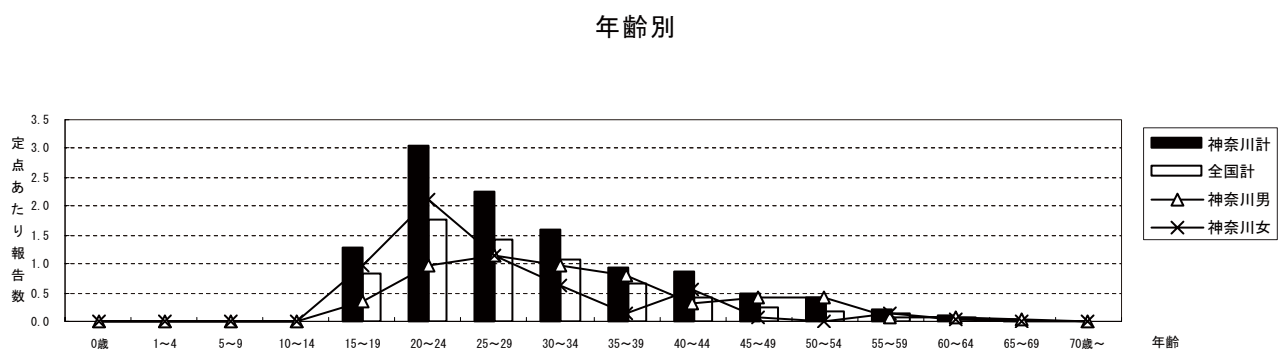
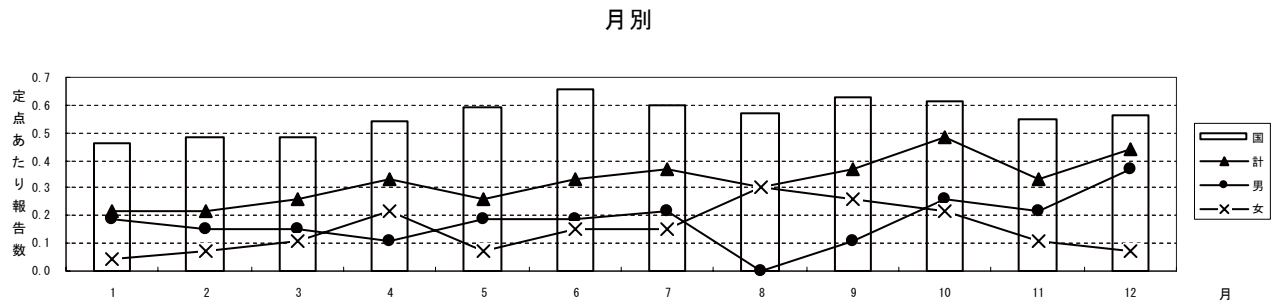
### 性器ヘルペスウイルス感染症

2月と7月に報告数の減少が見られたものの、10月から11月にピークが認められた。年齢別で女性の若年化傾向が見られた。



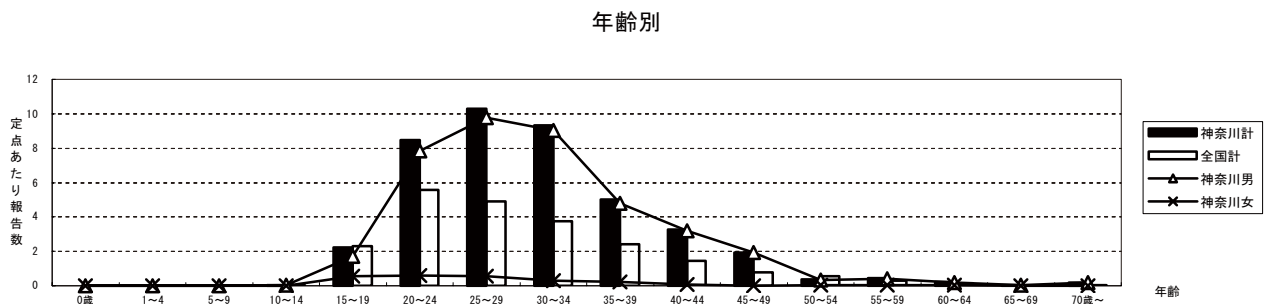
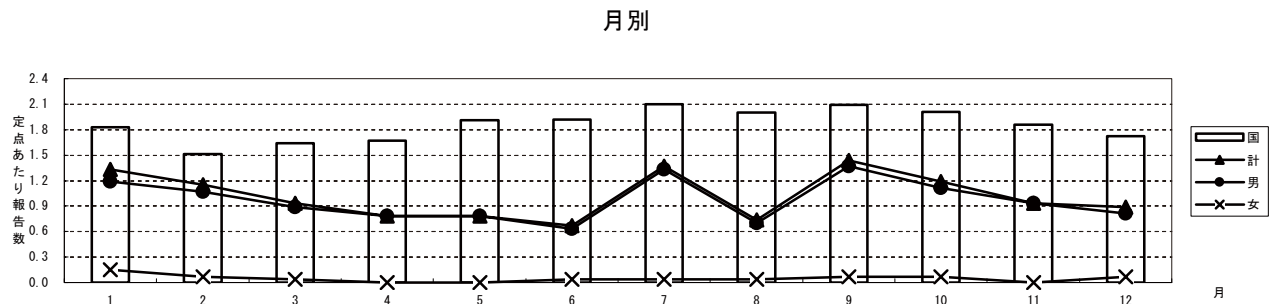
## 尖圭コンジローマ

年間を通じて報告数に大きな差は見られないが、年齢別では女性の若年化が進み報告数が多く見られている。



## 淋菌感染症

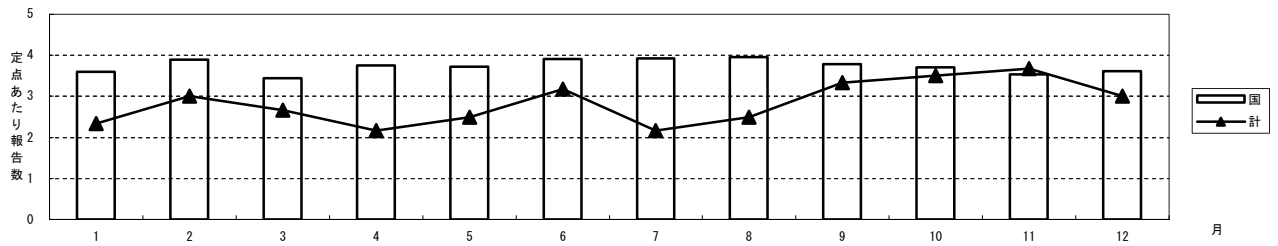
男女別で、例年同様圧倒的に男性の報告が多く女性は非常に少ない傾向を示した。



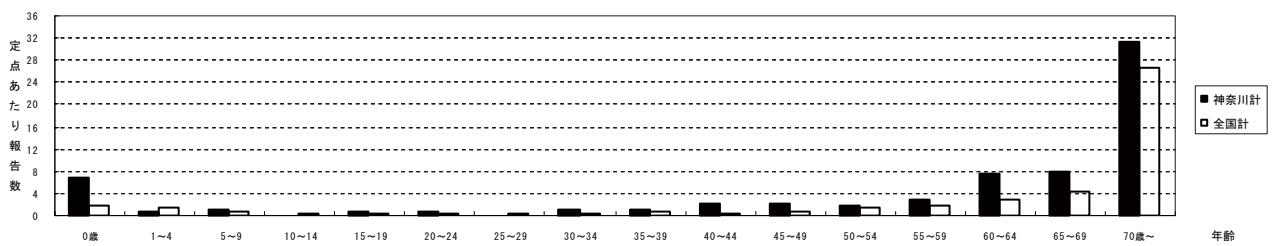
## メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

通年報告が見られ、年齢別でも幼児と高齢者の報告が顕著であった。

月別



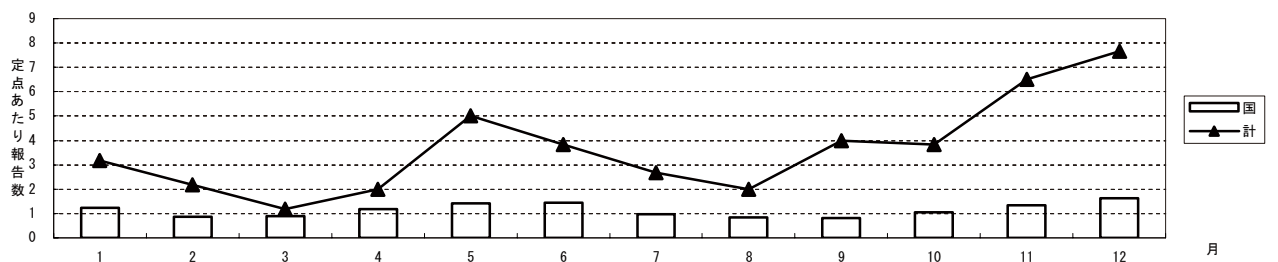
年齢別



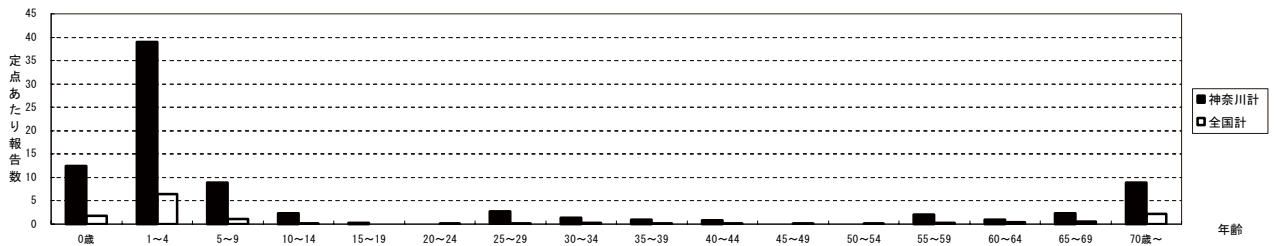
## ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

報告は5月、11月から12月にピークを示し、年齢別では乳幼児に多く見られた。

月別



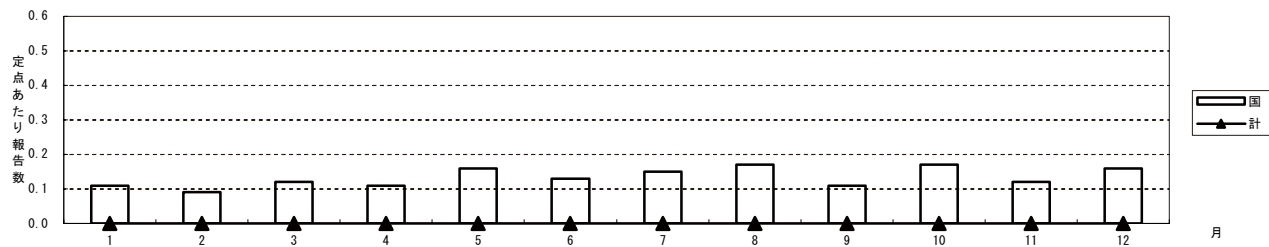
年齢別



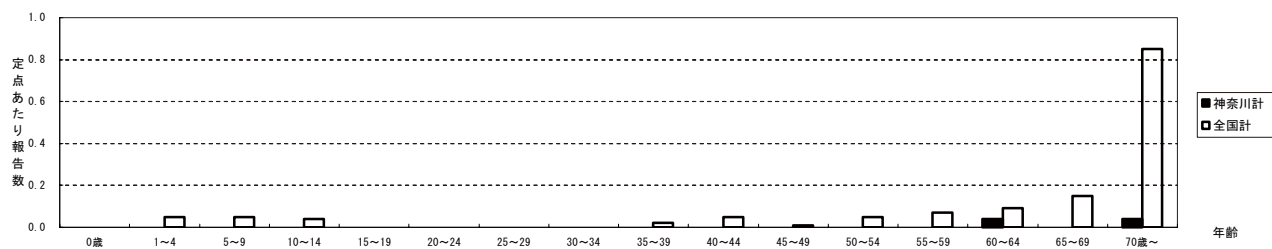
# 薬剤耐性緑膿菌感染症

横浜市からの報告のみで、県域での報告はなかった。

月別



年齢別



## II 細菌性感染症





## II 細菌性感染症

### 1 腸チフス・パラチフス

#### (1) 神奈川県内（横浜・川崎市を除く）のチフス菌等のフェージ型別結果

神奈川県衛生研究所

平成 15 年 1～12 月の間に分離されたチフス菌等は 2 件で、いずれもパラチフス A 菌であった（表）。

パラチフスの発生地区と件数は、相模原市および茅ヶ崎保健福祉事務所管内で発生した各 1 件で、分離菌株のフェージ型は 1 型および 4 型でいずれもナリジクス酸耐性菌であった。相模原市の患者は便、茅ヶ崎は血液からパラチフス A 菌が分離され、また両者ともに東南アジアへの渡航歴があった。

（鈴木理恵子）

表 分離されたチフス菌等のフェージ型別結果

番号	分離月日	性別	年齢	菌種	フェージ型	備考
1	3. 27	女	20	パラチフス A 菌	1	タイ・インド(相模原)
2	6. 16	男	24	パラチフス A 菌	4	タイ・インド(茅ヶ崎)

#### (2) 横浜市のチフス菌等のフェージ型別結果

横浜市衛生研究所

平成 15 年 1 月～12 月の間に横浜市内で分離されたチフス菌は 2 件で、パラチフス A 菌は 7 件分離された。チフス菌、パラチフス A 菌は全て、海外旅行歴のある患者もしくは健康保菌者から分離されており、旅行先は表のとおり、多岐に亘っていた。菌が分離された検体は、患者は静脈血、健康保菌者は便からであった。番号 4,5,7 の家族と 6,9 の家族は親戚同士で同一区内に居住し、共に中国に渡航しているが、中国国内での滞在先は異なっていた。また、5,7,9 は健康保菌者であって、当所で行っている海外渡航者対象の検便で菌が検出された。情報とチフス菌のフェージ型別内訳は表に示したとおりである。

（松本裕子、山田三紀子、武藤哲典）

表 チフス菌等のフェージ型別結果

番号	分離月日	性別	年齢	菌種	フェージ型	備考
1	4.30	男	34	チフス菌	A	タイ、カンボジア、ベトナム、ラオス
2	5.12	男	36	チフス菌	F9	メキシコ
3	6.18	男	27	パラチフス A 菌	1	タイ、インド
4	9.18	男	35	パラチフス A 菌	UT	中国（ハルビン市）
5	9.24	女	28	パラチフス A 菌	UT	中国（ハルビン市） 番号4の妹
6	9.26	男	39	パラチフス A 菌	UT	中国（黒龍江省）
7	9.27	女	31	パラチフス A 菌	UT	中国（ハルビン市） 番号4の妻
8	10.6	男	22	パラチフス A 菌	1	インド、ネパール、タイ、香港
9	10.15	男	35	パラチフス A 菌	UT	中国（黒龍江省） 番号6の義弟

### (3) 川崎市のチフス菌等のフェージ型別結果

川崎市衛生研究所

平成 15 年 1～12 月に川崎市内で分離されたのはパラチフス 1 件であり、詳細は表に示したとおりである。

(小嶋由香)

表 チフス菌等のフェージ型別結果

番号	分離月日	性別	年齢	菌種	フェージ型	備考
1	5.22	男	24	パラチフス A 菌	UT	バングラディッシュより来日

## 2 その他の感染症

### (1) 横浜市内の幼稚園で発生した腸管出血性大腸菌 026 による集団食中毒事例

横浜市衛生研究所

平成 15 年 9 月 17 日に異なる医療機関から幼稚園児 2 名の「026 による腸管出血性大腸菌感染症」の発生届が福祉保健センターにあった。これらの患者は同一幼稚園に通っている園児であった。翌日、同区内の他の幼稚園児からも同菌が確認された。両幼稚園は共通の給食施設を利用していることが判明し、食中毒と感染症の両面から調査を開始した。9 月 18 日には福祉保健センターによる給食施設の立ち入り調査が

開始され、当所でも幼稚園の職員および園児(患者)の家族検便、給食施設の検食およびふき取りの細菌検査を開始した。

検査は菌検出者に対し陰性が確認されるまで行い、11月20日まで続いた。

今回の集団食中毒事例は「横浜市衛生研究所健康危機管理対策実施要領」および「横浜市衛生研究所緊急時感染症検査体制マニュアル」に基づき行われた。また、本事例では「緊急時感染症検査体制マニュアル」で設定した検体処理数を大幅に超えることが充分予想されたため、今回初めて民間検査機関に検査の一部を委託した。

検査の概略は以下のとおりである。9月18日から給食施設、患者家族検便等の検査を開始し、9月22日にA幼稚園の職員20名中4名より、B幼稚園の職員9名中2名より026:H11、VT1(以下026)が検出された。給食施設の検食、ふき取りおよび従業員便からは026は検出されなかった。多数の感染者が確認されたことから、9月25日、26日には福祉保健センターと幼稚園経営者が調整して、保護者への説明会を開催し園児全員の健康調査と検便等の協力を依頼した。同じ給食施設を利用している幼稚園・保育園は、5区15園に及び、9月25日から当所でも園児全員を対象に便検査を開始した。また、10月3日からは民間検査機関でも検査を開始し、延べ6037検体(衛生研究所3949検体、民間検査機関2088検体)の検査を行った。その結果、2区6園(A~F幼稚園)で、449名(園児367名、園児の家族60名、園の職員20名、その他(友人)2名)より026が検出された。なお、民間検査機関において分離された026は当所において生化学的性状、O:H血清型別およびベロ毒素の確認検査を行った。

福祉保健センターの健康調査により、平成15年9月10日から14日に患者の発生がみられ、給食の摂食月日は9月8日で、摂食者数は3476名、患者数は141名(発症率4.1%)であったことが判明した。感染者は市内6園に渡りそれぞれ生活圏は異なっていた。なお、菌陽性者のうち園児の家族60名とその他(友人)2名は、給食を食べていないことから園児からの二次感染が疑われた。

026の分離はマッコンキー寒天培地(無糖)に1%ラムノースおよびCEFEXIME TELLURITE(CT)サプリメントを添加した培地を用いた。園児、職員および家族から分離された026の菌株について、パルスフィールドゲル電気泳動法(PFGE)を用いて制限酵素 *Xba* I による遺伝子DNA断片多型性解析を行った。対照として、6月(幼稚園)と10月(養護学校)に分離された株についても併せて比較検討した。その結果、今回分離された株は全て同一の泳動パターンを示したが、6月と10月に分離された株は泳動パターンが異なった。

本事例は感染者が市内6園に渡り生活圏が異なっていること、発症日が9月10日から11日に集中していること、共通食は給食であること、分離株は同一のPFGEパターンを示したこと等により、市内給食施設を原因とする026による集団食中毒と断定された。

また、今回のような大規模食中毒発生時には統一された依頼書(電子媒体等)の必要性、培地、診断用抗血清等の確保及び多数検体発生時の民間検査機関への委託等について、他の地研等との連携の強化及び応援体制を構築しておく必要があると考える。

(武藤哲典 松本裕子 山田三紀子 鈴木正樹 北爪晴恵 藤井菊茂)

## (2) 散発下痢症からの病原菌分離状況について

神奈川県衛生研究所

神奈川県における感染症発生動向調査の一環として、県内小児科医院一般検査定点の外来患者を対象に、感染性下痢症が疑われる患者の便材料について腸管系病原菌の検索を行った。平成 15 年 1～12 月の間に実施した 68 件の直接培養法での検索結果を表に示した。

腸炎起炎菌として推定し得た症例および不確実ながらその疑いがある菌を検出した症例は、68 症例中 19 症例 (27.9%) あり、これらから 21 菌種が検出されたが、49 症例 (72.0%) は既知腸管系病原菌を検出できなかった。推定原因菌別の検出頻度は、腸管病原性大腸菌 (EPEC) : 15 症例、カンピロバクター・ジェジュニ : 2 症例、サルモネラ : 3 症例 (血清型 Enteritidis、Typhimurium、Mbandaka)、腸管出血性大腸菌 (O157 : H7 *stx1,2*) : 1 症例であった。

検出菌に占める EPEC の割合は昨年に続き本年も顕著に高率 (71.4%) であった。EPEC の主な血清型は O1、O153 : 各 3 株、O25 : 2 株、O6、O18、O20、O114、O126、O140 および O159 : 各々 1 株であった。また、これら分離株の志賀毒素 (Stx) 遺伝子保持について検索したところ、いずれの株も Stx 遺伝子は保持していなかった。EPEC は病原性の試験方法が未だ確立されておらず、分離菌株に関する病原因子の検索が必要であると思われる。

(鈴木理恵子、佐多 辰)

表 散発下痢症における病原菌分離状況

推定原因菌	症例	(%)
腸管病原性大腸菌 (EPEC)	15 <sup>a</sup>	22.1
腸管出血性大腸菌 (EHEC)	1	1.5
カンピロバクター・ジェジュニ	2 <sup>a</sup>	2.9
サルモネラ	3 <sup>a</sup>	4.4
不明	49	72

a : 同時検出1例

## (3) 横浜市における海外渡航者下痢症からの病原菌分離状況

横浜市衛生研究所

昭和 54 年以来海外渡航者による腸管系病原菌の持ち込みを調査する目的で、市内在住の海外渡航者とその家族を対象とした病原菌検索を行っている。今回は、平成 15 年 1 月から 12 月までの 1 年間に取扱った検体 58 件のうち、2 回以上検査した者および家族を除く 55 件の病原菌検査結果を報告する。

### 1. 検査方法

各種病原菌の分離・同定検査は前年と同じ検査方法で、大腸菌のエンテロトキシン検索は逆受身ラテックス凝集法および PCR 法で行った。なお、腸管病原性大腸菌は、血清型のみの検査である。

## 2. 結果および考察

55 件中 4 件(7.3%) から病原菌が分離された。トルコへの旅行者で下痢を呈していた 1 名から毒素原性大腸菌 (O25 : HNM、S T 産生) が検出された。パラチフス A 菌が 3 名から検出され、いずれも健康者で中国からの帰国であった (横浜市のチフス菌検出結果参照)。今年はその他の病原菌は検出されなかった。

以上の成績は実際に海外から持込まれていると予想される病原菌の一部に過ぎないと思われる。海外渡航者によってもたらされる腸管病原菌の国内における下痢症の流行への影響を考慮し、今後も検査を続けていきたい。

(山田三紀子、武藤哲典、北爪晴恵、鈴木正樹、松本裕子)

表 海外渡航者からの腸管系病原菌検出状況

被検者種別	下痢現症者	下痢申告者	健康者	合計
件数	3	3	49	55
陽性者数	1	0	3	4
毒素原性大腸菌	1	0	0	1
組織侵入性大腸菌	0	0	0	0
腸管病原性大腸菌	0	0	0	0
コレラ菌	0	0	0	0
腸炎ビブリオ	0	0	0	0
NAGビブリオ	0	0	0	0
ビブリオ・ミミクス	0	0	0	0
赤痢菌	0	0	0	0
パラチフス A 菌	0	0	3	3
サルモネラ	0	0	0	0
カンピロバクター	0	0	0	0
プレジオモナス	0	0	0	0
エロモナス	0	0	0	0

### (4) 川崎市の下痢症患者からの腸管病原菌検出状況

川崎市衛生研究所

川崎市内の開業医師依頼の下痢症患者を対象にして腸管系病原菌検査を実施しているが、今回は平成 15 年 1~12 月までの検査成績について報告する。

#### 1. 材料と検査方法

材料は、市内医療機関に Cary-Blair の輸送培地を配布し、医療機関を訪れた下痢症患者から大便を採取し、保健所を経由して搬入された検体について検査を行った。

検査方法は、既報と同様に行った。

#### 2. 結果及び考察

##### 1) 病原菌検出状況

病原菌検出状況は表 1 に示すとおり、検体数 559 件中腸管病原菌陽性数 90 件(16.1%) であり、そのう

ちサルモネラ 14 件(2.5%)、腸管病原性大腸菌(EPEC)8 件(1.4%) 腸管出血性大腸菌(EHEC) 3 件(0.5%)、腸炎ビブリオ 5 件(0.9%)、カンピロバクター・ジェジュニ 61 件(10.9%)、エロモナス・ソブリア 1 件(0.2%)、エロモナス・ヒドロフィラ 1 件(0.2%)の検出であり、検出病原菌のうちカンピロバクター・ジェジュニが 67.8%を占め、下痢症患者の主要病原菌であった。同一患者から 2 菌種の病原菌が検出された事例は 3 事例みられた。

## 2) 検出病原菌の血清型

検出病原菌の血清型は表 2 に示すとおりである。サルモネラは 14 株分離され、5 血清型に型別された。*S.Enteritidis* が 6 株、*S.Infantis* が 3 株、*S.Typhimurium* が 2 株、*S.Braenderup*、*S.Litchfield*、*S.Narashino* がそれぞれ 1 株ずつであった。EPEC は 7 血清型に型別され、O55 が 2 株、O86a、O111、O114、O126、O128、O157 が 1 株ずつであった。EHEC は O157:H7(VT1+VT2)、O157:H7(VT2)、O26H11 (VT1)がそれぞれ 1 株ずつであった。

腸炎ビブリオは 5 株分離され、血清型は O3:K6 が 2 株、O5:K15、O1:K25、O8:K70 が 1 株ずつであり、分離菌株の耐熱性溶血毒は O8:K70 が陰性であり、他の株は全て陽性であった。

以上のように本市内の下痢症患者から腸管系病原菌が 15.6%検出され、カンピロバクター・ジェジュニが 10.9%と最も多く検出された。また、その他の食中毒菌も低率ながら分離されていることから今後も細菌性下痢症の原因菌追求のため検査を強化していく必要があると思われる。

(小嶋由香、本間幸子、須藤始代、赤木英則、岡田京子、小川正之)

表 1 散発下痢症患者からの病原菌検出状況

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
検体数	37	42	45	46	43	35	79	55	73	40	28	36	559
陽性数 (%)	4 (10.8)	1 (2.4)	2 (4.4)	5 (10.9)	10 (23.3)	7* (20.0)	16* (20.3)	14 (25.5)	17 (23.3)	8 (20.0)	3 (10.7)	3 (8.3)	90* (16.1)
サルモネラ					3		1	4	4	2			14(2.5)
腸管病原性大腸菌	1	1			1	2*	3*						8(1.4)*
腸管出血性大腸菌							3						3(0.5)
腸炎ビブリオ						1	1*	2		1			5(0.9)*
カンピロバクター・ジェジュニ	3		2	4	6	5*	9*	8	13	5	3	3	61(10.9)*
エロモナス・ソブリア							1*						1(0.2)
エロモナス・ヒドロフィラ				1									1(0.2)

備考：\*印は、同一人から 2 菌種の病原菌が検出された事例 (3 事例)

表2 検出病原菌の血清型

病原菌	株数	菌種および血清型						
サルモネラ	14	<i>S. Enteritidis</i> (6)	<i>S. Infantis</i> (3)	<i>S. Typhimurium</i> (2)	<i>S. Braenderup</i> (1)	<i>S. Litchfield</i> (1)	<i>S. Narashino</i> (1)	
腸管病原性大腸菌	8	055 (2)	086a (1)	0111 (1)	0114 (1)	0126 (1)	0128 (1)	0157 (1)
腸管出血性大腸菌	3	0157:H7 (VT1+VT2) (1)		0157:H7 (VT2) (1)		026H11 (VT1) (1)		
腸炎ビブリオ	5	03: K6 (2)	05:K15 (1)	01:K25 (1)	08:K70 (1)			

(5) 横須賀市の散発下痢症からの腸管系病原菌検出状況

横須賀市衛生試験所

平成15年1月から15年12月の1年間に実施した市内各医療機関からの下痢・腹痛を主症状とする患者糞便及び菌株材料の腸管系病原菌検査の結果について報告する。

1. 材料と方法

材料は菌株材料222件、糞便材料64件の合計286件で、検査方法は定法により行った。

2. 結果

病原菌検出状況を表1に示す。検査した286件全ての内、陽性数は33件(11.5%)であった。陽性の内訳は、腸管病原性大腸菌(EPEC)が17株、次いで毒素原性大腸菌(ETEC)が4株、黄色ブドウ球菌3株、赤痢菌、サルモネラが各2株、パラチフスA菌、腸管出血性大腸菌(EHEC)0157以外、腸炎ビブリオ、エロモナス・ソブリア及びカンピロバクターが各1株であった。

検出病原菌の血清型を表2に示す。赤痢菌は*S. flexneri* 2aが2株、サルモネラは*S. Enteritidis*、未決定菌(04群)が各1株、腸管出血性大腸菌は026:NMが1株、毒素原性大腸菌は015:H11、025:NM、0153:H12及び0169:H41が各1株、腸管病原性大腸菌は0111:H21が12株で昨年同様多かった他、086a:NMが2株、026:NM、055:H7、及び0128:H12が各1株であり、腸炎ビブリオは01:K25が1株であった。

以上、本年は病原菌の陽性率が全体の11.5%で昨年の陽性率(17.6%)に比べて少なかった。これは搬入された検査材料の約8割が菌株(222件)であったことを考慮すると、今回の調査結果は主に菌株(腸管出血性大腸菌、腸管病原性大腸菌の血清型)由来の検出菌を示していると考えられるが、本年は腸管出血性大腸菌が1株(昨年6株)と少なく、腸管病原性大腸菌は17株(昨年13株)と多く検出された。この他、赤痢菌、パラチフスA菌など、人に重篤な病気を引き起こす病原菌及び食中毒原因菌が種々検出されており、今後とも、これら下痢症の原因菌検査の充実を図っていく予定です。

(山口純子、天野 肇、蛭田徳昭、増山 亨)

表1 散発下痢症からの病原菌検出状況

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
検体件数	14(0)	22(3)	38(2)	20(0)	29(0)	13(0)	24(0)	16(1)	19(1)	22(0)	18(0)	51(8)	286†(15)
陽性数	2(0)	3(1)	1(0)	1(0)	5(0)	2(0)	5(0)	4(0)	2(1)	4(0)	0(0)	4(0)	33(2)
(%)	(14.3)	(13.6)	(2.6)	(5.0)	(17.2)	(15.4)	(20.8)	(25.0)	(10.5)	(18.2)	(0.0)	(7.8)	(11.5)
病原菌													
赤痢菌					2(0)								2(0)
サルモネラ						2(0)							2(0)
パラチフスA菌		1(0)											1(0)
腸管出血性大腸菌 0157以外									1(0)				1(0)
毒素原性大腸菌	1(0)	1(1)						1(0)	1(1)				4(2)
腸管病原性大腸菌		1(0)	1(0)	1(0)	2(0)		5(0)	1(0)		2(0)		4(0)	17(0)
腸炎ビブリオ								1(0)					1(0)
黄色ブドウ球菌					1(0)			1(0)		1(0)			3(0)
エロモナス・ソブリア										1(0)			1(0)
カンピロバクター・ジェジュニ/:	1(0)												1(0)

備考： † 印の内訳（菌株 222件，糞便 64件）  
（ ）は海外渡航者由来

表2. 検出病原菌の血清型

病原菌	株数	菌種及び血清型
赤痢菌	(2)	<i>S. flexneri</i> 2a(2)
サルモネラ	(2)	<i>S. Enteritidis</i> (1), 未決定菌 04(1)
腸管出血性大腸菌 0157以外	(1)	026:NM(1)
毒素原性大腸菌	(4)	015:H11(1), 025:NM(1), 0153:H12(1), 0169:H41(1)
腸管病原性大腸菌	(17)	026:NM(1), 055:H7(1), 086a:NM(2), 0111:H21(12), 0128:H12(1)
腸炎ビブリオ	(1)	01:K25(1)

備考：（ ）は菌株数

## (6) 相模原市の2類及び3類感染症発症者の家族等の病原菌検索について

相模原市衛生試験所

平成15年1月から12月までに、2類および3類感染症を発症した患者の家族及び海外旅行同行者の病原菌検索を実施した。

発症原因については海外渡航先での感染が疑われるものがほとんどであったが、渡航経験が無く、感染原因が不明なものもあった。

検査対象者は19名で、病原菌検索の内訳は赤痢菌11件（うち *S. sonnei* は7）、コレラ菌4件、パラチフス1件、腸チフス1件、病原性大腸菌（EHEC;血清型不明）2件であった。

検査法については、赤痢菌については直接平板塗抹により分離、同定を行った。赤痢菌以外は増菌培養と直接平板塗抹とを併用し、コレラ菌については2次増菌も行った。また、病原性大腸菌のエンテロトキシン検索にはPCR法を実施した。

感染症を発症した患者の家族及び海外渡航同行者の中で症状を呈する者はなく、すべての検体から病原菌は検出されなかった。これにより、家族や同行者へは感染が拡大していないことが確認され、感染者における発症後の自己管理は適切であったと思われる。しかしながら、検査対象者のうち患者の家族が約7割を占めており、幼児なども含まれていたことから、発症者からの感染防止には充分注意する必要があると考えられる。

(清水壽美子、田向香織、関口幸枝)



### 3 河川等の環境調査

#### (1) 河川水腸管系病原菌調査

神奈川県衛生研究所

昭和54年度より行われてきたコレラ菌を対象とした河川水の定点調査は、コレラ菌の防疫処置に関する変更（昭和63年厚生省通知）にともない、平成元年より河川水腸管系病原菌調査として実施されている。本稿では平成15年1月から12月までの調査成績について報告する。

##### 1. 材料および方法

県内（政令三市所管区域を除く）の一級および二級河川の河口等の10調査定点において毎月1回定期的に採取した河川水について以下の腸管系病原菌の検索を行った。

検索対象菌種は、コレラ菌O1,O139、チフス菌、パラチフスA菌、赤痢菌、腸管出血性大腸菌の2類および3類感染症原因菌とサルモネラ、*Vibrio cholerae non-O1,O139*とした。

各増菌培地に河川水500mlを濾過したメンブランフィルターを接種し培養した。また、赤痢菌の検索は少量のBPW（Buffered Peptone Water）でフィルターを洗浄し、その洗浄液を直接塗抹した。腸管出血性大腸菌O157は37℃8時間増菌後、免疫磁気ビーズ法を用い分離を行った。各病原菌の検索方法は定法に従い行った。

##### 2. 結果および考察

河川水120検体からの病原菌分離状況を表1に示した。本調査期間中、2類および3類感染症原因菌は分離されなかった。

*Vibrio cholerae non-O1,O139*は50検体（41.7%）から分離され、調査期間中全定点から検出された。

チフス菌およびパラチフスA菌以外のサルモネラは18検体（15.0%）から18株分離され、主な血清型はTyphimurium、Enteritidis（各3株）、Infantis、Newport（各2株）であった（表3）。

本年の調査では、防疫措置の対象となる菌種は分離されなかったが、年間を通して腸管病原菌による経常的な汚染が認められることから、河川水の衛生状態の的確な把握と監視を継続していく必要があると思われる。

（佐多 辰、鈴木理恵子、石原ともえ）

表1 腸管系病原菌検出状況

検出菌	月												計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
コレラ菌O1, O139	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
チフス菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
パラチフス菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
赤痢菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
腸管出血性大腸菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
<i>Vibrio cholerae non-O1, O139</i>	3	5	1	2	3	0	5	7	7	5	6	5	49	
<i>Salmonella</i>	0	2	2	1	6	1	2	1	2	1	0	0	18	

表2 分離されたサルモネラの血清型

血清型	分離株数
Bareilly	1
Bredeney	1
Chester	1
Derby	1
Enteritidis	3
Infantis	2
Newport	2
Saintpaul	1
Thompson	1
Typhimurium	3
O群別不能	2
	18

## (2) 腸管系病原菌検索

横浜市衛生研究所

河川水の細菌学的定点観測は昭和 53 年より継続しており、現在は鶴見川水系が 2 定点、これ以外は各水系ともすべて 1 定点で計 8 定点において観測を行っている。検査対象菌はコレラ菌、コレラ菌 O1、O139 以外、腸炎ビブリオ、赤痢菌、チフス菌およびパラチフス菌を含むサルモネラである。今回は平成 15 年 1 月から 12 月までの検査成績について報告する。

### 1.材料および方法

上記 8 定点の河川水、臨港鶴見川橋定点の底泥について毎月 1 回検体採取を行い、菌検索は従来と同様の方法で行った。

### 2.結果および考察

#### (1) 河川水からの病原菌の検出状況

河川水からの病原菌の検出状況を表 1 に示した。赤痢菌、コレラ菌、チフス菌およびパラチフス菌は、今年はいずれの定点からも検出されなかった。

コレラ菌 O1、O139 以外は、延べ 43 定点 (44.8%) で検出され、例年とほぼ同様の検出率であった。チフス、パラチフス菌以外のサルモネラは延べ 6 定点 (6.3%) で 8 菌種が分離された。

#### (2) 定点別コレラ菌 O1、O139 以外の検出状況

河川水および底泥中のコレラ菌 O1、O139 以外の検出状況を表 2、3 に示した。各河川とも前年同様年間を通じて各調査地点で検出されている。底泥中のコレラ菌 O1、O139 以外の菌数は、平成 6 年からと同様に年間を通して低い値を示していたが、本年は 9 月に高い値を示した。

#### (3) 定点別腸炎ビブリオの検出状況

表 4 に示したとおり、底泥中の腸炎ビブリオは年間を通して検出された。また、河川水からの腸炎ビブリオも 31 定点より検出された。しかし、2 月は河川水定点から検出されなかった。

(4) 定点別サルモネラ検出状況

河川水からのサルモネラの検出状況を表 5 に示した。チフス菌およびパラチフス菌以外のサルモネラは、本年は 1、5、6、8 および 11 月に検出された。検出されたサルモネラの血清型は表 6 に示した。O7 群、O8 群、O9 群が 2 菌種検出された。毎年検出されている *S. Enteritidis* が 1 株検出されたが、*S. Saintpaul* および *S. Typhimurium* は検出されなかった。

河川の環境調査は、今後の問題として病原菌の分離だけでなく、患者からの病原菌分離状況等の情報と併せて流行菌型の予測、集団発生の予測、また患者および保菌者の追跡等の疫学的な解析が必要である。

(武藤哲典、松本裕子、山田三紀子、鈴木正樹、北爪晴恵)

表 1 河川水からの病原菌検出状況(定点数)

病原菌	月												計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
赤痢菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
コレラ菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
コレラ菌 O1、O139 以外	2	1	2	2	1	5	7	4	7	2	5	5	43	
腸炎ビブリオ	1	0	1	1	3	6	5	3	4	1	2	4	31	
サルモネラ														
チフス菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
パラチフス菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
その他	1	0	0	0	1	1	0	1	0	0	2	0	6	

表 2 河川水中のコレラ菌 O1、O139 以外

採取地点	月											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1. 臨港鶴見川橋	+	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+
2. 川向橋	-	-	-	+	-	+	+	-	+	-	+	-
3. 水道橋	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	+
4. 清水橋	-	-	+	-	-	+	+	+	+	+	+	+
5. 小泉橋	+	+	-	+	-	+	+	-	+	-	-	+
6. 侍従橋	+	-	-	-	-	+	+	+	+	-	+	-
7. 鷹匠橋	-	-	+	+	+	+	+	+	-	-	-	+
8. 東西橋	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-

表3 臨港鶴見川橋底泥中のコレラ菌 01、0139 以外の MPN

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
コレラ菌 01、0139 以外 (個/100ml)	<0.2	<0.2	2.3	<0.2	<0.2	<0.2	2	2	7	2	0.2	<0.2

表4 河川水中および底泥中の腸炎ビブリオ

採取地点	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1. 臨港鶴見川橋	- (+)	- (+)	+ (+)	+ (+)	+ (+)	+ (+)	+ (+)	+ (+)	+ (+)	+ (+)	+ (+)	+ (+)	- (+)
2. 川向橋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
3. 水道橋	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	-
4. 清水橋	-	-	-	-	+	+	+	+	+	-	+	+	+
5. 小泉橋	-	-	-	-	-	+	+	+	+	-	-	-	+
6. 侍従橋	-	-	-	-	+	+	-	+	+	-	-	-	+
7. 鷹匠橋	-	-	-	-	-	+	+	-	-	-	-	-	-
8. 東西橋	+	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-

( ) 内は底泥中の腸炎ビブリオ

表5 河川水のサルモネラ

採取地点	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1. 臨港鶴見川橋	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2. 川向橋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
3. 水道橋	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-
4. 清水橋	-	-	-	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-
5. 小泉橋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
6. 侍従橋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7. 鷹匠橋	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	+	-	-
8. 東西橋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-

表6 分離されたサルモネラの血清型

	血清型	分離菌株数
O4群	Stanley	1
O7群	Bareilly	1
	Infantis	1
O8群	Hadar	1
	Muenchen	1
O9群	Enteritidis	1
	Javiana	1
O3,10群	Orion	1
計		8

### (3) 河川水腸管系病原菌検索

横須賀市衛生試験所

平成15年1月から15年12月まで実施した河川水のコレラ菌、コレラ菌01以外、ビブリオ・ミミカス、腸炎ビブリオ、赤痢菌、腸チフス菌、パラチフスA菌、その他のサルモネラ、腸管出血性大腸菌など、腸管系病原菌の検査結果について報告する。

#### 1. 定点と検査方法

調査定点は市内10河川10定点であり、採水は2月、5月、8月、10月の年4回実施した。また、検査は昨年と同様の方法により行った。

#### 2. 結果及び考察

##### (1) 河川水からの病原菌検出状況

河川水の病原菌検出状況は表1に示した。本年はコレラ菌01以外が延べ21定点(52.5%)、エロモナス・ヒドロフィラ/ソブリアは28定点(70.0%)、ビブリオ・ミミカスは19定点(47.5%)、腸炎ビブリオは17定点(42.5%)、カンピロバクター・ジェジュニ/コリは8定点(20.0%)、エルシニア・エンテロコリチカが3定点(7.5%)、ビブリオ・フルビアリス/ファーニシイとプレジオモナス・シゲロイデスが各2定点(5.0%)、腸管病原性大腸菌が1定点(2.5%)から検出された。しかし、コレラ菌(CT+)、赤痢菌、チフス菌、パラチフスA菌、その他のサルモネラ、腸管出血性大腸菌、毒素原性大腸菌、及び組織侵入性大腸菌はいずれも検出されなかった。

##### (2) コレラ菌01以外の検出状況

コレラ菌01以外の検出状況を表2に示した。コレラ菌01以外は8月には2定点を除く全ての定点から検出され、夏季に多く検出された。

##### (3) 定点別腸炎ビブリオの検出状況

腸炎ビブリオの検出状況は表3に示した。腸炎ビブリオは10月には2定点を除く全ての定点、5月、8

月は各4定点、2月は2定点から検出された。

以上、今回の調査における河川水からの腸管系病原菌はコレラ菌01以外をはじめ、腸炎ビブリオ、ビブリオ・ミミカス、ビブリオ・フルビアーリス/ファーニシイ、エロモナス・ヒドロフィラ/ソブリア、プレジオモナス・シゲロイデス、カンピロバクター、エルシニア・エンテロコリチカ、腸管病原性大腸菌と種々検出された。今後もこれら病原菌の定点観測については引続き実施していく予定です。

(山口純子、天野 肇、蛭田徳昭、増山 亨)

表1. 河川水から検出した病原菌 (1月~12月)

病原菌	月				計 (%)
	2	5	8	10	
コレラ菌(CT+)	0	0	0	0	0
コレラ菌01以外	1	6	8	6	21 (52.5)
腸炎ビブリオ	2	4	4	7	17 (42.5)
ビブリオ・ミミカス	0	5	7	7	19 (47.5)
ビブリオ・フルビアーリス/ファーニシイ	0	1	1	0	2 (5.0)
エロモナス・ヒドロフィラ/ソブリア	4	8	8	8	28 (70.0)
プレジオモナス・シゲロイデス	0	0	0	2	2 (5.0)
赤痢菌	0	0	0	0	0
チフス菌	0	0	0	0	0
バラチフスA菌	0	0	0	0	0
その他のサルモネラ	0	0	0	0	0
腸管出血性大腸菌0157	0	0	0	0	0
腸管出血性大腸菌0157以外	0	0	0	0	0
毒素原性大腸菌	0	0	0	0	0
組織侵入性大腸菌	0	0	0	0	0
腸管病原性大腸菌	0	0	0	1	1 (2.5)
カンピロバクター・ジェジュニ/コリ	6	1	0	1	8 (20.0)
エルシニア・エンテロコリチカ	3	0	0	0	3 (7.5)
検体数	10	10	10	10	40

表2. 定点別コレラ菌01以外の検出状況 (1月~12月)

定点	月				計
	2	5	8	10	
鷹取川(追浜橋)	-	-	-	+	1
平作川(夫婦橋)	-	-	-	-	0
松越川(竹川合流後)	-	+	+	-	2
野比川(野比橋)	-	-	+	+	2
長沢川(長沢橋)	-	+	+	-	2
津久井川(新津久井橋)	+	+	+	+	4
川間川(新川間橋)	-	-	+	+	2
芦名川(芦名橋)	-	+	+	+	3
前田川(前田中橋)	-	+	+	-	2
関根川(粒石橋)	-	+	+	+	3

表3. 定点別腸炎ビブリオの検出状況 (1月～12月)

定 点	月				計
	2	5	8	10	
鷹取川 (追浜橋)	+	+	+	+	4
平作川 (夫婦橋)	-	+	+	+	3
松越川(竹川合流後)	+	+	+	+	4
野比川(野比橋)	-	-	-	-	0
長沢川(長沢橋)	-	-	-	+	1
津久井川 (新津久井橋)	-	-	-	+	1
川間川 (新川間橋)	-	-	+	+	2
芦名川(芦名橋)	-	-	-	+	1
前田川 (前田中橋)	-	+	-	-	1
関根川 (粒石橋)	-	-	-	+	1





# Ⅲ ウイルス性感染症



### Ⅲ ウイルス性感染症

#### 1 日本脳炎

##### (1) 日本脳炎感染源調査

神奈川県衛生研究所

近年におけるわが国の日本脳炎の発生は、西日本を中心に流行が見られる。日本脳炎ウイルス（JEV）の侵淫度を追跡し流行予測を行うため、ブタの JEV 抗体保有状況を調査した。

神奈川食肉センターに持ち込まれた生後 5～8 ヶ月齢の県内産の豚を対象に、平成 15 年 7 月から 9 月までの期間に、7 回、20 頭ずつ、計 140 頭について、血中の JaGAr01 株に対する血球凝集抑制（HI）抗体および 2-ME 感受性抗体をそれぞれ測定した。

その結果、HI 抗体および 2-ME 感受性抗体は検出されなかった。県内での調査結果から JEV の侵淫度は例年以下と思われた。神奈川県では平成 15 年度も平成 14 年度と同様に、患者発生はなかった。

（佐藤利明、古屋由美子、今井光信）

#### 2 インフルエンザ

##### (1) 神奈川県の発生状況

神奈川県衛生部保健予防課

インフルエンザについては、その実数をつかむことが困難なため、学校等における集団発生状況を参考とする。

平成 15 年 12 月から平成 16 年 3 月にかけて発生した集団かぜは、ウイルス分離状況から、昨シーズン同様 A 香港型と B 型によるものと考えられたが、ウイルス分離数の比率は A 香港型がほとんどを占めた。

平成元年以降の集団かぜの発生に伴うウイルスの分離状況は、表 1 のとおりである。今期の集団かぜによる欠席者数は、552 施設、8,919 人であった。施設別の発生状況は、表 2 のとおりである。

表 1 集団かぜ発生状況

年度	区分	発生年月日	終息年月日	発生施設数	学級閉鎖数	欠席者数	ウイルス型
元		元. 11. 13	2. 3. 12	2,168	5,138	52,483	A (H3N2) B
2		2. 12. 13	3. 3. 11	1,138	2,125	20,227	A (H3N2)
3		3. 11. 25	4. 3. 16	832	1,485	14,721	A (H1N1) A (H3N2)
4		4. 11. 25	5. 3. 17	1,316	1,875	20,308	B
5		5. 11. 24	6. 3. 17	336	444	4,792	A (H3N2)
6		6. 11. 10	7. 3. 16	990	1,272	14,424	A (H3N2) B
7		7. 11. 30	8. 3. 18	381	451	5,628	A (H1N1) A (H3N2)
8		8. 11. 26	9. 3. 17	410	495	5,219	B
9		9. 12. 3	10. 3. 19	1,794	3,293	38,782	A (H3N2) A (H3N2)
10		10. 11. 6	11. 3. 18	1,938	2,949	33,370	B
11		11. 11. 19	12. 3. 17	1,070	1,498	18,778	A (H1N1) A (H3N2)
12		12. 12. 12	13. 3. 19	143	144	1,535	A (H1N1) B
13		13. 11. 16	14. 3. 19	791	1,059	12,336	A (H1N1) A (H3N2)
14		14. 12. 13	15. 3. 17	1,115	1,430	19,024	A (H3N2) B
15		15. 12. 8	16. 3. 22	552	697	8,919	A (H3N2) B

A (H1N1)は、Aソ連型  
A (H3N2)は、A香港型  
Bは、B型

表 2 集団かぜ発生状況（平成15年）

	施設数	学級閉鎖数	欠席者数	学年閉鎖数	学校閉鎖数
保育園・幼稚園	25	34	452	1	4
小学校	288	370	3,786	16	0
中学校	224	269	4,368	54	0
その他	15	24	313	6	0
計	552	697	8,919	77	4

## (2) 神奈川県域のインフルエンザの動向

神奈川県衛生研究所

インフルエンザ流行閑期にあたる平成 15 年 8 月に小田原保健所からインフルエンザ様患者の検査依頼があり、咽頭拭い液からのウイルス分離を行ったところ、インフルエンザウイルス A 香港 (H3) 型が分離された。この患者は、発症当日に豪州から帰国しており、小田原保健所管内からの患者報告が他にないこと、豪州ではインフルエンザ流行期にあたっていたことから、渡航中に感染したものと考えられた。なお、この事例からの二次感染を疑う報告はなかった。

平成 15 年度冬季における県域のインフルエンザ流行は、15 年 12 月から 16 年 3 月にかけて起こった。感染症発生動向調査による患者報告数は、12 月中 (15 年 52 週まで) はさほど多く無かったが、年が明けた 16 年 2 週以降に急増し、5 週にピーク (定点あたり罹患数 38.18 人) をむかえた後、緩やかに減少していった。本シーズン (15 年 44 週~16 年 17 週) における罹患数累積は 2 万人あまりであり、昨シーズンの約 2/3 の流行規模となった (図 1)。

感染症発生動向調査病原体定点で採取された 208 検体についてウイルス分離を実施した。シーズン初期から A 香港 (H3) 型が分離され続け、B 型や他のウイルスはごくわずかであった。分離ウイルスの内訳は、インフルエンザウイルス A 香港 (H3) 型 150 株、同 B 型 3 株、アデノウイルス 3 型 1 株、未同定ウイルス 1 株となった。

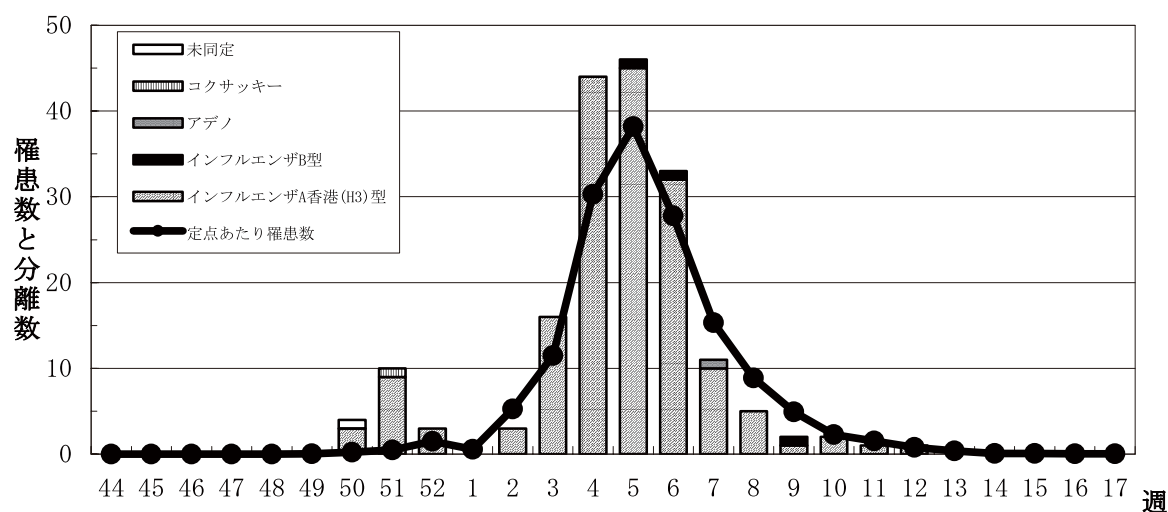
県域、横須賀市および相模原市の各保健所管内初発集団かぜ (10 集団 43 名) について、病原体検索を行った。12 月 3 集団 (14 名)、1 月 7 集団 (21 名) の検査依頼があり、いずれの場合も A 香港 (H3) 型に起因していると考えられた。また、A 香港 (H3) 型と同時にコクサッキーウイルス B1 型も分離された患者が 1 名いた。

インフルエンザ分離株の抗原性の変異を HI 試験の成績から見ると、A 香港 (H3) 型はワクチン株の A/パナマ/2007/99(H3N2)類似株 (HI 価がホモ価と 2 倍差以内) が 2/3、標準抗血清との交差反応性が低い株 (HI 価がホモ価と 4 倍差以上) が 1/3 の割合で存在し、変異株の割合が昨シーズンよりも増えた。一方、B 型は、ワクチン株の B/山東/7/97 (ビクトリア系統) とともに B/ヨハネスバーグ/5/99 (山形系統) とともに交差が見られず、B/鹿児島/11/2002 (ビクトリア系統) の抗血清にのみ反応した。したがって、B 型分離株は、ワクチン株系統の変異株であったと考えられた。

以上のように、平成 15 年度の神奈川県域におけるインフルエンザの流行は、流行の立ち上がりやピーク時の患者数は昨シーズン並であったが、昨シーズンと異なり流行後半に B 型の流行がみられなかったことから、結果的に昨シーズンよりも流行規模が小さくなったと考えられた。インフルエンザウイルス分離数の内訳比率からみて、A 香港 (H3) 型単独流行であったと思われる。なお、A ソ連 (H1) 型は分離されなかった。

(渡邊寿美、斎藤隆行、今井光信)

図1 インフルエンザ様患者の定点あたり罹患数とウイルス分離数



### (3) 横浜市のインフルエンザの動向

横浜市衛生研究所

横浜市結核・感染症発生動向調査による平成15年11月から平成16年4月までのインフルエンザ様疾患患者数は16,271人と昨シーズン同期間における患者数28,957人を下回り、1998/99シーズンの16,414人と同規模の患者発生であった。定点あたり患者数は1月上旬から増えはじめ、1月(第5週)に31.1人とピークとなり、その後減少した(図1)。

集団かぜの初発は平成16年1月20日(第4週)に西区の高等学校からの報告であった。各区の集団かぜ発生はこの週に集中し、終息までの発生数は10区26施設68学級であった。検査依頼のあった10集団30人についてウイルス学的調査を実施し、7集団からAH3型ウイルスが14件分離又は遺伝子が検出され、1集団は血清抗体調査からAH3型ウイルスの感染が推定された。

定点ウイルス調査においては、平成15年11月から平成16年4月までの6カ月間に採取した咽頭ぬぐい液313検体よりAH3型80株、B型4株を分離した。また、RT-PCRによる遺伝子検索では分離以外にAH3型8件、B型ウイルス6株で合計98株が分離または検出され、ウイルス型の割合はAH3型89.8%、B型10.2%であった。なお、この中には、PCRでAH3型ウイルスとB型ウイルスの両方検出された1例が含まれていた。このうちAH3型ウイルスについては平成15年12月第49週に金沢区の定点検体からはじめて1株分離され、翌々週の12月20日には港北区定点検体から2株分離された。その後1月第4週をピークとして3月第10週まで分離が続いた。一方、B型ウイルスは12月15日(第51週)に鶴見区定点検体からはじめてウイルス遺伝子が検出され、翌週には港北区定点検体からも遺伝子が検出された。年明け後は2月第8週に港北区定点からはじめて分離され、AH3型ウイルスと入れ替わるかと思われた。しかし、その後分離されたのは3株で、4月以降はB型ウイルス遺伝子が2検体より検出されたのみであった(図2)。

分離株についてHA抗原の性状を調べたところ、AH3型ウイルス97株の多くの株はワクチン株であるA/Panama/2007/99およびA/熊本/102/2002、さらに2002/2003シーズンのA/横浜/95/2002とHI価が類似していた。しかし、9株についてはA/Panama/2007/99からHI価で8倍の差がみられた。その割合は分離株総数の9.3%(9/97)であったが、A/熊本/102/2002とはよく類似していた(表1)。一方、B型ウイルス4株はワクチン株であるVictoria系統のB/Shandong/07/97や2002/2003シーズンに分離された同系統のB/横浜/62/2003の抗血清に反応せず、すべて抗原性が異なる山形系統のB/Johannesburg/5/99に類似した抗原性状を示した(表2)。

遺伝子系統樹解析では、今シーズンのAH3型ウイルスはA/Fujian/411/2002から4個のアミノ酸変異がみられた。B型ウイルスは山形系統のB/Harbin/07/94から進化したグループのウイルスが中心であったが、Victoria系統のウイルスも混在していた(図3、図4)。

以上のように横浜市における2003/2004シーズンにおけるインフルエンザの流行は小規模なものであった。主流となったのはAH3型ウイルスで、山形系統のB型ウイルスも分離された。

(川上千春、七種美和子、野口有三、藤井菊茂、鳥羽和憲)

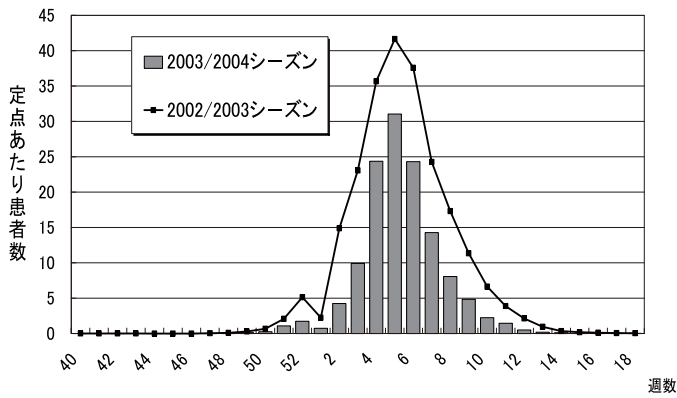


図1 定ポイントあたり患者数

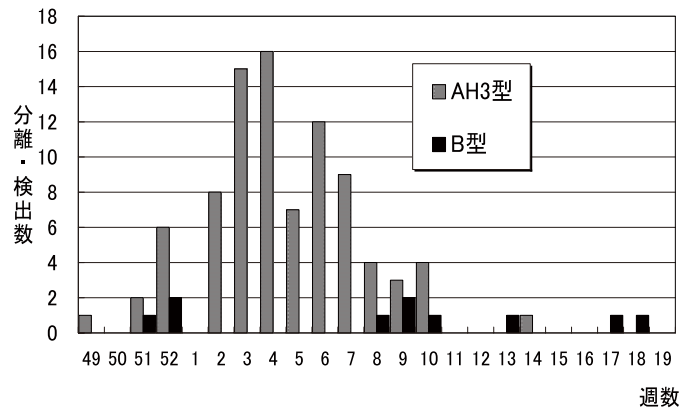


図2 ウイルス分離・検出状況

表1 AH3型ウイルスの抗原性状

抗原	フェレットまたはマウスで免疫した抗血清			
	A/Panama/2007/99* (640)	A/熊本/102/2002 (1280)	A/横浜/95/2002 (640)	A/横浜/59/2003 (160)
A/横浜/70/2003	320	2560	640	160
A/横浜/17/2004	320	1280	640	320
A/横浜/31/2004	160	640	640	160
A/横浜/4/2004	80	1280	160	80
A/横浜/40/2004	80	1280	320	80
A/横浜/60/2004	80	640	160	80

\* 2003/2004シーズンワクチン株 ( )内は免疫抗原と同じウイルスを用いて測定したHI価

表2 B型ウイルスの抗原性状

抗原	フェレットまたはマウスで免疫した抗血清				
	B/Shandong/07/97* (40)	B/横浜/62/2003 (640)	B/山梨/166/98 (1280)	B/Johannesburg/5/99 (1280)	B/横浜/4/2003 (320)
B/横浜/1/2004	<10	<10	80	1280	160
B/横浜/2/2004	<10	<10	80	1280	160
B/横浜/3/2004	<10	<10	80	1280	160
B/横浜/4/2004	<10	<10	80	1280	160

\* 2003/2004シーズンワクチン株 ( )内は免疫抗原と同じウイルスを用いて測定したHI価

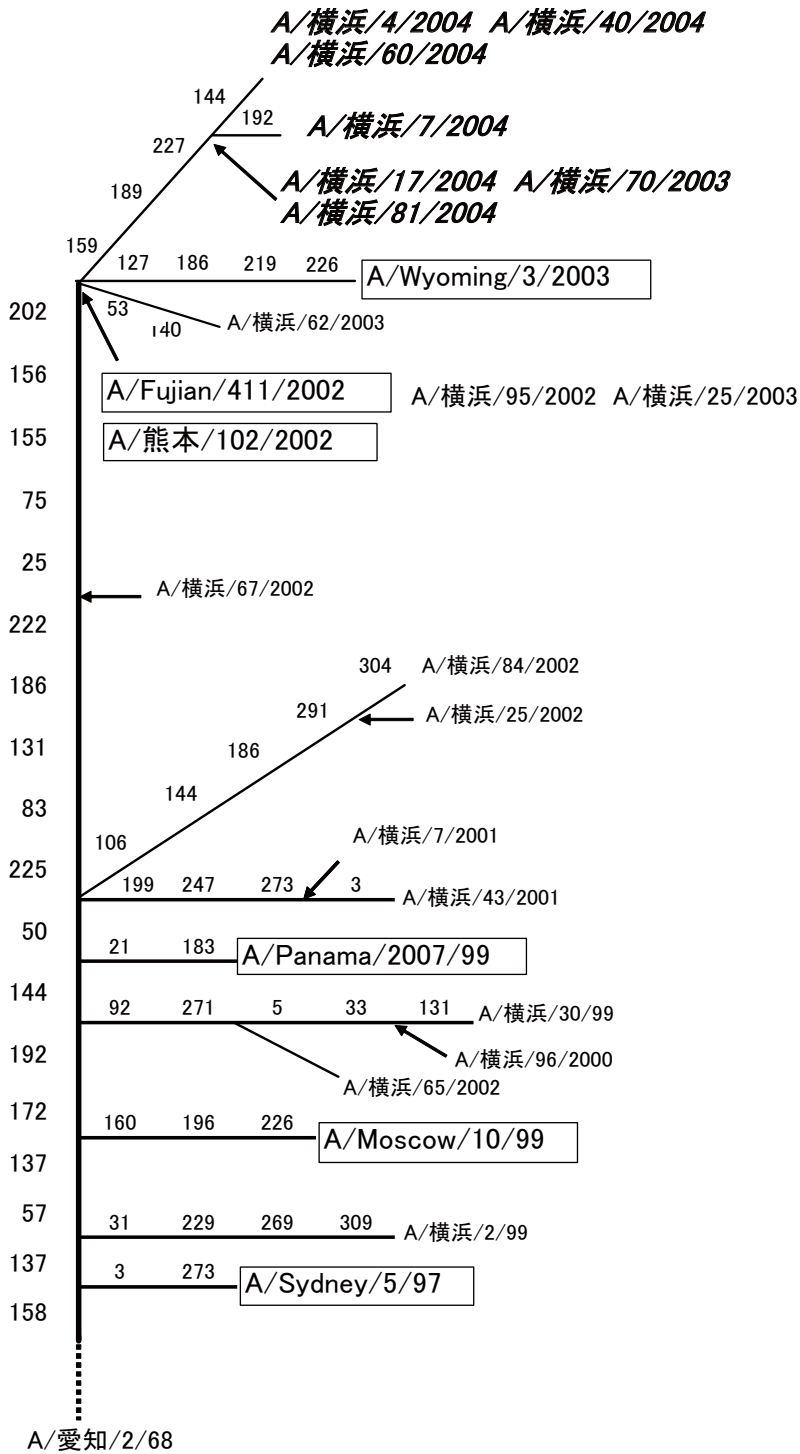


図3 AH3型ウイルスのHA1ポリペプチド進化系統樹





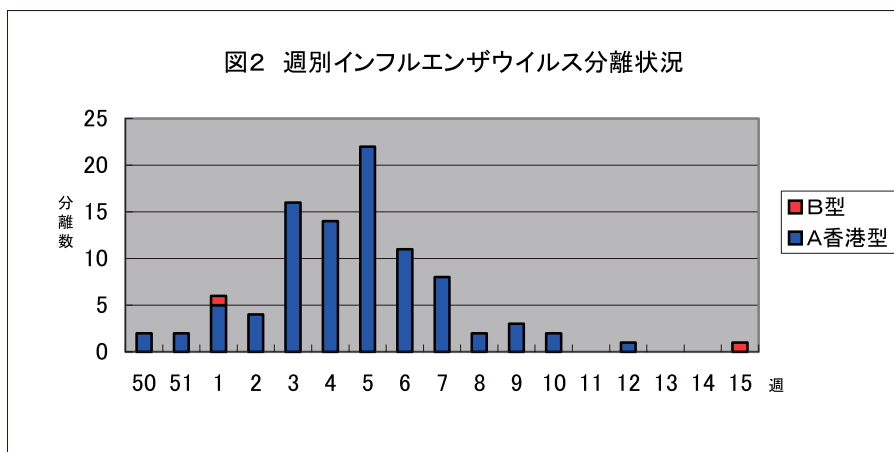
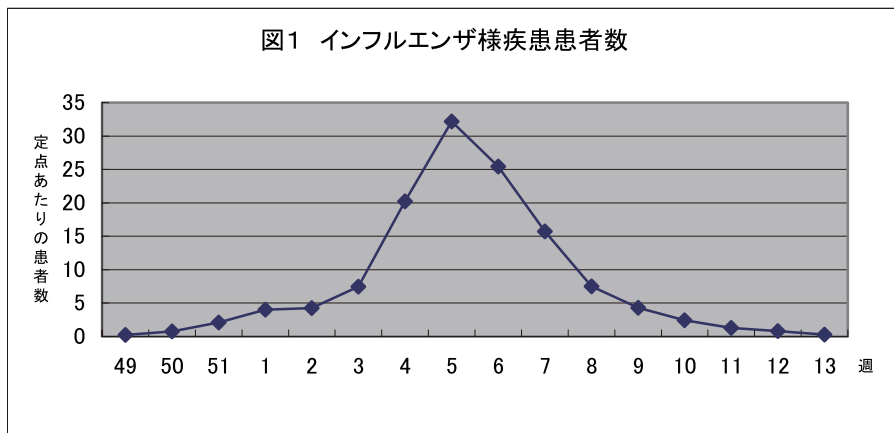
#### (4) 川崎市のインフルエンザの動向

川崎市衛生研究所

川崎市感染症発生動向調査におけるインフルエンザ様疾患患者の発生状況（図 1）によると、患者発生が初めて確認されたのが平成 15 年 12 月の第 1 週（49 週）であった。1 月の 1 週に定点あたりの患者数が 4.00、2 週で 4.26、3 週で 7.46 となり、流行の兆しがみられはじめ患者数は急速に増加し、2 月の 1 週（5 週）で 32.17 と流行のピークを迎えた。その後患者数は減少して 3 月の 4 週（13 週）に終息した。集団かぜは平成 16 年 1 月 19 日に発生し、3 月 11 日に終息するまでに 9 施設 9 学級であった。集団かぜ発生施設のうち、平成 15 年 1 月 28 日から 2 月 5 日までの 2 施設 8 名についてウイルス分離を行ったところ、うがい液から 1 施設 2 名において A 香港型インフルエンザウイルスが分離された。

平成 15 年 4 月から平成 16 年 3 月にかけて、定点医療機関で採取されたインフルエンザ様疾患患者の咽頭ぬぐい液 153 例についてウイルス分離を行った。そのうち 93 例（60.8%）からインフルエンザウイルスが分離され、その内訳は A 香港型 92 株、B 型 1 株であった。図 2 によると、はじめてインフルエンザウイルスが分離されたのは 12 月 13 日で A 香港型が分離された。12 月の分離数は A 香港型 9 株、B 型 1 株分離された。1 月にはいと分離数は増加し、A 香港型 51 株が分離された。2 月は A 香港型が 29 株分離され、3 月は A 香港型が 3 株分離された。最後に分離されたのは 16 年 4 月 5 日に B 型 1 株であった。なお、今期のインフルエンザ様疾患患者からは 2 血清型が分離されたが、A 香港型の流行で、B 型は散発的にみられた程度であった。

（清水英明、平位芳江）



## (5) インフルエンザ感受性調査

神奈川県衛生研究所

平成 15 年 8 月から 9 月の間に採取された 0 歳以上の県民 267 名（0～4、5～9、10～14、15～19、20～29、30～39、40～49、50～59、60 歳以上の 9 区分年齢群各 28～30 名ずつ）の血清について、インフルエンザ各型に対する年齢別抗体保有状況を調査した。使用抗原は、A/ニューカレドニア/20/99 (H1N1)、A/パナマ/2007/99 (H3N2)、B/山東/7/97、B/上海/44/2003 の 4 種類である。抗体保有率は、最低血清希釈倍数の 10HI 価と、感染防御能があるとされている 40HI 価の 2 点で集計した（図 1）。

A/ニューカレドニア/20/99 (H1N1) は、12 年度から 4 期連続してワクチン使用株となっている。本株に対する抗体保有率は、10HI 価でみると最高が 5～9 歳および 10～14 歳の 82.1%、最低が 0～4 歳の 21.9%、40HI 価でみると最高が 10～14 歳の 50%、最低は 50～59 歳の 3.4%あった。全体としては、前年度と比較して保有率に上昇がみられ、昨シーズンの流行を反映した結果であると考えられた（図 1. a）。

A/パナマ/2007/99 (H3N2) は、12 年度から 4 期連続してワクチン使用株となっている。本株に対する抗体保有率は、10HI 価でみると最高が 15～19 歳の 100%、最低が 0～4 歳の 37.5%、40HI 価でみると最高が 10～14 歳の 60.7%、最低が 50～59 歳の 3.4%であった。前年度と比較してほぼ同等の抗体保有率を維持していた（図 1. b）。

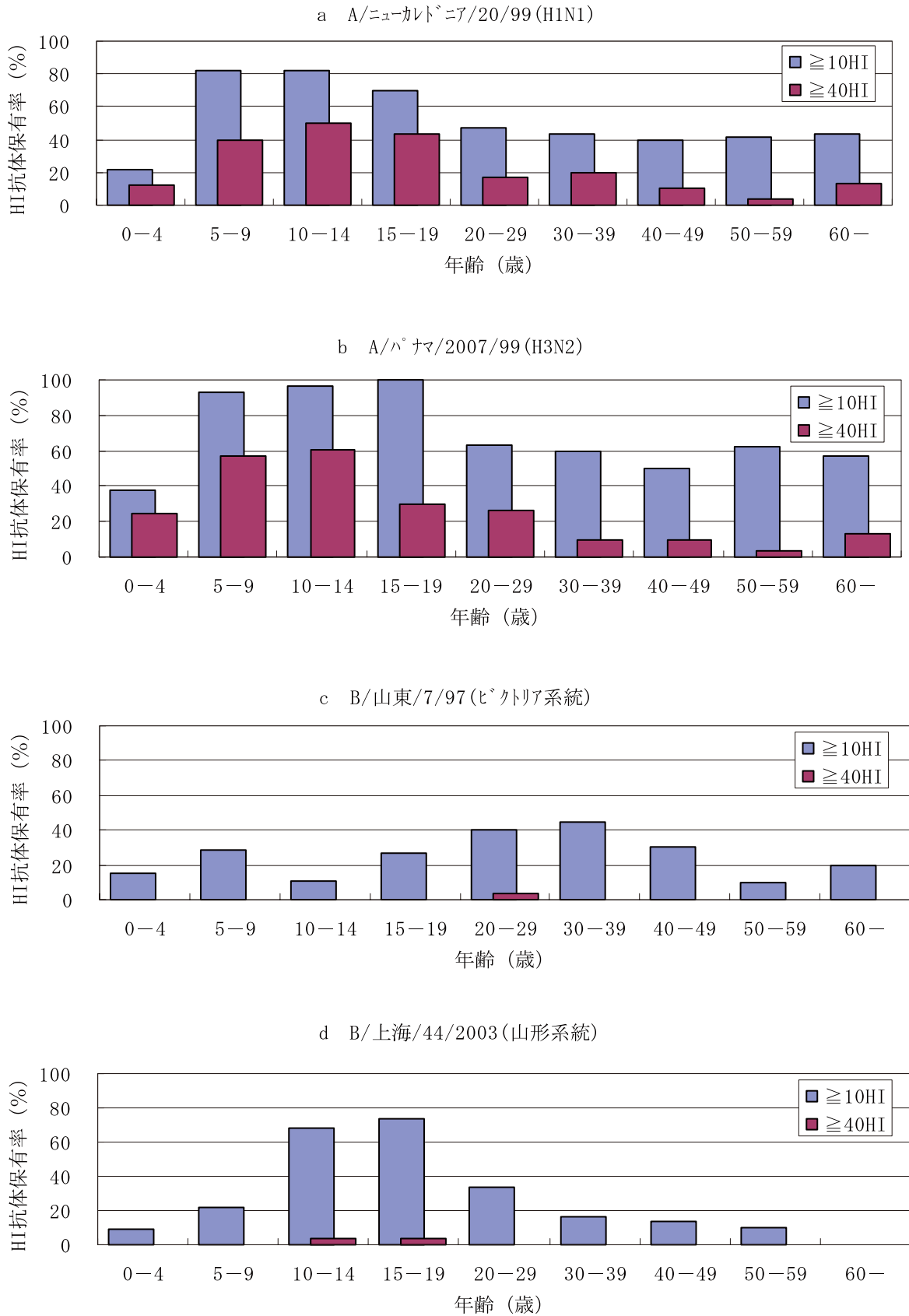
B/山東/7/97 は、14 年度からのワクチン使用株であり、いわゆる”ビクトリア系統”に属する。本株は、9 および 11 年度にもワクチン株に採用されている。本株に対する抗体保有率は、10HI 価でみると最高が 30～39 歳の 44.8%、最低が 50～59 歳の 10%であった。40HI 価の以上の抗体保有者は 267 名中 1 名のみであった。前年度と比較して、全体的に抗体保有率は低下傾向にあった。また、30 歳代に保有率（10HI 価）のピークがあることが特徴であった（図 1. c）。

B/上海/44/2003 は、ワクチン使用株（B/山東株）とは抗原的に別の系統（山形系統）に属する株である。本株に対する抗体保有率は、10HI 価でみると最高が 15～19 歳の 73.3%、最低が 60 歳以上の 0%であった。40HI 価以上の抗体保有者は、B/山東株の場合と同様にほとんど無く、267 名中 2 名のみであった。前年度の調査対象株（B/深圳/407/2001）と比較して、ほぼ同等の抗体保有率であった（図 1. d）。

B 型に対しては全年齢群で、A ソ連（H1N1）型と A 香港（H3N2）型に対しては 0～4 歳および 20 歳以上の各年齢群で、抗体獲得が十分では無いことがわかった。これらの年齢群ではインフルエンザに対する警戒が必要であると考えられた。

（渡邊寿美、今井光信）

図 インフルエンザ感受性調査



### 3 その他の感染症

#### (1) ウエストナイル熱媒介蚊のサーベイランス

神奈川県衛生研究所

近年、アメリカではウエストナイルウイルス (WNV) が流行し、ウエストナイル熱・脳炎患者が発生している。ウエストナイル熱・脳炎は WNV に感染した蚊に刺されることによって起こる病気である。WNV は自然界においては、鳥と蚊の間で感染環が維持されている。これまで日本では患者の発生はなく、成田空港周辺等、一部の地域で行われていた鳥や蚊等の調査では WNV は検出されてはいない。しかし、WNV の侵入監視・流行予測の観点から、県域の蚊を捕獲し WNV 遺伝子の検出を試みた。

蚊は平成 15 年 8 月から 10 月までの期間に、月 1 回合計 3 回、厚木保健所管内、大和保健所管内の二カ所で、捕獲機 (ライトトラップ) を用いて捕獲した。

捕獲されたヤブカ類 (7 プール、合計 20 匹)、イエカ類 (3 プール、合計 8 匹)、クロヤブカ類 (1 匹) について検査したところ、WNV 遺伝子は全て検出されず、WNV の感染は確認されなかった。今後も WNV の動向を監視するために、蚊の調査を継続する必要があると考えられた。

(佐藤利明、稲田貴嗣、古屋由美子、今井光信)

#### (2) 横浜市におけるウエストナイルウイルスのサーベイランス

横浜市衛生研究所

1999 年以來の米国本土におけるウエストナイルウイルス (West Nile Virus; WNV) を原因とするウエストナイル熱の流行の拡大は深刻で、2003 年には 9,862 名の感染者と 264 名の死者が米国 CDC (Center for Disease Control and Prevention) から報告されている。

このような状況の中で、わが国でも平成 14 年 10 月における綾瀬市内の墓地及び厚木基地でのカラスの大量死骸の発見を契機として、WNV に関する記事がマスコミ報道される騒ぎとなった。このうちの 12 羽については、国立感染症研究所と神奈川県衛生研究所で WNV に対する検査が行われ、全て陰性であった (最終的には、農薬が検出された)。

当所としても平成 14 年 11 月 5 日に、住民から通報され死後 24 時間以内と推定される死亡カラス (港北区) を第 1 羽目として、その検体 (脳、心臓、腎臓の各臓器) について WNV 遺伝子の検査を開始した。以後、本格的な事業が始まる平成 15 年 7 月 15 日までに合計 11 羽の死亡カラスについて同様に検査し、全て陰性であった。

平成 15 年 6 月 26 日には、「横浜市ウエストナイル熱等対策検討会設置要綱」が施行されるとともに、平成 15 年 7 月 15 日から市内における本格的な WNV のサーベイランスを新規事業としてスタートした。

方法としては、平成 15 年 7 月 15 日から 11 月 25 日までの毎週 1 回 (全 20 週 20 回)、横浜市内 20 カ所 (緑政局管理の公園計 18 カ所および港湾局管理の敷地内 2 カ所) において蚊を採集し、蚊における WNV の保有状況を調査した。検査に用いた個体数は、2,168 匹であり、WNV 遺伝子は全て陰性であった (表)。蚊の種類は、アカイエカ群が全体の約 70% (1,515/2,168)、ヒトスジシマカが約 23% (494/2,168)、コガタアカイエカはわずか 2.5% (55/2,168) であった。また、死亡カラスについても脳・心臓・腎臓の各臓器を用いて同様に WNV 遺伝子について調査した。平成 14 年 11 月 5 日から平成 16 年 2 月 19 日までに搬入された 26 羽を検査した結果、全て陰性であった。

(野口有三、宇宿秀三、金山彰宏、小曾根恵子、藤井菊茂)

表 横浜市のWNVサーベイランス調査における蚊の月別および種別採集数

採集日（2003年）		7月	8月	9月	10月	11月	総計	
主管（緑政局）		1～3	4～7	8～12	13～16	17～20		
回数	区名							トラップ設置公園
1	鶴見	白幡公園	0	9	12	0	1	22
2	神奈川	神大寺中央公園	3	12	20	11	17	63
3	西	境之谷公園	3	28	46	10	2	89
4	中	柏葉公園	7	56	53	8	2	126
5	南	永田みなみ台公園	0	14	6	1	0	21
6	港南	港南台北公園	2	7	8	3	1	21
7	保土ヶ谷	川島町公園	0	5	1	0	0	6
8	旭	上白根大池公園	1	33	58	5	0	97
9	磯子	洋光台駅前公園	3	11	20	6	2	42
10	金沢	富岡八幡公園	1	17	24	7	3	52
11	港北	綱島公園	11	75	28	2	1	117
12	緑	霧が丘公園	7	10	14	1	0	32
13	青葉	美しが丘公園	15	24	46	1	0	86
14	都筑	鴨池公園	4	12	35	6	3	60
15	戸塚	踊場公園	0	11	18	1	0	30
16	栄	桂山公園	3	13	18	5	1	40
17	泉	いずみ台公園	1	13	9	1	0	24
18	瀬谷	瀬谷中央公園	7	9	11	2	0	29
主管（港湾局）								
19	中	シンボルタワー	33	169	191	91	231	715
20	鶴見	大黒中央公園	113	86	135	42	120	496
合 計		214	614	753	203	384	2168	
蚊の種類	回数	1～3	4～7	8～12	13～16	17～20	総計	
アカイエカ群		170	366	451	155	373	1515	
ヒトスジシマカ		22	172	259	36	5	494	
コガタアカイエカ		3	44	8	0	0	55	
その他		19	32	35	12	6	104	
総 計		214	614	753	203	384	2168	
WNV 遺伝子の検出結果		(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	

- (備考) 1. 蚊の種類の中には、ヤマトヤブカ、キンパラナガハシカ等を含む  
2. WNV 遺伝子検査は、オスの蚊を除く

### (3) ウエストナイルウイルス媒介蚊の調査について

横須賀市衛生試験所

ウエストナイル熱は1999年にニューヨークで患者が発生し、4年でほぼ全米にウイルスが広がりをみせ、2002年には4000名を超す患者が発生し、280名以上が死亡したといわれている。

これまで、厚生労働省による「北米からの直行便における機内及びコンテナ貨物の蚊族調査（ウエストナイルウイルス）」、神奈川県による「カラスの大量死に関連したウエストナイルウイルス遺伝子検査」が実施されているがその結果はいずれも「陰性」と発表されている。

これら国、県の動向を受けて、県内自治体でも媒介蚊の調査が実施され、本市においても平成15年8月より実施し、10月までの各月1回、横須賀市衛生試験所構内にて蚊を採取（ライトトラップ法）し、分類（全てヒトスジシマカであった）した後、神奈川県衛生研究所にPCR法による遺伝子検査を依頼した。結果は表に示すとおりである。

今後もウエストナイルウイルスの国内侵入、流行を監視するため、引き続き調査を行っていくことが必要であると思われる。

表 ウエストナイルウイルス遺伝子検査結果

	採取日	種類	匹数	結果
8月分	8月26日	ヤブカ	7匹	陰性
9月分	9月27日	ヤブカ	2匹	陰性
10月分	10月15日	ヤブカ	2匹	陰性

(有沢幸雄、石川英二)

### (4) 神奈川県（横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市を除く）における麻疹抗体保有状況

神奈川県衛生研究所

昭和53年から義務接種として始まった、わが国の麻疹ワクチンの接種は、平成6年10月の予防接種法改正にともない勧奨性変わった。小児の麻疹ウイルスに対する免疫状態を把握しておくことが必要なことから、昭和54年以降、赤血球凝集抑制（HI）抗体の保有状況について調査を行ってきた。しかしHI抗体の測定に必要なミドリザル血球の入手が困難になったため、平成11年度から麻疹ウイルスが吸着してあるゼラチン粒子による凝集反応法（PA）により抗体の保有状況調査を行った。

平成15年8月から12月の間に神奈川県立足柄上病院で採取された小児の血清86例についてPA法で麻疹ウイルスに対する抗体の測定を行った。

年齢別の抗体保有率は1歳以下が76.2%、他の年齢層（2～14歳）は88.5～100%を示し、平均抗体保有率は90.7%であった。

現在の予防接種が個人接種法で行われていることから、予防接種率の低下が予想される。今後も継続して麻疹に対する抗体保有状況の把握を行うとともに、予防接種の必要性和麻疹に関する適切な知識を普及してゆくことが大切と思われる。

(原みゆき、古屋由美子、今井光信)

麻疹抗体保有状況（採血 平成15年8月～12月）

年齢 (歳)	PA 抗体価									検査数	陽性率 (%)
	<8	8	16	32	64	128	256	512	≥1024		
0-1	5			1	1	1	4	1	8	21	76.2
2-3							1	1	5	7	100.0
4-5					1	1	2	2	5	11	100.0
6-7				1		2	1	3	2	9	100.0
8-9				1		2	1	4	4	12	100.0
10-14	3			1	2	3	5	3	9	26	88.5
合計	8	0	0	4	4	9	14	14	33	86	90.7
(%)	(9.3)	(0.0)	(0.0)	(4.7)	(4.7)	(10.5)	(16.3)	(16.3)	(38.4)		

(5) 神奈川県（横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市を除く）における麻疹抗体保有状況

神奈川県衛生研究所

麻疹流行の予測とその推移を知るため住民の麻疹ウイルスに対する感受性の実態を把握しておくことは重要である。

平成15年においては、一般健康人男女186名を対象として、麻疹ウイルスに対する赤血球凝集抑制(HI)抗体の測定を行った。

結果は年齢別抗体保有状況を陰性率で見ると、1歳以下50.0%、1～4歳30.0%、5～9歳10.0%、10～14歳35.0%、15歳以上0.0～30.0%となり平均陰性率は20.4%であった。

次にHI抗体価をみると16～128倍が69.4%を占め、平均抗体価は $2^{6.2}$ であった。

以上の成績より、4歳以下で抗体保有率が特に低いことがわかった。この年齢層が今後の感染と流行の主体になると考えられる。生後12～90か月を対象にワクチン接種が実施されているが、これらの年齢層の抗体保有状況の推移を監視するとともに、妊娠前および妊娠可能年齢層への麻疹ワクチン接種は継続して奨励する必要があると思われる。

(古屋由美子、原みゆき、今井光信)



風疹抗体保有状況 (採血 平成 15 年 8~12 月)

年齢 (歳)	HI 抗体価									検査数	陰性率 (%)
	<8	8	16	32	64	128	256	512	≥1024		
<1	3	1	1			1				6	50.0
1-4	6		2		6	5			1	20	30.0
5-9	2	1	3	6	6	2				20	10.0
10-14	7	1	4	7			1			20	35.0
15-19	4		2	8	2	3	1			20	20.0
20-24	3		2	1	1	3	2			12	25.0
25-29	4			2	6	5			1	18	22.2
30-34	2			5	4	3	1	1		16	12.5
35-39			2	7		2	2		1	14	0.0
40-49	6	1	2	3	6	1	1			20	30.0
≥50	1	1	4	4	6	2	1	1		20	5.0
合計	38	5	22	43	37	27	9	2	3	186	20.4
(%)	(20.4)	(2.7)	(11.8)	(23.1)	(19.9)	(14.5)	(4.8)	(1.1)	(1.6)		100.0

(6) HIV患者・感染者の状況について

神奈川県衛生部保健予防課

世界の患者・感染者状況 (2003年12月末現在)

1981年6月に世界で初めての症例が報告されて以来、UNAIDS(国連合同エイズ計画)及びWHOの改良されたツールと手法を過去に適用すると、2003年12月末現在で、AIDS患者、HIV感染者は4,000万人(3,400~4,600万人)に達したと推計される。

また、この1年間では500万人(420~580万人)が新たにHIVに感染し、300万人(250~300万人)が死亡したと推計される。

世界の患者の公式報告数の推移

▽1994年 6月・・・	985,119人
↓1994年12月・・・	1,025,073人
↓1995年12月・・・	1,291,810人
↓1996年11月・・・	1,544,067人
↓1997年11月・・・	1,736,958人
↓1998年11月・・・	1,987,217人
↓1999年11月・・・	2,201,461人
↓2000年11月・・・	2,312,860人
↓2001年11月・・・	2,784,317人
↓2002年11月・・・	2,822,111人
↓2003年12月・・・	5,000,000人
	(4,200,000 ~5,800,000人)

HIV/AIDSに関する地域別推計値(2003年末現在 UNAIDS及びWHO報告)

地域	HIV感染者・AIDS患者数	新規HIV感染者数	成人HIV陽性率(%)*	AIDSによる死亡者数
サハラ以南 アフリカ	2,500-2,820万人	300-340万人	7.5-8.5%	230-240万人
北アフリ カ・ 中東	47-73万人	4.3-6.7万人	0.2-0.4%	3.5-5万人
南・南東 アジア	460-820万人	61-110万人	0.4-0.8%	33-59万人
東アジア・ 太平洋	70-130万人	15-27万人	0.1-0.1%	3.2-5.8万人
ラテン アメリカ	130-190万人	12-18万人	0.5-0.7%	4.9-7万人
カリブ海沿 岸	35-59万人	4.5-8万人	1.9-3.1%	3-5万人
東欧・ 中央アジア	120-180万人	18-28万人	0.5-0.9%	2.3-3.7万人
西欧	52-68万人	3-4万人	0.3-0.3%	2,600-3,400
北アメリカ	79-120万人	3.6-5.4万人	0.5-0.7%	1.2-1.8万人
オーストラ リア・ニュー ジーランド	1.2-1.8万	700-1,000	0.1-0.1%	100未満
合計	4,000万人 (3,400-4,600万人)	500万人 (420-580万人)	1.1% (0.9-1.3%)	300万人 (250-350万人)

\* 成人(15-49歳)、2003年人口統計を利用して算出

推計値の( )内の範囲に実際の数値が存在する。推計値・範囲は現在入手可能な最良のデータを基にして算出したものである。

## 患者・感染者状況

●日本の状況（2003年12月31日現在）

### 日本の現状

1985年に初めて患者が確認されて以来、2003年12月31日現在の累積では、HIV感染者5,780件、AIDS患者2,892件の合計8,672件が報告されている。

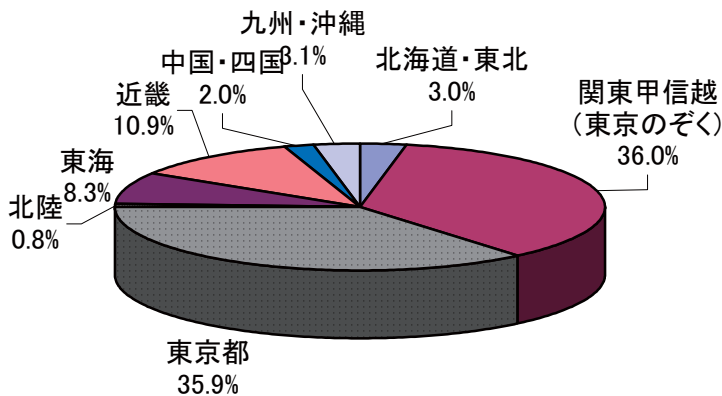
平成15年（2003）では、HIV感染者640件、AIDS患者336件の報告があった。年次推移で見ると、平成15年には平成14年に比しHIV感染者数は26件、AIDS患者数は28件の増加が認められた。

平成15年12月31日までの患者・感染者（累積8,672件）の都道府県別報告数では、東京都3,110件、神奈川県747件、千葉県616件の順になっており、関東甲信越地区が6,229件（71.9%）を占めている。男女比は3：1、日本人男性5,542件（63.9%）、外国人男性1,139件（13.1%）、日本人女性628件（7.3%）、外国人女性1,363件（15.7%）となっている。感染経路別では異性間性的接触3,661件（42.2%）、同性間性的接触2,834件（32.7%）、静注薬物濫用50件（0.6%）、母子感染45件（0.5%）その他不明2,082件（24.0%）となっている。年齢別では20歳代2,723件（31.4%）、30歳代2,692件（31.0%）、40歳代1,613件（18.6%）の順となっている。

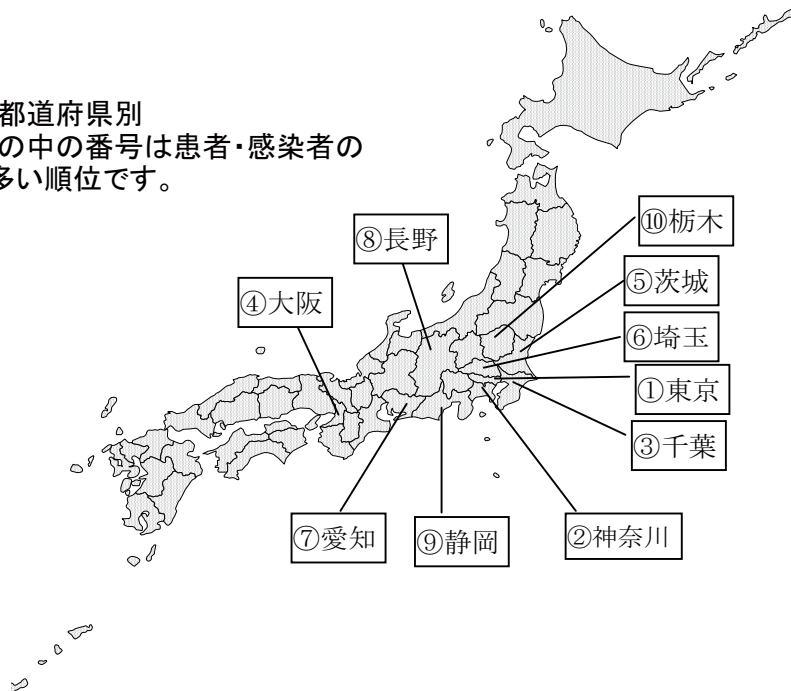
平成15年12月31日までの累積死亡者数は1,311名であった。

なお、血液凝固因子製剤による感染者の1,432名（内患者168名）は含まれていない。

ブロック別の患者・感染者割合



◇都道府県別  
○の中の番号は患者・感染者の多い順位です。



都道府県別エイズ患者・感染者

(2003年12月31日現在)

順位	都道府県別	患者・感染者 報告件数 (件)	構成割合 (%)	ブロック別患者・感染 者数報告件数 (件)	構成割合 (%)
	1 北海道	91 ( 12)	1.1%	北海道・東北	264 3.0%
	2 青森県	21 ( 2)	0.2%		
	3 岩手県	21 ( 3)	0.2%		
	4 宮城県	51 ( 7)	0.6%		
	5 秋田県	16 ( 3)	0.2%		
	6 山形県	19 ( 5)	0.2%		
	7 福島県	45 ( 3)	0.5%		
⑤	8 茨城県	569 ( 33)	6.6%	関東・甲信越	6,229 71.9%
⑩	9 栃木県	202 ( 18)	2.3%		
	10 群馬県	151 ( 16)	1.7%		
⑥	11 埼玉県	376 ( 30)	4.3%		
③	12 千葉県	616 ( 42)	7.1%		
①	13 東京都	3,110 (359)	35.9%		
②	14 神奈川県	747 ( 86)	8.6%		
	15 新潟県	70 ( 4)	0.8%		
	16 山梨県	95 ( 5)	1.1%		
⑧	17 長野県	293 ( 19)	3.4%		
	18 富山県	24 ( 1)	0.3%	北 陸	70 0.8%
	19 石川県	18 ( 5)	0.2%		
	20 福井県	28 ( 2)	0.3%		
⑨	21 岐阜県	57 ( 5)	0.7%	東 海	716 8.3%
	22 静岡県	217 ( 24)	2.5%		
⑦	23 愛知県	341 ( 54)	3.9%		
	24 三重県	101 ( 8)	1.2%		
④	25 滋賀県	36 ( 8)	0.4%	近 畿	949 10.9%
	26 京都府	99 ( 16)	1.1%		
	27 大阪府	601 ( 96)	6.9%		
	28 兵庫県	132 ( 20)	1.5%		
	29 奈良県	48 ( 10)	0.6%		
	30 和歌山県	33 ( 6)	0.4%		
	31 鳥取県	5 ( 1)	0.1%	中国・四国	176 2.0%
	32 島根県	6 ( 1)	0.1%		
	33 岡山県	25 ( 6)	0.3%		
	34 広島県	46 ( 10)	0.5%		
	35 山口県	16 ( 1)	0.2%		
	36 徳島県	8 ( 3)	0.1%		
	37 香川県	13 ( 0)	0.1%		
	38 愛媛県	42 ( 9)	0.5%		
	39 高知県	15 ( 2)	0.2%		
	40 福岡県	111 ( 13)	1.3%	九州・沖縄	268 3.1%
	41 佐賀県	5 ( 1)	0.1%		
	42 長崎県	22 ( 3)	0.3%		
	43 熊本県	26 ( 4)	0.3%		
	44 大分県	11 ( 3)	0.1%		
	45 宮崎県	10 ( 2)	0.1%		
	46 鹿児島県	27 ( 5)	0.3%		
	47 沖縄県	56 ( 10)	0.6%		
		8,672 (976)	100.0%		100.0%

注1 血液凝固因子製剤による感染者は除いています。○数字は感染者数の多い順です。

( ) 内は平成15年中(15年12月31日まで)の報告数です。

患者・感染者状況

●全国（2003年12月31日現在）

■一年次推移一

		平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15
男性	総数	207	290	335	455	492	519	676	669	816	804	864
	感染者	135	171	194	254	283	319	418	389	534	536	573
	患者	72	119	141	201	209	200	258	280	282	268	291
女性	総数	156	144	111	155	155	134	155	122	137	118	112
	感染者	142	127	83	122	114	103	112	73	87	78	67
	患者	14	17	28	33	41	31	43	49	50	40	45
合計	総数	363	434	446	610	647	653	831	791	953	922	976
	感染者	277	298	277	376	397	422	530	462	621	614	640
	患者	86	136	169	234	250	231	301	329	332	308	336

■一感染経路別一

		異性間性的接触	同性間性的接触	その他・不明	合計
男性	総数	2,413	2,830	1,438	6,681
	感染者	1,353	2,125	716	4,194
	患者	1,060	705	722	2,487
女性	総数	1,248	4	739	1,991
	感染者	1,017	1	568	1,586
	患者	231	3	171	405
合計	総数	3,661	2,834	2,177	8,672
	感染者	2,370	2,126	1,284	5,780
	患者	1,291	708	893	2,892

\*その他・不明には、静注薬物濫用や母子感染が含まれています。

\*同性間性的接触には、両性間性的接触も含まれています。

■一国籍別一

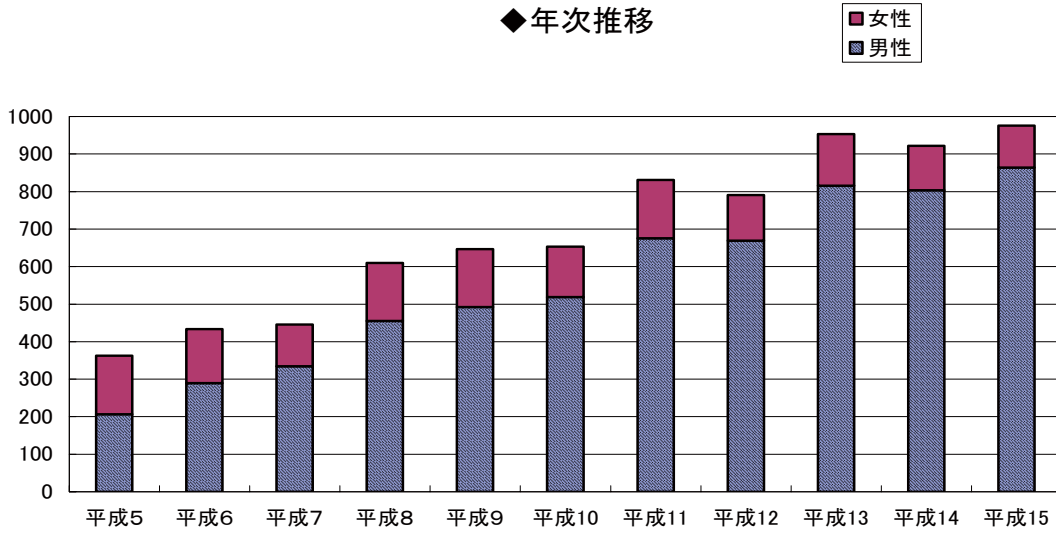
		日本人	外国人	合計
男性	総数	5,542	1,139	6,681
	感染者	3,534	660	4,194
	患者	2,008	479	2,487
女性	総数	628	1,363	1,991
	感染者	459	1,127	1,586
	患者	169	236	405
合計	総数	6,170	2,502	8,672
	感染者	3,993	1,787	5,780
	患者	2,177	715	2,892

■一年齢区分別一

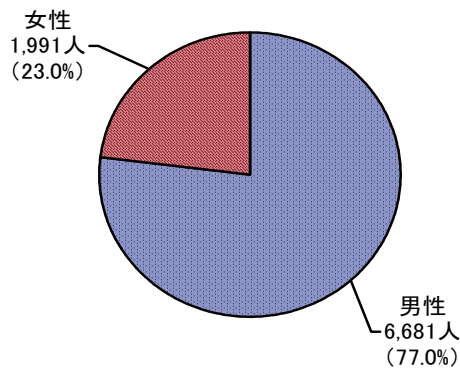
		20歳未満	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50歳以上	不明	合計
男性	総数	57	1,614	2,200	1,477	1,329	4	6,681
	感染者	46	1,324	1,453	774	593	4	4,194
	患者	11	290	747	703	736	0	2,487
女性	総数	129	1,109	492	136	118	7	1,991
	感染者	120	979	335	77	68	7	1,586
	患者	9	130	157	59	50	0	405
合計	総数	186	2,723	2,692	1,613	1,447	11	8,672
	感染者	166	2,303	1,788	851	661	11	5,780
	患者	20	420	904	762	786	0	2,892

\*血液凝固因子製剤による患者・感染者は除いてあります。

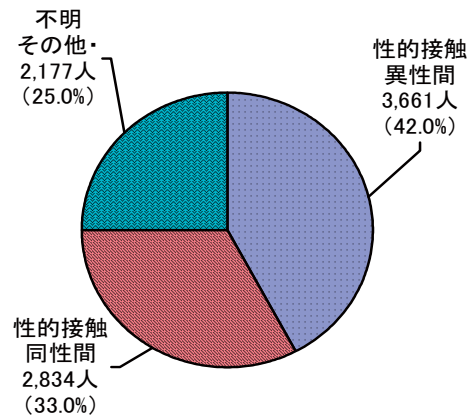
◆年次推移



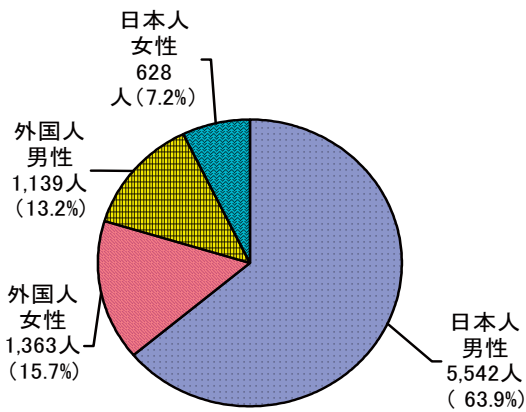
◆男女別



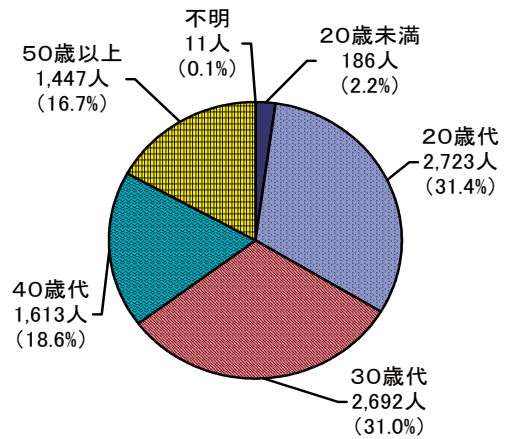
◆感染経路別



◆国籍別



◆年齢区分別



患者・感染者状況

●全国（2003年12月31日現在）

■日本のエイズ患者・感染者の年次推移（感染経路別）

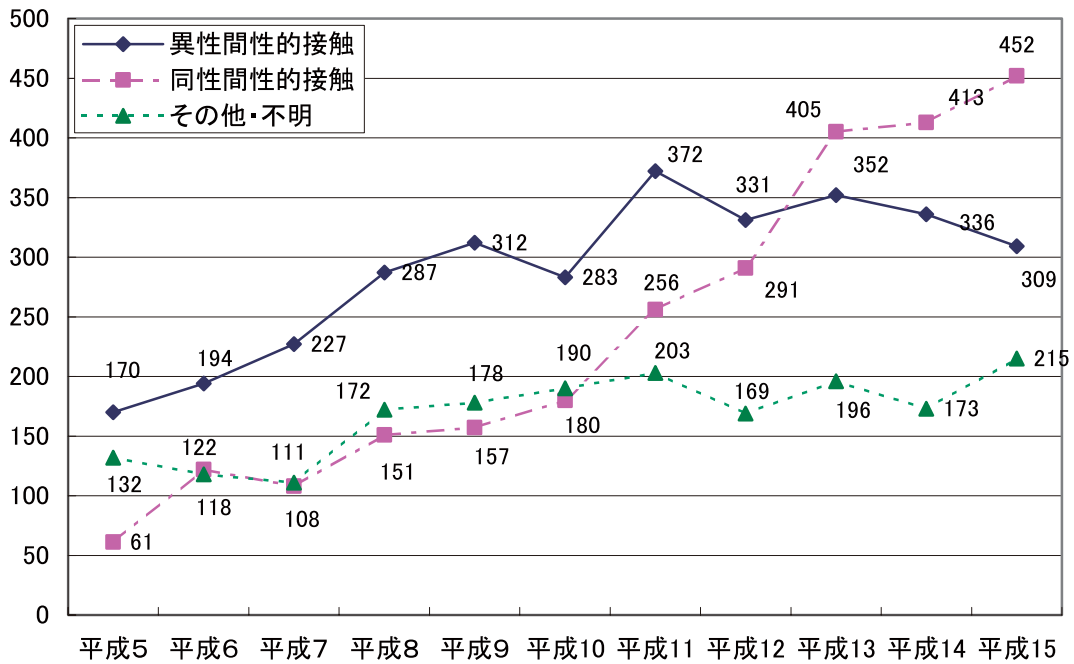
	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15
異性間性的接触	170	194	227	287	312	283	372	331	352	336	309
同性間性的接触	61	122	108	151	157	180	256	291	405	413	452
その他・不明	132	118	111	172	178	190	203	169	196	173	215
（内母子感染）	4	4	3	9	4	2	3	5	2	3	1
合 計	363	434	446	610	647	653	831	791	953	922	976

\*その他・不明には、静注薬物濫用や母子感染が含まれています。

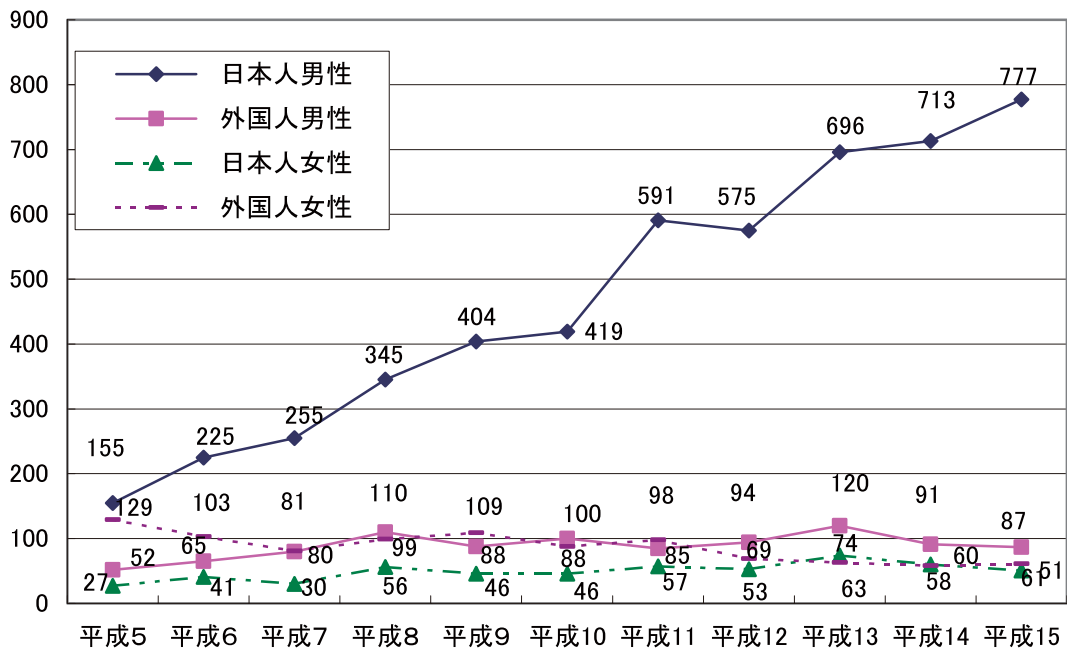
■日本のエイズ患者・感染者の年次推移（男女国籍別）

	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15
日本人男性	155	225	255	345	404	419	591	575	696	713	777
外国人男性	52	65	80	110	88	100	85	94	120	91	87
日本人女性	27	41	30	56	46	46	57	53	74	60	51
外国人女性	129	103	81	99	109	88	98	69	63	58	61
合 計	363	434	446	610	647	653	831	791	953	922	976

●日本のエイズ患者・感染者の年次推移（感染経路別）



●日本のエイズ患者・感染者の年次推移（男女国籍別）





患者・感染者状況

●神奈川県（2003年12月31日現在）

■一年次推移一

		平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15
男性	総数	16	33	34	42	44	58	64	50	65	62	73
	感染者	8	23	18	23	27	36	39	32	36	40	39
	患者	8	10	16	19	17	22	25	18	29	22	34
女性	総数	10	12	7	13	24	12	15	12	18	7	13
	感染者	9	11	6	10	13	10	15	9	10	7	5
	患者	1	1	1	3	11	2	0	3	8	0	8
合計	総数	26	45	41	55	68	70	79	62	83	69	86
	感染者	17	34	24	33	40	46	54	41	46	47	44
	患者	9	11	17	22	28	24	25	21	37	22	42

■一感染経路別一

		異性間性的接触	同性間性的接触	その他・不明	合計
男性	総数	229	226	130	585
	感染者	135	158	60	353
	患者	94	68	70	232
女性	総数	100	0	62	162
	感染者	82	0	42	124
	患者	18	0	20	38
合計	総数	329	226	192	747
	感染者	217	158	102	477
	患者	112	68	90	270

\*その他・不明には、静注薬物濫用や母子感染が含まれています。

■一国籍別一

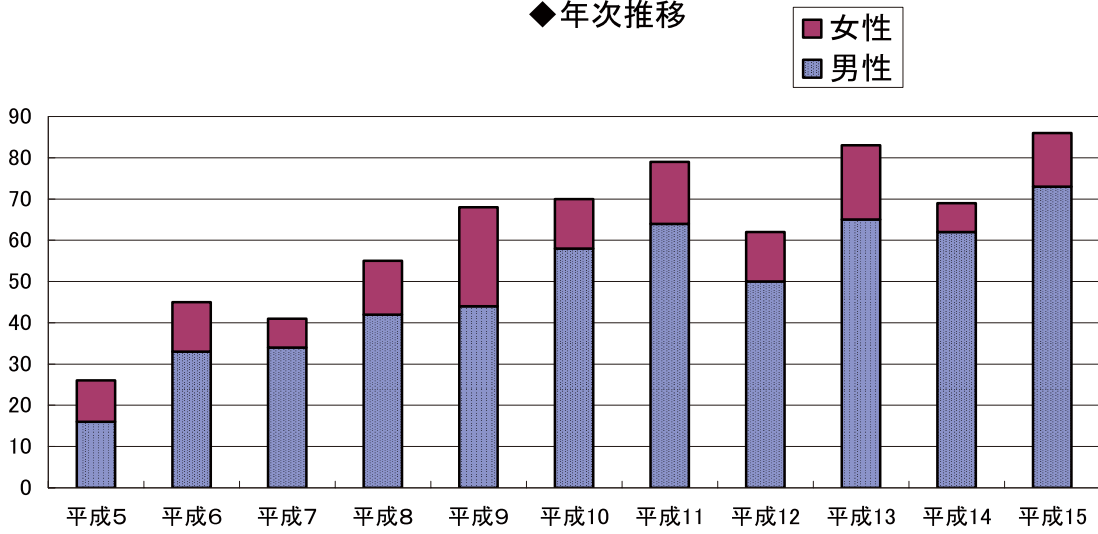
		日本人	外国人	不明	合計
男性	総数	488	96	1	585
	感染者	299	55	0	354
	患者	189	41	1	231
女性	総数	57	104	1	162
	感染者	44	80	0	124
	患者	13	24	1	38
合計	総数	545	200	2	747
	感染者	343	135	0	478
	患者	202	65	2	269

■一年齢区分別一

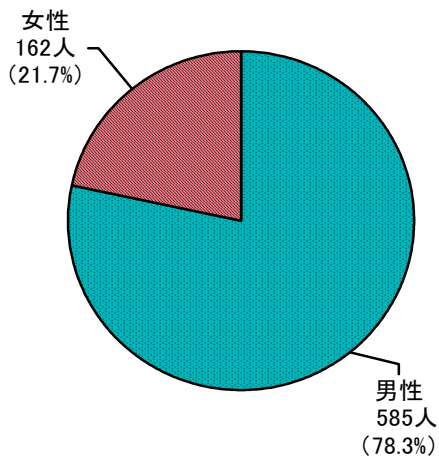
		20歳未満	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50歳以上	合計
男性	総数	8	146	171	134	126	585
	感染者	7	114	114	68	51	354
	患者	1	32	57	66	75	231
女性	総数	7	80	50	16	9	162
	感染者	7	71	29	9	8	124
	患者	0	9	21	7	1	38
合計	総数	15	226	221	150	135	747
	感染者	14	185	143	77	59	478
	患者	1	41	78	73	76	269

\*血液凝固因子製剤による患者・感染者は除いてあります。

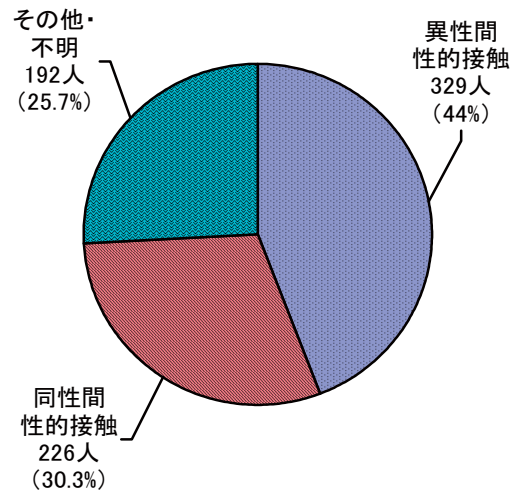
◆年次推移



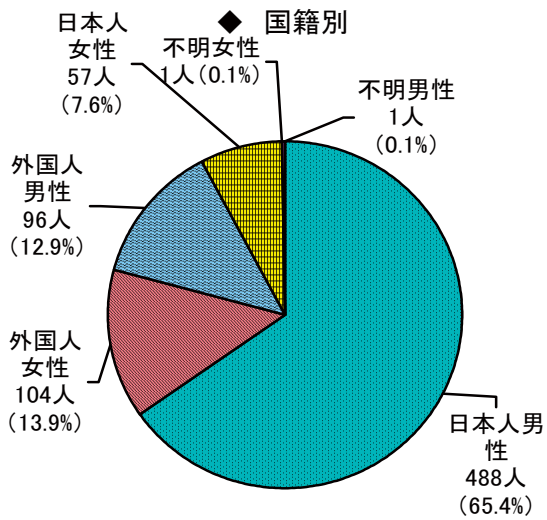
◆ 男女別



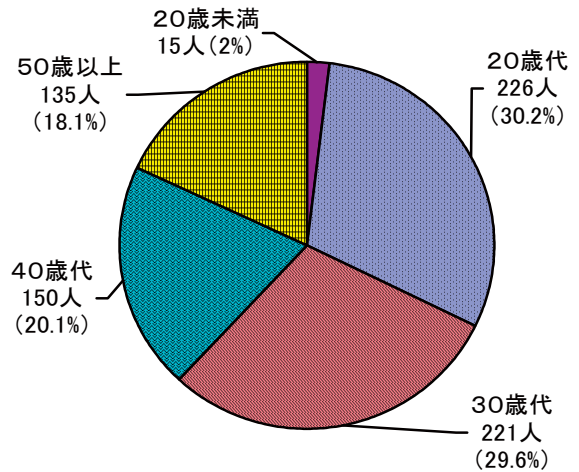
◆ 感染経路別



◆ 国籍別



◆ 年齢区分別



患者・感染者状況

●神奈川県（2003年12月31日現在）

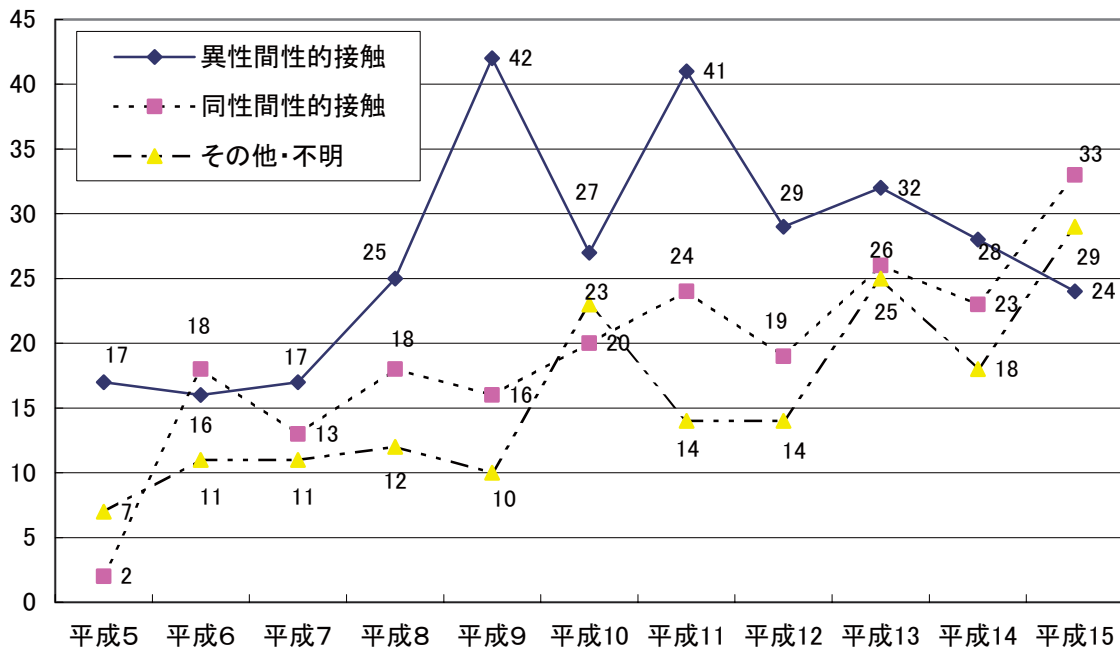
■神奈川県のエイズ患者・感染者の年次推移（感染経路別）

	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15
異性間性的接触	17	16	17	25	42	27	41	29	32	28	24
同性間性的接触	2	18	13	18	16	20	24	19	26	23	33
その他・不明	7	11	11	12	10	23	14	14	25	18	29
（内母子感染）	0	1	0	1	0	0	0	1	0	1	0
合 計	26	45	41	55	68	70	79	62	83	69	86

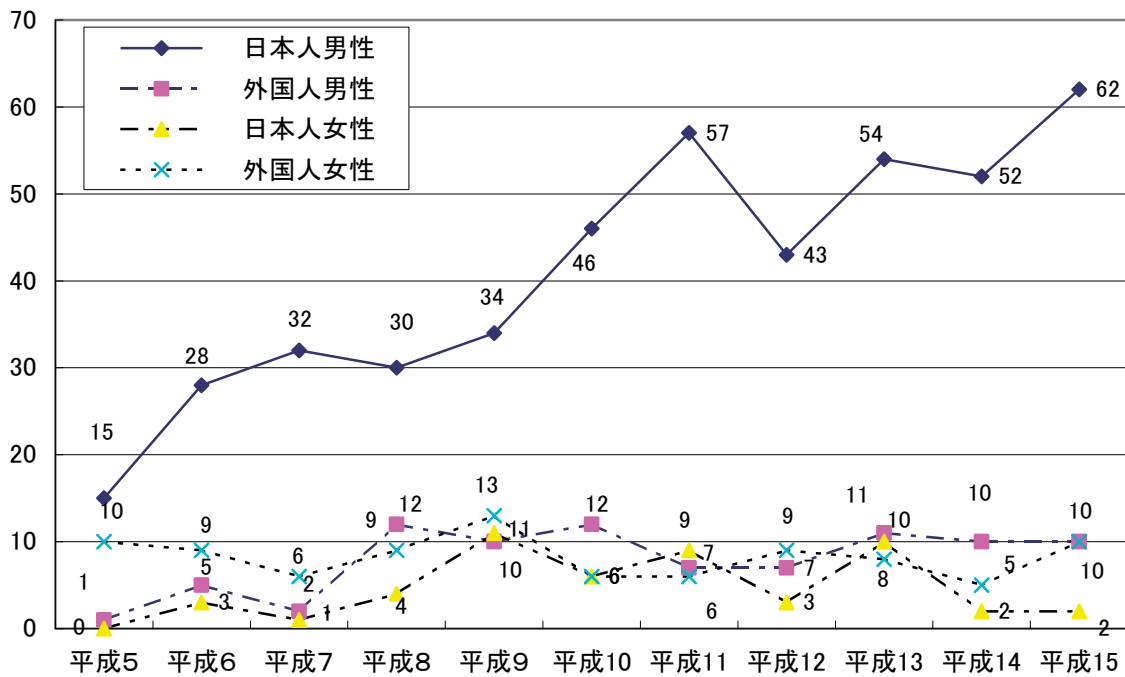
■神奈川県のエイズ患者・感染者の年次推移（男女国籍別）

	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15
日本人男性	15	28	32	30	34	46	57	43	54	52	62
外国人男性	1	5	2	12	10	12	7	7	11	10	10
日本人女性	0	3	1	4	11	6	9	3	10	2	2
外国人女性	10	9	6	9	13	6	6	9	8	5	10
不明											2
合 計	26	45	41	55	68	70	79	62	83	69	86

■ 神奈川県のエイズ患者・感染者の年次推移（感染経路別）



■ 神奈川県のエイズ患者・感染者の年次推移（男女国籍別）

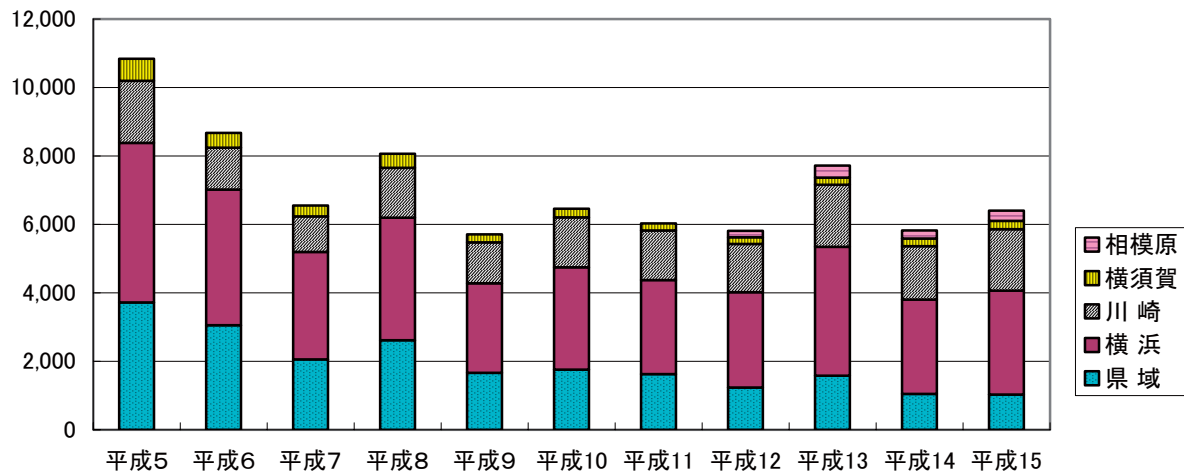


■神奈川県一検査実施年次推移一

●神奈川県（2003年12月31日現在）

	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15
県域	3,715	3,054	2,057	2,614	1,663	1,756	1,630	1,235	1,583	1,045	1,026
横浜	4,669	3,963	3,135	3,580	2,619	2,994	2,740	2,787	3,759	2,763	3,036
川崎	1,810	1,225	1,044	1,463	1,192	1,459	1,451	1,405	1,818	1,560	1,802
横須賀	646	435	317	409	233	253	211	195	201	218	237
相模原								193	357	236	301
合計	10,840	8,677	6,553	8,066	5,707	6,462	6,032	5,815	7,718	5,822	6,402

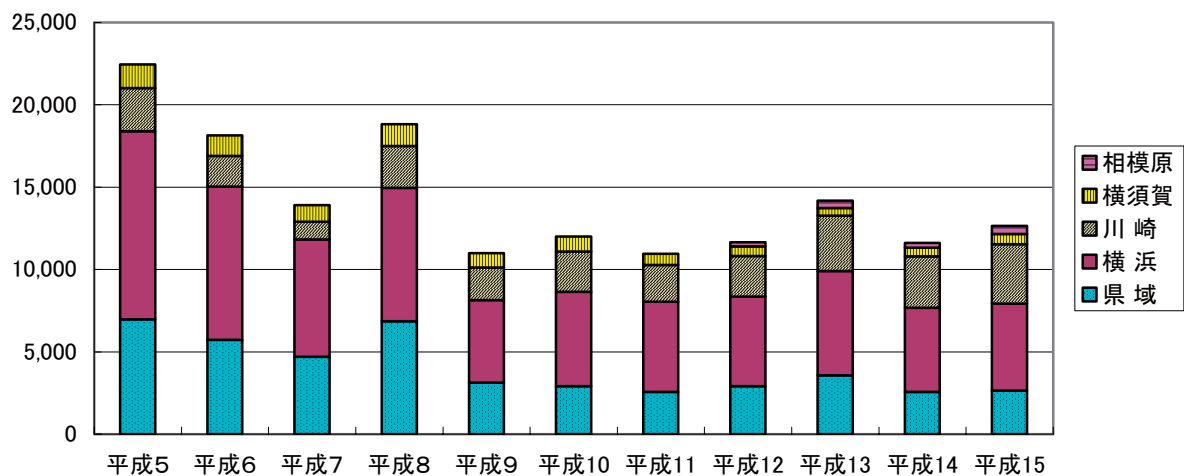
\*相模原は平成12年4月から保健所政令市



■神奈川県一相談年次推移一

	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15
県域	6,965	5,723	4,698	6,854	3,124	2,916	2,567	2,923	3,582	2,560	2,648
横浜	11,433	9,304	7,139	8,109	5,021	5,729	5,483	5,425	6,316	5,110	5,269
川崎	2,626	1,870	1,066	2,544	1,982	2,455	2,219	2,475	3,361	3,124	3,626
横須賀	1,441	1,239	1,012	1,313	873	906	679	581	484	522	617
相模原								248	436	291	492
合計	22,465	18,136	13,915	18,820	11,000	12,006	10,948	11,652	14,179	11,607	12,652

\*相模原は平成12年4月から保健所政令市





## IV そ の 他 の 感 染 症





## IV その他の感染症

### 1 神奈川県で発生したつつが虫病について

神奈川県衛生研究所

昭和58年から平成15年までのつつが虫病患者発生数を年次別にみると、昭和58年から昭和63年までは確定患者2～19名で推移し、平成元年81名、平成2年112名と増加したが、平成3年からは65名、平成4年52名（含む紅斑熱患者2名）、平成5年24名、平成6年39名、平成7年22名、平成8年9名、平成9年9名と減少した。その後、平成10年14名、平成11年31名、平成12年42名と僅かながらであるが増加したが、平成13年7名、平成14年4名と再び減少し、平成15年は6名であった（図1）。

またつつが虫病患者発生を季節別にみると、昭和58年から平成14年の19年間すべての毎年秋期（9～11月）に患者が多く、平成15年についても、10月4名、11月1名、12月1名であり、秋期に大部分の患者が発生した。さらに患者の感染場所（聞き取り調査により推定できたもの）を検討すると、県外で感染して本県で届出されたと思われるものを除いて、平成15年では山北町、南足柄市、小田原市であった。

また、平成15年のつつが虫病感染時の行動も、昨年と同様に畑、田圃など平地での農作業が多く、日常生活での感染の機会が多いことが判明した。

（片山丘、古屋由美子、原みゆき、湯川利恵、沖津忠行、今井光信）

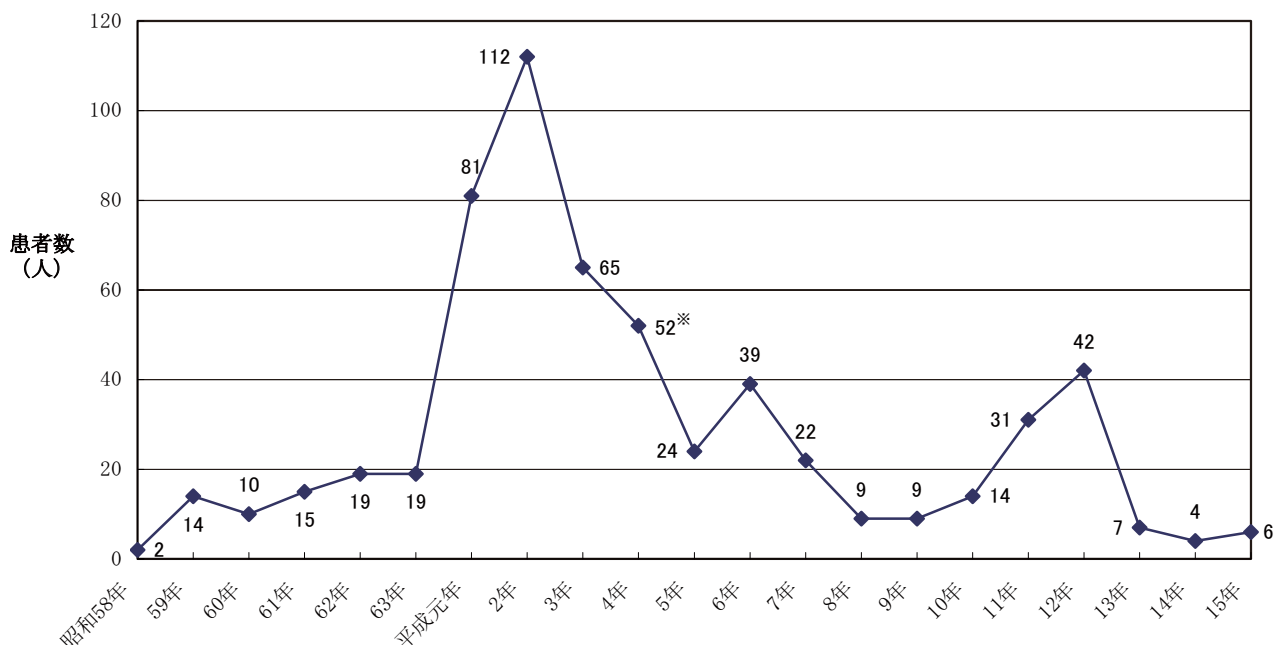


図1 神奈川県における恙虫病患者発生状況

※：紅斑熱患者を含む



# 資 料



1 平成15年 全数把握対象の感染症 保健所報告数

類 型	11月4日まで		2類				3類		4類											保 健 所 別 計			
	11月5日以降		二類				三類		四類					五類									
感染症名	コ レ ラ	細 菌 性 赤 痢	腸 チ フ ス	パ ラ チ フ ス	腸 管 出 血 性 大 腸 菌 感 染 症	オ ウ ム 病	ツ ツ ガ ム シ 病	デ ン グ 熱	マ ラ ア 病	ラ イ ム 病	レ ジ オ ネ ラ 症	ア メ ー バ 赤 痢	急 性 ウ イル ス 性 肝 炎	ク ロ イ ツ フェ ル ト ヤ コ ブ 病	劇 症 型 溶 血 性 レ ン サ 球 菌 感 染 症	後 天 性 免 疫 不 全 症 候 群	ジ ア ル ジ ア 症	髄 膜 炎 菌 性 髄 膜 炎	梅 毒	破 傷 風	パ ン コ マ イ シ ン 耐 性 腸 球 菌 感 染 症	急 性 脳 炎	
保健所名	ラ	痢	ス	ス	症	病	病	熱	ア	病	症	赤	炎	病	症	候	症	炎	毒	風	症	炎	
神奈川県計	3	38	3	10	388	5	11	2	12	1	6	47	34	4	1	86	20	5	10	2	8	1	697
横浜市計	0	12	2	6	336	1	1	1	10	1	2	29	8	0	0	48	15	0	1	1	2	0	476
鶴見		1			2							1				2							6
神奈川					3											2							5
西		1			6						1	3				1	2						14
中					1							2				8	2						13
南					2							5				7							14
港南区					1											2							3
保土ヶ谷		1		2	1	1	1	1	9	1	4	2			18	9							50
旭			1		4							2				2			1		1		11
磯子		1			1								2										4
金沢											1	3				5					1	1	11
港北		2	1		3							2											8
緑		2																					2
戸塚		1		1	1							1	1										5
瀬谷		1																					1
栄		2			2							1	3			2							10
泉				3	2																		5
青葉					300				1			3											304
都筑					7							2				1							10
川崎市計	2	9	0	1	20	0	0	0	0	0	1	10	1	0	1	14	0	1	8	0	0	0	68
川崎	1	2			8						1	5	1			8			1				27
幸		1			2																		3
中原		1		1	4							2				1		1	1				11
高津			1		2							1			1	1			1				7
宮前	1	1			4							2				2			3				13
多摩		2														1			2				5
麻生		1														1							2
県域計	1	17	1	3	32	4	10	1	2	0	3	8	25	4	0	24	5	4	1	1	6	1	153
横須賀市		2	1	1	1	1						3				2	3						14
平塚		3			2		1						4			2		1			1		14
鎌倉		1			1							2	1	2									7
藤沢		2		1	5			1	1				9					1	1		1	1	23
小田原					2		2																4
相模原	1	4		1	2	1			1		2	1	7	2		3		1			1		27
三原					1																		1
厚木		3			10	2						1				7						1	24
足柄上					3		6					1											10
久井																							0
津野		1			2		1					1	2			3		1		1	2		14
大和		1			3											7	2						13
茅ヶ崎													2										2

## 2 細菌検出状況

菌種・菌型別病原菌検出状況（ヒト由来）  
（月別）

横浜市衛生研究所  
（平成15年1月～12月）

菌種・群・型	採取月												計														
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	総数	内海外 検出数													
	総数	内海外 検出数	総数	内海外 検出数	総数	内海外 検出数	総数	内海外 検出数	総数	内海外 検出数	総数	内海外 検出数															
<i>Escherichia coli</i> (Total)*	7		3	1	4		2		7		8		7	1	10	1	368	1	111		3	2			530	6	
<i>Shigella</i> (Total)																										5	1
<i>Salmonella</i> Typhi							2	2																		2	2
<i>Salmonella</i> Paratyphi A										1	1							4	4	3	1					8	6
<i>Salmonella</i> O4 (B)	1																						2			7	
<i>Salmonella</i> O7 (C1, C4)						2				2		1						1						1		4	
<i>Salmonella</i> O8 (C2, C3)																								1		1	
<i>Salmonella</i> O9 (D1)							3		1	1		2								1		18				26	
<i>Salmonella</i> O3, 10 (E1, E2, E3)				1																						1	
<i>Salmonella</i> O18 (K)	1																									1	
<i>Vibrio cholerae</i> O1 & O139 以外											1	1									1					2	1
<i>Vibrio parahaemolyticus</i>												1		3												4	
<i>Campylobacter jejuni</i>					1	2					4	5								1						13	
<i>Staphylococcus aureus</i> *											7															7	
<i>Clostridium perfringens</i> *											20															20	
<i>Streptococcus</i> , A						3				6	3															12	
<i>Legionella pneumophila</i>	1																									1	
合 計	10		3	1	5		3		19	2	18	1	13	2	46	2	384	5	116	1	25	2	2		644	16	

【注】\*：急性胃腸炎の原因菌と考えられるもののみ記載

<i>Escherichia coli</i> の内訳（再掲）	採取月												計														
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	総数	内海外 検出数													
	総数	内海外 検出数	総数	内海外 検出数	総数	内海外 検出数	総数	内海外 検出数	総数	内海外 検出数	総数	内海外 検出数															
<i>Escherichia coli</i> 組織侵入性								1	1																	1	1
<i>Escherichia coli</i> 毒素原性			1	1					1	1	2	1	9		2	2										15	5
<i>Escherichia coli</i> 病原大腸菌血清型	6		2		4		1	2					5													20	
<i>Escherichia coli</i> EHEC/VTEC	1					1	5	8	6	9		366	97											1		494	
合 計	7		3	1	4		2	7	8	6	1	10	1	368	1	111				2	2	1			530	6	

<i>Shigella</i> の型別（再掲）	採取月												計															
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	総数	内海外 検出数														
	総数	内海外 検出数	総数	内海外 検出数	総数	内海外 検出数	総数	内海外 検出数	総数	内海外 検出数	総数	内海外 検出数																
<i>Shigella flexneri</i> 1a									1																	1		
<i>Shigella flexneri</i> 3a																											1	
<i>Shigella sonnei</i>										1	1	2															3	1
合 計										2	1	3															5	1

菌種・菌型別病原菌検出状況（ヒト由来）  
（月別）

川崎市衛生研究所  
（平成15年1月～12月）

	採取月												計															
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	総数	内海外 検出数														
	総数	内海外 検出数	総数	内海外 検出数	総数	内海外 検出数	総数	内海外 検出数	総数	内海外 検出数	総数	内海外 検出数																
<i>Escherichia coli</i> (Total)*	1					1			2		6																11	
<i>Salmonella</i> O4 (B)		1									1		1														2	
<i>Salmonella</i> O7 (C1, C4)						1			1		1	1															4	
<i>Salmonella</i> O8 (C2, C3)						1					1																2	
<i>Salmonella</i> O9 (D1)						1					1		2														6	
<i>Vibrio parahaemolyticus</i>								1	1		2									1							5	
<i>Aeromonas hydrophila</i>					1																						1	
<i>Aeromonas sobria</i>										1																	1	
<i>Campylobacter jejuni</i>	3			2	4	6		5	9	8	13		5		3											61		
<i>Streptococcus</i> , A			1			1			1	1	1	1	1		1									1		7		
合 計	4		2		2	5		12	8	19	15		18		9								3		4		100	

【注】\*：急性胃腸炎の原因菌と考えられるもののみ記載

<i>Escherichia coli</i> の内訳（再掲）	採取月												計																
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	総数	内海外 検出数															
	総数	内海外 検出数	総数	内海外 検出数	総数	内海外 検出数	総数	内海外 検出数	総数	内海外 検出数	総数	内海外 検出数																	
<i>Escherichia coli</i> 病原大腸菌血清型	1		1			1			2		3																8		
<i>Escherichia coli</i> EHEC/VTEC											3																	3	
合 計	1		1			1			2		6																	11	

菌種・菌型別病原菌検出状況（ヒト由来）  
（月別）

横須賀市衛生試験所  
（平成15年1月～12月）

菌種・群・型	採取月												計														
	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月		計		
	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	
<i>Escherichia coli</i> (Total)*	1		2	1	1		1		2				5		2		2	1	2					4		22	2
<i>Shigella</i> (Total)									2																		1
<i>Salmonella</i> Paratyphi A			1																								1
<i>Salmonella</i> 04 (B)										1																	1
<i>Salmonella</i> 09 (D1)										1																	1
<i>Vibrio parahaemolyticus</i>													1														1
<i>Aeromonas sobria</i>																			1								1
<i>Campylobacter jejuni/coli</i> 種別せず	1																										1
<i>Staphylococcus aureus</i> *									1											1							3
合計	2		3	1	1		1		5		2		5		4		2	1	4					4		33	2

【注】\*：急性胃腸炎の原因菌と考えられるもののみ記載

<i>Escherichia coli</i> の内訳（再掲）	採取月												計															
	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月		計			
	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳		
<i>Escherichia coli</i> 毒素原性	1		1	1									1		1	1											4	2
<i>Escherichia coli</i> 病原大腸菌血清型			1		1		1		2				5		1				2						4		17	
<i>Escherichia coli</i> EHEC/VTEC																		1									1	
合計	1		2	1	1		1		2				5		2		2	1	2					4		22	2	

<i>Shigella</i> の型別（再掲）	採取月												計														
	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月		計		
	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	
<i>Shigella flexneri</i> 2a									2																		2
合計									2																		2

菌種・菌型別病原菌検出状況（ヒト由来）  
（月別）

相模原市保健所  
（平成15年1月～12月）

菌種・群・型	採取月												計														
	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月		計		
	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	
<i>Escherichia coli</i> (Total)*													1										4		3		8
<i>Salmonella</i> 09 (D1)																	1										1
<i>Vibrio parahaemolyticus</i>															1												1
<i>Vibrio fluvialis</i>																	1										1
<i>Campylobacter jejuni</i>							2												1			1					4
<i>Campylobacter coli</i>												4															4
<i>Staphylococcus aureus</i> *						2																					2
<i>Clostridium perfringens</i> *													1														1
<i>Streptococcus</i> . A									1				1		1							3			1		4
合計									1				7		2							4			4		26

【注】\*：急性胃腸炎の原因菌と考えられるもののみ記載

<i>Escherichia coli</i> の内訳（再掲）	採取月												計														
	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月		計		
	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	総数	内訳	
<i>Escherichia coli</i> その他・不明													1										4		3		8
合計													1										4		3		8

菌種・菌型別病原菌検出状況（ヒト由来）  
（月別）

神奈川県衛生研究所  
（平成15年1月～12月）

菌種・群・型	採取月												計
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
	総数 <small>内臓外 産菌数</small>	総数 <small>内臓外 産菌数</small>	総数 <small>内臓外 産菌数</small>	総数 <small>内臓外 産菌数</small>	総数 <small>内臓外 産菌数</small>	総数 <small>内臓外 産菌数</small>	総数 <small>内臓外 産菌数</small>	総数 <small>内臓外 産菌数</small>	総数 <small>内臓外 産菌数</small>	総数 <small>内臓外 産菌数</small>	総数 <small>内臓外 産菌数</small>	総数 <small>内臓外 産菌数</small>	
<i>Escherichia coli</i> (Total) *	4	4	3		3	1	3		1	2	1	1	23
<i>Salmonella</i> 04群			1		1								2
<i>Salmonella</i> 06群												2	2
<i>Salmonella</i> 09群				1		1							2
<i>Salmonella</i> 015群	1	1											2
<i>Vibrio parahaemolyticus</i>								8	2				10
<i>Campylobacter jejuni</i>	1		2		1								4
<i>Clostridium perfringens</i>					1								1
<i>Streptococcus pyogenes</i> ⅠA群						3					1		4
<i>Neisseria meningitidis</i>									1				1
<i>Neisseria gonorrhoeae</i>	1		1	2	1	1							6
<i>Mycoplasma pneumoniae</i>								23	12	6	5	1	47
合 計	7	5	7	3	7	6	3	31	16	8	7	4	104

【注】\* :急性胃腸炎の原因菌と考えられるもののみ記載

<i>Escherichia coli</i> の内訳（再掲）	採取月												計
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
	総数 <small>内臓外 産菌数</small>	総数 <small>内臓外 産菌数</small>	総数 <small>内臓外 産菌数</small>	総数 <small>内臓外 産菌数</small>	総数 <small>内臓外 産菌数</small>	総数 <small>内臓外 産菌数</small>	総数 <small>内臓外 産菌数</small>	総数 <small>内臓外 産菌数</small>	総数 <small>内臓外 産菌数</small>	総数 <small>内臓外 産菌数</small>	総数 <small>内臓外 産菌数</small>	総数 <small>内臓外 産菌数</small>	
<i>Escherichia coli</i> EHEC/VTEC		1					2		1	1			5
<i>Escherichia coli</i> 病原大腸菌血清型	4	3	3		3	1	1			1	1	1	18
合 計	4	4	3		3	1	3		1	2	1	1	23



### 3 ウイルス検出状況

ウイルス検出状況(ヒト由来)

(月別)

横浜市衛生研究所  
(平成15年1月～12月)

ウイルス	採取月												合計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
Influenza AH3	49	6	2										6	63
B	9	30	33	5									2	79
Coxsackie A	2					1	1	1				1		4
	4							1	1			1	1	4
	5						2							2
	6						1							1
	9						1							1
	10						2	1	3	2				8
	12					1	1							2
Coxsackie B	1						2	2	1			1	1	7
	2												1	1
Entero	71								1					1
ECHO	7							1						1
	18									1				1
	30								1					1
Polio	2									1				1
(Entero 未同定)								3	5	1	1	1	1	11
Adeno	1		1					1	1				1	4
	2		2	1	3	1				1			2	10
	3				1	6		1			1			9
	4										1			1
	5						1	1						2
	6							1						1
(型 未同定)			1	1		1	1	1	1	2	1	2	2	11
HSV-1											1	1		2
RSV	3	1			1	1					4	11		21
Rhino			1								2	2		5
未 同 定	2		2	2		7	2	3	8	7	1	4		38
合 計	63	37	42	9	5	18	15	16	22	15	15	35		292

ウイルス検出状況(ヒト由来)  
(月別)

川崎市衛生研究所  
(平成15年1月～12月)

検出ウイルス	採取月												計	
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月		
インフルエンザ AH3	80	3	1				1						9	94
インフルエンザ B	31	17	3										1	52
コクサッキー A16						1			1					2
コクサッキー B1										2	1			3
エコー 7									1					1
エンテロ 71						1	17	4						22
アデノ 2				1									1	2
アデノ 3						1	2					1		4
アデノ 8				1										1
アデノ(型未決定)		1												1
単純ヘルペス 1					1									1
ロタ	1	5		1										7
ノーウォーク	1	1	5	2	11							2	6	28
合計	113	27	9	5	12	3	20	4	2	2	5	16	218	

(疾患別)

疾患名 検出ウイルス	麻疹	水痘	流行性耳下腺炎	溶連菌感染症	異型肺炎	感染性胃腸炎	乳児嘔吐下痢症	手足口病	伝染性紅斑	突発性発疹	ヘルパンギーナ	インフルエンザ様	HCLS(川崎病)	咽頭結膜熱	流行性角結膜炎	急性出血性結膜炎	細菌性髄膜炎	無菌性髄膜炎	急性脳炎	ライ症候群	脊髄炎	脳脊髄炎	その他のウイルス肝炎	性器クラミジア感染症	性器ヘルペス	その他	記載なし	合計
インフルエンザ AH3												92		1												1	94	
インフルエンザ B												52																52
コクサッキー A16								1								1												2
コクサッキー B1												1					2											3
エコー 7																	1											1
エンテロ 71								19									3											22
アデノ 2												1		1														2
アデノ 3															4													4
アデノ 8															1													1
アデノ(型未決定)						1																						1
単純ヘルペス 1															1													1
ロタ						7																						7
ノーウォーク様						28										1												28
合計						36		20				146		2	6		7									1	218	

ウイルス検出状況(ヒト由来)  
(月別)

横須賀市衛生試験所  
(平成15年1月～12月)

検出ウイルス	採取月												計	
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月		
インフルエンザ A H 3	25	6											1	32
インフルエンザ B	2	16												18
エコー 9								1	1					2
エンテロ 7 1							8							8
ノロ	2		1	7								33		43
合 計	29	22	1	7			8	1	1			33	1	103

(疾患別)

疾患名 検出ウイルス	麻疹様疾患	流行性耳下腺炎	感染性胃腸炎	手足口病	ヘルパンギーナ	インフルエンザ様	咽頭結膜熱	流行性角結膜炎	急性出血性結膜炎	無菌性髄膜炎	急性脳炎	食中毒	その他の	合計
インフルエンザ A H 3						32								32
インフルエンザ B						18								18
エコー 9										2				2
エンテロ 7 1										8				8
ノロ			36									7		43
合 計			36			50				10		7		103

ウイルス検出状況(ヒト由来)

相模原市保健所  
(平成15年1月～12月)

(月別)

検出ウイルス	採取月												計
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
インフルエンザ AH3	17	3											20
インフルエンザ B	4	5	2										11
コクサッキー A9							2						2
エコー 6							1	1			1		3
アデノ 2	1												1
アデノ 3	1						1	1					3
アデノ 19	2												2
アデノ 37							1			1	2	1	5
アデノ(型未決定)										1			1
小型球形			2	1								1	4
ノーウォーク(ノロ)												1	1
合計	25	8	4	1			5	2		2	4	2	53

(疾患別)

疾患名 検出ウイルス	麻疹	水痘	流行性耳下腺炎	溶連菌感染症	異型肺炎	感染性胃腸炎	乳児嘔吐下痢症	手足口病	伝染性紅斑	突発性発疹	ヘルパンギーナ	インフルエンザ様	HCLS(川崎病)	咽頭結膜熱	流行性角結膜炎	急性出血性結膜炎	細菌性髄膜炎	無菌性髄膜炎	急性脳炎	ライ症候群	脊髄炎	脳脊髄炎	その他のウイルス肝炎	性器クラミジア感染症	性器ヘルペス	その他	記載なし	合計
	インフルエンザ AH3												20															
インフルエンザ B												11																11
コクサッキー A9																		2										2
エコー 6																		3										3
アデノ 2												1																1
アデノ 3												1			2													3
アデノ 19															2													2
アデノ 37															5													5
アデノ(型未決定)						1																						1
小型球形						4																						4
ノーウォーク様(ノロ)						1																						1
合計						6						33			9			5										53

ウイルス検出状況（ヒト由来）

（月別）

神奈川県衛生研究所

（平成15年1月～12月）

検出ウイルス	平成14年計	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	平成15年累計
インフルエンザ AH1	45													
インフルエンザ AH3	89	68	6	2					1				15	92
インフルエンザ B	7	8	14	5										27
ポリオ 3	1													
コクサッキー A4	4						2	3						5
コクサッキー A6	6							1						1
コクサッキー A8	1													
コクサッキー A10								5	2		1			8
コクサッキー A12								7	1	1				9
コクサッキー A16	33													
コクサッキー B1								1	2				1	4
コクサッキー B2	4								1					1
コクサッキー B4	1													
エコー 6								1						1
エコー 11	2													
エコー 13	25													
エコー 14												1		1
エコー 30	2													
エンテロ 71	3							3	2	1				6
ムンプス	1				1						1			2
アデノ 1	1		1											1
アデノ 3	3												1	1
アデノ 4			1							1		1		3
アデノ 5	3													
アデノ 6	1													
アデノ（型未決定）											1			1
単純ヘルペス 1	4													
口 夕	1			10										10
小 型 球 形	17			8	4								6	18
ノ 口	126	17	6	54	4	2						4	31	118
デ ン グ	1													
未 同 定	1												1	1
合 計	382	93	28	79	9	2	2	21	9	3	3	6	55	310

(疾患別)

神奈川県衛生研究所  
(平成15年1月～12月)

疾患名 検出ウイルス	手足 口病	ヘル パン ギー ナ	イン フル エン ザ 様	咽 頭 結 膜 熱	無 菌 性 髄 膜 炎	食 中 毒	そ の 他	合 計
インフルエンザ A H 3			92					92
インフルエンザ B			27					27
コクサッキー A 4	1	4						5
コクサッキー A 6		1						1
コクサッキー A 1 0		8						8
コクサッキー A 1 2		9						9
コクサッキー B 1			1	1	2			4
コクサッキー B 2						1		1
エコー 6					1			1
エコー 1 4					1			1
エンテロ 7 1	5				1			6
ムンプス					2			2
アデノ 1			1					1
アデノ 3							1	1
アデノ 4			1	2				3
アデノ (型未決定)							1	1
口 夕						10		10
小 型 球 形						18		18
ノ 口						118		118
未 同 定			1					1
合 計	6	22	123	3	7	147	2	310

## 4 予防接種実施状況

### (1) ジフテリア・百日せき・破傷風（1期、2期）

年度 区分	11(年度)	12(年度)	13(年度)	14(年度)	15(年度)	15年度内訳	
						第1期	第2期
接種者数	208,531 人	359,497 人	360,402 人	356,081 人	368,280 人	323,760 人	44,520 人

### (2) 急性灰白髄炎

年度	区分	対象者数	接種者数	接種率
11		159,110 人	163,413 人	102.7 %
12		162,776	148,994	91.5
13		163,048	166,398	102.1
14		163,270	160,663	98.4
15		161,748	159,413	98.6
内 訳	第1回	80,791	80,965	100.2
	第2回	80,958	78,448	96.9

### (3) 麻しん

年度	区分	対象者数	接種者数	接種率
11		82,413 人	82,749 人	100.4 %
12		82,606	79,161	95.8
13		82,732	87,541	105.8
14		82,608	83,311	100.9
15		82,247	83,200	101.2

### (4) 風しん

年度	区分	対象者数	接種者数	接種率
11		196,014 人	120,259 人	61.4 %
12		165,081	103,792	62.9
13		158,305	76,102	48.1
14		177,780	86,766	48.8
15		175,886	94,263	53.6
内 訳	定期分	82,438	82,712	100.3
	経過措置分	93,448	11,551	12.4

## (5) 日本脳炎

年度 \ 区分		対象者数	接種者数	接種率
11		319,338 人	209,662 人	65.7 %
12		399,338	264,629	66.3
13		408,106	274,578	67.3
14		405,341	277,095	68.4
15		401,883	300,142	74.7
15年度内訳	幼児初回接種 (1期初回第1回)	82,740	79,994	96.7
	幼児初回接種 (1期初回第2回)	82,740	73,884	89.3
	幼児 (1期追加)	81,130	63,431	78.2
	小学生 (2期)	79,304	52,548	66.3
	中学生 (3期)	75,969	30,285	39.9

## (6) インフルエンザ

年度 \ 区分		対象者数	接種者数	接種率
13		1,196,075 人	315,562 人	26.4 %
14		1,254,544	423,682	33.8
15		1,357,143	546,330	40.3
内訳	65歳以上	1,350,231	544,621	40.3
	予防接種法施行令で定め る60歳以上65歳未満の者	6,912	1,709	24.7





## 6 神奈川県感染症機関一覧表

(※印は合同庁舎)

分布図 番号	機 関 名	所 在 地	電 話
—	横浜市衛生局保健部感染症・難病対策課	横浜市中区港町1-1	045 (671) 2463
1	横浜市 鶴見福祉保健センター	〃 鶴見区鶴見中央3-20-1	045 (510) 1832 ※
2	〃 神奈川福祉保健センター	〃 神奈川区広台太田町3-8	045 (411) 7139 ※
3	〃 西福祉保健センター	〃 西区中央1-5-10	045 (320) 8439 ※
4	〃 中福祉保健センター	〃 中区日本大通35	045 (224) 8332 ※
5	〃 南福祉保健センター	〃 南区花之木町3-48-1	045 (743) 8242 ※
6	〃 港南福祉保健センター	〃 港南区中央通10-1	045 (847) 8438 ※
7	〃 保土ヶ谷福祉保健センター	〃 保土ヶ谷区川辺町2-9	045 (334) 6344 ※
8	〃 旭福祉保健センター	〃 旭区鶴ヶ峰1-4-12	045 (954) 6146 ※
9	〃 磯子福祉保健センター	〃 磯子区磯子3-5-1	045 (750) 2445 ※
10	〃 金沢福祉保健センター	〃 金沢区泥亀2-9-1	045 (788) 7840 ※
11	〃 港北福祉保健センター	〃 港北区大豆戸町26-1	045 (540) 2362 ※
12	〃 緑福祉保健センター	〃 緑区寺山町118	045 (930) 2357 ※
13	〃 青葉福祉保健センター	〃 青葉区市ヶ尾町31-4	045 (978) 2438 ※
14	〃 都筑福祉保健センター	〃 都筑区茅ヶ崎中央32-1	045 (948) 2350 ※
15	〃 戸塚福祉保健センター	〃 戸塚区戸塚町157-3	045 (866) 8427 ※
16	〃 栄福祉保健センター	〃 栄区桂町303-19	045 (894) 6964 ※
17	〃 泉福祉保健センター	〃 泉区和泉町4636-2	045 (800) 2444 ※
18	〃 瀬谷福祉保健センター	〃 瀬谷区二ツ橋町190	045 (367) 5744 ※
19	横浜市衛生研究所	〃 磯子区滝頭1-2-17	045 (754) 9800
—	川崎市健康福祉局保健医療部疾病対策課	川崎市川崎区宮本町1	044 (200) 2441
20	川崎市 川崎区役所保健福祉センター	〃 川崎区東田町8	044 (201) 3113 ※
21	〃 幸区役所保健福祉センター	〃 幸区戸手2-12-11	044 (522) 7315
22	〃 中原区役所保健福祉センター	〃 中原区小杉町3-245	044 (744) 3113 ※
23	〃 高津区役所保健福祉センター	〃 高津区下作延274-2	044 (861) 3113 ※
24	〃 宮前区役所保健福祉センター	〃 宮前区宮前平2-20-5	044 (856) 3113 ※

分布図 番 号	機 関 名	所 在 地	電 話
25	川崎市 多摩区役所保健福祉センター	川崎市多摩区登戸1775-1	044 (935) 3113 ※
26	” 麻生区役所保健福祉センター	” 麻生区万福寺1-5-1	044 (965) 5100 ※
27	川崎市 衛生研究所	” 川崎区大島5-13-10	044 (244) 4985
28	横須賀市 保健所	横須賀市西逸見町1-38-11	046 (822) 4300
29	横須賀市 衛生試験所	” 米が浜通2-7	046 (822) 4057
30	相模原市 保健所	相模原市富士見6-1-1	042 (769) 8346 ※
31	相模原市 衛生試験所	” 富士見6-5-8	042 (769) 8348 ※
—	神奈川県衛生部保健予防課	横浜市中区日本大通1	045 (210) 5117 ※
32	神奈川県 平塚保健福祉事務所	平塚市豊原町6-21	0463 (32) 0130
33	” 鎌倉保健福祉事務所	鎌倉市由比ヶ浜2-16-13	0467 (24) 3900
34	” 藤沢保健福祉事務所	藤沢市鵜沼石上2-7-1	0466 (26) 2111 ※
35	” 茅ヶ崎保健福祉事務所	茅ヶ崎市茅ヶ崎1-8-7	0467 (85) 1171
36	” 大和保健福祉事務所	大和市中央1-5-26	046 (261) 2948
37	” 小田原保健福祉事務所	小田原市荻窪350-1	0465 (32) 8000 ※
38	” 三崎保健福祉事務所	三浦市三崎町六合32	046 (882) 6811 ※
39	” 秦野保健福祉事務所	秦野市曾屋2-9-9	0463 (82) 1428
40	” 厚木保健福祉事務所	厚木市水引2-3-1	046 (224) 1111 ※
41	” 足柄上保健福祉事務所	足柄上郡開成町吉田島2489-2	0465 (83) 5111 ※
42	” 津久井保健福祉事務所	津久井郡津久井町中野937-2	042 (784) 1111 ※
43	神奈川県 衛生研究所	茅ヶ崎市下町屋1-3-1	0467 (83) 4400
44	横浜 検 疫 所	横浜市中区海岸通1-1	045 (201) 4456
45	東京 検 疫 所 川 崎 支 所	川崎市川崎区千鳥町23-1	044 (277) 1856
46	横浜 検 疫 所 横 須 賀 出 張 所	横須賀市田浦港町1-49	046 (861) 6650
47	横浜 検 疫 所 三 崎 出 張 所	三浦市向ヶ崎8-48	046 (881) 3805
48	輸入食品・検疫検査センター	横浜市金沢区長浜107-8	045 (701) 9502
49	横浜市立市民病院	” 保土ヶ谷区岡沢町56	045 (331) 1961

分布図 番号	機 関 名	所 在 地	電 話
50	川 崎 市 立 川 崎 病 院	川崎市川崎区新川通12-1	044 (233) 5521
51	横 須 賀 市 立 市 民 病 院	横須賀市長坂1-3-2	046 (856) 3136
52	藤 沢 市 民 病 院	藤沢市藤沢2-6-1	0466 (25) 3111
53	平 塚 市 民 病 院	平塚市南原1-19-1	0463 (32) 0015
54	相 模 原 協 同 病 院	相模原市橋本2-8-18	042 (772) 4291
55	厚 木 市 立 病 院	厚木市水引1-16-36	046 (221) 1570
56	神 奈 川 県 立 足 柄 上 病 院	足柄上郡松田町松田惣領866-1	0465 (83) 0351

# 平成15年 神奈川県感染症

平成17年3月 発行

発行者 神奈川県感染症情報センター

(神奈川県衛生研究所)

印刷所 共進印刷株式会社